

「四国・住みたいまちに生きる」 ワーキンググループ 中間報告 1

四国研究プラットフォーム

事務局：産総研四国センター

書検員：徳島県四国センター

四国の国立5大学、高知工科大学と
産総研との連携協力・推進協定

- 徳島大学
- 鳴門教育大学
- 香川大学
- 愛媛大学
- 高知大学
- 高知工科大学
- 産総研

平成25年5月

産業技術総合研究所四国センター

はじめに

平成24年度、四国の6大学と産総研との研究プラットフォームでは、「四国・住みたいまちに生きる」をテーマにワーキンググループで議論を行いました。

平成24度新たに、本テーマを選択した理由を簡単に説明させていただきます。

大学、産総研などの研究者は、日常様々な研究開発に携わっています。理論物理学のような研究では、純粋に知的な好奇心に基づく場合もありますが、大多数の研究の場合には、その成果が社会で利用されることで、我が国のみならず、広く人類に有益な結果が得られることを想定して活動していると思います。しかし、研究者が「そもそもどのような社会を想定し、その成果を使ってもらおうと思っているのか」という議論を行うことは稀であります。

従来、多くの人々は、研究開発された新技術により、新たな価値が生まれ、利便性が向上し人類が幸福になることについて疑問を抱くことは無かったと思います。しかし、現在、必ずしもそうとは言えないのでないか、という疑念が人々の心に生まれているように思われます。このような時代において、研究者が「そもそもどのような社会を想定して研究開発をしているのかということ」を議論することが、とても大切になってきている、との認識に基づいて議論の場を作ることを提案しました。幸い、実務者会議の方々の御理解もいただき、本ワーキングを開始することになりました。

「四国・住みたいまちに生きる」とは、研究者が一人の個人としてどのような社会に住みたいか、四国を愛する地元大学の研究者の方々に集まっていただき、自らの研究成果活用の場所として、四国の将来の社会を議論していただくことが目的であります。本テーマは、いわゆる「あるべき論」のひとつではありますが、「30年後の誰か」ではなく、「将来の自分、将来の自分の家族」が住みたい場所、ここならば住んでもいいなと思える場所、としての将来社会を議論することで、現実性のない空論とならないよう注意したつもりであります。また、未来予測ではありませんので、「XX年後の四国の姿」のような議論も致しませんでした。

開始前には、議論に参加した研究者の方向性がバラバラで收拾がつかなくなるのではないかと、という危惧がありましたが、幸いなことに参加者には、現実的かつ興味深い議論をしていただいております。

まだ、議論は始まったところであり、整理する段階には至っておりませんが、中間的な報告の第一弾として、議論の内容を公表することに致しました。

最後に、ワーキンググループに参加いただいた先生方に感謝するとともに、継続して今後の議論への参加をお願い致します。

平成25年5月

産業技術総合研究所四国センター

所長 松木 則夫

「四国・住みたいまちに生きる」WG中間報告 1

四国の6大学と産業技術総合研究所（以下、「産総研」と略す）四国センターで構成する、四国研究プラットフォーム「四国・住みたいまちに生きる」ワーキンググループメンバーは、①平成24年10月2日、②平成24年10月17日、③平成24年12月26日の3回、検討会を開催し議論を行いました。

ここでは、検討会の議論を議事録的に整理するとともに、WG委員のメッセージを紹介して、中間報告1といたします。

「四国・住みたいまちに生きる」WGメンバー

徳島大学	田口太郎	大学院ソシオアーツアンドサイエンス研究部	准教授
	真田純子	大学院ソシオテクノサイエンス研究部	助教
鳴門教育大学	近森憲助	副学長（国際交流担当）・大学院学校教育研究科	教授
	金 貞均	大学院学校教育研究科	教授
香川大学	平尾智広	医学部 人間社会環境医学講座 公衆衛生学	教授
		医学部附属病院 副病院長	
	紀伊雅敦	工学部 安全システム建設工学科	准教授
愛媛大学	小林真也	大学院理工学研究科電子情報工学専攻	教授
	吉井稔雄	大学院理工学研究科生産環境工学専攻	教授
高知大学	大嶋俊一郎	総合科学系黒潮圏科学部門	教授
	大槻知史	総合科学系地域協働教育学部門	准教授
	※石塚悟史	国際・地域連携センター	副センター長
高知工科大学	渡辺菊真	システム工学群	准教授
	中川善典	マネジメント学部	准教授
産総研	松木則夫	四国センター所長	
	三木啓司	上席イノベーションコーディネータ	
	安藤 淳	ナノエレクトロニクス研究部門	主幹研究員
事務局		産総研四国センター	四国産学官連携センター

※特別参加

「四国・住みたいまちに生きる」WG検討会開催状況

1. 第1回WG検討会	4
・日時：平成24年10月2日（火）14：00～17：00	
・場所：サンポートホール高松 第55会議室	
・議事：①WG検討会の趣旨について	4
②WG委員の「住みたいまち」の紹介	4
③意見交換	13
2. 第2回WG検討会	17
・日時：平成24年10月17日（水）13：30～17：00	
・場所：サンポートホール高松 第64会議室	
・議事：①第2回検討会の進め方	17
②議論の進め方に関する意見交換	18
③グループに分かれての議論	24
④全体での意見交換	27
3. 第3回WG検討会	30
・日時：平成24年12月26日（水）13：30～16：30	
・場所：サンポートホール高松 第63会議室	
・議事：①委員による事例紹介（イタリア・ラブロ）	30
②事例を踏まえた意見交換	37
③都市的地域についての議論	49
④四国地域でのモデル事例を議論	51
⑤地域医療について	53
⑥とりまとめについて	55
4. 議論を振り返って～委員からのメッセージ～	56
（参考1）四国の市町村別情報（地図）	70
（参考2）四国研究プラットフォームについて	76

注) 本文においては、次のように取り扱っています。

①検討会の議事録のとりまとめに当たり、事務局文責により、「である調」と「ですます調」で編集しているところがあります。

②発言委員の敬称は省略しています。

1. 第1回WG検討会

①WG検討会の趣旨について

議論に先立ち、松木所長から以下の説明があった。

(松木)

1) 背景

現代の我々は、多くの解決困難な課題に取り囲まれている。それら課題に取り組むことは重要であり、また、実際に日々取り組んでいる。しかし、課題解決に取り組むだけでは、不十分なのではないかという思いにとらわれることがある。その理由は、個人として、あるいは家族と共に、そもそもどんな社会、どんな未来に生きることを望んでいるのか、その方向（ゴール）が不明瞭であることに起因しているようである。個人としては、そのようなゴールは明確かもしれないが、社会として共通のゴールは明らかとは言い難い。どこに行くのか分からず、目の前に立ちはだかる壁を苦勞して乗り越えているという感覚である。もちろん、「健康長寿」とか「安心安全」な社会など、方向性を示す言葉はあるが、具体的にどんな社会なのかは一向に明らかではなく、目標とすべきゴールとしては曖昧過ぎる。生活者の視点で、住みたいまち、住みたい環境をより具体的に議論することの意義は少なくないのではないかと。また、これらの議論は、課題解決に対しても新たな視座を得ることができるのではないかと。これが、本検討会を開始するに至った背景である。

2) 目的、議論の進め方

本検討会に参加する個々が想起する、具体的に住みたいまち、住みたい環境のイメージを、改めて「ゴール」と呼ぶことにすると、今回の目的は、そのゴールを議論し、個々の嗜好を超えた、共通的なゴールというものに到達できるかどうかを見極めることである。

もし、共通的なゴールがあるならば、それを可視化・具現化（ジオラマなど）を試みる。共通的なゴールに到達できないならば、その理由を考察する。現段階では、共通的なゴールは可能なのではないかと、という想定である。

まず、参加者が、四国のどこかに「こんな街に住みたい」、「こんな環境に住みたい」というものをイメージしていただく。断片的でもよいから、できるだけ具体的なものを思い浮かべ、なぜそれが良いと感じるのか、その理由を説明できるようにする。ゴールについて、具体的にそこでの生活を説明する。例えば、参加者自身がそのゴールに生活していると仮定して、いったいどんな仕事をして、子供はどんな学校で学び、日々の生活に必要なものはどこで入手するのか。休みの日はどう過ごすのかなどを伝える。ゴールを説明するうえで適切な、図表、写真、フレーズがあれば積極的に示す。ゴールの社会に現在の社会からどのようにすれば到達できるか（実現手段）については、説明は不要とする。また、未来予測ではないので、何年頃の実現するなどの議論は不要とする。ゴールの社会が、どのように運営されると想定するかは、できるだけ説明を試みる。「生活に必要なエネルギーはどうやって得るのか」、「仕事はどうしてそこでできるのか」など。それら個々のゴールが共通的なゴールとしてまとまるのか、それとも、本質的に異なるものに帰着するのかを議論する。共通的なゴールに帰着できれば、その可視化方法について議論する。議論のルールとして、他人のゴール案に対して否定的な意見を述べない、宗教・政治的な議論は行わない。

②WG委員の「住みたいまち」の紹介

出席委員から、思い浮かぶ風景等について

ポジションペーパーによる紹介があった。

なお、委員の「住みたいまち」のキャッチフレーズを列記すると以下のとおり。

「創発的集落」

「童謡に出てくる風景」

「お互いがお互いを大事にしつつ、つながりを育む地域」

「緑と水・まち・人が調和した四国」

「自然と文化がかおる四国の人・まち」

「ずっと暮らしたいまち・四国」

「四国グローカリズム」

「最先端技術がさりげなく入った田舎」

「四国の原風景を保っているが限りなくハイテクの町」

「持続可能な田園都市」

「希望に満ちた幸せなまち」

「いつもでつながってもしもで助け合う四国」

「幸福度ナンバーワン四国」

「半私半共の庭園連続住居」



(第1回検討会)

(真田)

イメージについては「中山間地域」をあげた。いろいろ課題はあるが、人数は少なくても世代間のバランスがとれていれば、今ある課題も解決されると思う。産業を経済指標で捉えると、空間的な話しが抜けていることが多いが、田舎に遊びに行く、あるいは住みたいと思ひ浮かべるときは、一番最初に引きつけられるベースは風景。中山間地域の場合は、田んぼや畑との生活が風景になっている。た

だそこに住んで都会に働きに行っているのではなく、その土地に根付いて、その土地を管理しながら生きている人がいるという状態が良い。キャッチフレーズは「童謡に出てくる風景」としている。今、まちづくりで関わっている佐那河内村の村長が、「童謡を聞きながら目を瞑ったら思ひ浮かぶような風景にしたい。」と言われたが、私もそのとおりと思ったのであげている。

(金)

キャッチフレーズとして、「緑と水・まち・人が調和した四国」、「自然と文化がかおる四国の人・まち」、「ずっと暮らしたいまち・四国」、「四国グローカリズム」をあげているが、まちと言えば、人、自然、もの。暮らし・環境という意味であらゆるもの。この3つがつながりを持ちながらうまくバランスをとってより良くしていくことが住みたいまちにつながるのではないか。徳島市内にはたくさんの河川があるが、河川に背を向けた都市計画になっている。河川に目を向けた水の都ができれば如何に素晴らしいかいつも考えている。自然豊かな都市風景というのがイメージとしてある。中山間地域の場合は、四国の原風景、それは歴史、文化的な建造物、街並みなど、それらが保存継承されながら、都市と農山村交流の拠点としての役割があればいいなど、調査を行っているときに思っていた。海岸地域では、都市近隣の港の開発と整備で人を呼び込む港湾空間づくり。郊外地域は、ベッドタウンとして高齢者が多いが、多様な居住者層が混在する居住環境、多世代が共生・共住する地域づくり。仕事は、ワーク・ライフ・バランスと四国内情報共有による人材交流。住居に関しては、安心安全（耐震化、省エネ住宅の整備）、住宅弱者の居住の安定確保（住宅セーフティネットのため、公的住宅の充実

化)。情報に関しては、情報ネットワークを通して四国の自然・文化・人・ものの魅力を国内外に向け発信。食糧は、四国圏内で自給自足できるような地産地消を目指す。コミュニティに関しては、つながりを単線ではなく複線型にできたら素晴らしいと思う。教育では、地域教育の推進と地域教育力の再生に人材バンクを活用できたらよい。交通に関しては、海と河川・陸をつなぐ四国交通ネットワークの構築。水上タクシーによる交通渋滞解消ができたと思う。河川と人の生活が結びついていないのはもったいないと思う。医療に関しては、保健・医療・福祉サービスの連携を。余暇については、農山漁村地域の生活と伝統文化を体験し、地域の人々と交流し合う「グリーン・ツーリズム」の活性化。中山間地域の都市と農山村交流についての拠点ということでは、中山間地域の空き家を十分活用できるようなことを。また、都市と中山間地域における2地域居住の推進ができたと思う。併せてそれに関する情報提供も。エネルギーに関しては、再生可能なエネルギーの活用ということで、四国で使えるものを十分に開発して地産地消できればよい。

(平尾)

生まれは九州だが、小学校の途中から高校まで高松、大学は四国外だったが、その後高松に住んで15年になる。そういうことで、40数年前の四国のイメージが残っている。住めば都という言葉があるが、過去に多くの土地に居住した経験から“その通りだ”と思う。飛鳥の時代からの地名が残っているところもあるように、歴史を重ねて今の街並みになっており、その点は尊重したい。四国には歴史を重ねてきた街、建物、街道、地形があり、そこに住むことの価値や誇りを感じる。具体的な生活については、絶対条件として職

(収入)、安全な水と食料、移動手段が必要。まずはこれらがないと話にならない。そういう中で、通勤距離は短く、住居は世帯のサイズにあったもので、近隣との適切な距離があり、安価で更新が可能。食糧やエネルギーは、できればこの周辺で賄える。交通は、日常的な移動手段が確保できる。教育は幼保～高校までが適当な距離にあって、しかも高校の選択肢が十分にある。情報については、整理して提供してくれる機能が存在する。余暇では、利用する時間があり、場所があり、選択肢がある。すべての人がコミュニティ活動に参加する。そういうイメージを描いている。

人生は二度あるといわれているが、三つの時期に分けられるだろう。生まれてから定年退職までと、定年退職から自立が出来なくなるまで。そして最後を迎えるまでの3段階である。それぞれどこでどう住むかも大変重要である。高齢化の先進地域の四国でしっかりした仕組みをつくれれば、日本が助かり、東アジアが助かる。キャッチフレーズについては、センスがないので苦手であるが、「最先端技術がさりげなく入った田舎」や、「四国の原風景を保っているが限りなくハイテクの町」といったところか。

(紀伊)

都市計画を専門にしている者として、多くの人が住みたいと思うようなまちを想像した。景観の観点からの理想的な都市とは、を考えると、利用価値を高める方向で考えるべき。ファサード、高さ、色彩に統一感の有る日本的、あるいは四国的な町並みがよい。中山間地域、海岸地域はよく分からない。郊外地域は一定の人口密度以下の郊外は自然に戻すべき。高松では、線引き廃止され郊外団地がどんどんできてきている状況で、そういった地域は今後厳しい状況になると思う。具体的な生活

場面もいろいろ書いているが、読んでいただければと思う。

<紀伊委員提出のペーパーより引用>

・具体的な生活場面

仕事は、製造業は電力価格上昇で縮小、高付加価値にシフト。魅力的な景観と安価な滞在費により、中山間地および島嶼部に IT 技術者等が集まるが定住しない（徳島？）。主要産業は農業と観光。農業は高付加価値化と組織化・大規模化により高級食材を輸出、国際競争力あり。観光は自然資源と文化資源を活用。高級から低級まで幅広いライン。年金支給年齢の引き上げ（90 歳）で体が動く限り働く。住居は、都市部では中庭型集合住宅が主要な居住形態となる。高密度だがセミパブリックな中庭があり居住環境を確保。中庭の運営を通じてコミュニティ形成するとともに、その質が資産価値に反映。都市計画税は人口密度が低いほど高くなる（一人あたりのインフラ負担額に比例）。資産家向けには四国産木材を使った戸建て住宅。食糧は、カロリーベースの自給率で 4 割。輸入多いが輸出も多い。大規模化・法人化で生産性向上。労働期間の延長で健康に気をつけるようになり粗食になる。エネルギーは、原発シェア低下で電力コスト 2 倍。メタンハイドレートはエネルギー密度が低く相変わらず採算乗らず。結局石炭が最安価なエネルギー源。日照時間が長いので太陽熱・光は普及。交通は、エネルギーコストの上昇に伴い、交通費用も増加。高齢化により自動車運転できない人が増加。集住が進み公共交通利用者が増えるが、交通事業は採算には乗らず、運営費はエネルギー会計または都市計画税から補填。公共交通を補完する手段として電動パーソナルモビリティが普及。ただし、バッテリー、安全技術等で高価なため個人所有ではなくシェアリング。市街地では従来型の高速移動可能な自動車は排除。低速

な公共交通、パーソナルモビリティ、徒歩の組み合わせで、十分な移動性、アクセスを確保。教育は、再教育の整備（いつでも勉強し直せる）。学費は安価。プラス地域プライドと共通の道徳（コミュニケーションスキル、ソーシャルキャピタル）⇄ 村社会。医療は、医療技術は進歩。医療に関する社会的な費用と効果の理解が進む（経済学）。情報は、ユビキタス。社会のセンシング（公益>プライバシー）、分析技術の進歩。社会の意思決定の重要ツールとなる。余暇は、労働期間が長くなるが、余暇は増える。休み休み働く。交通費用が高くなるので、滞在型の観光が増加。コミュニティ関係では、集合住宅のミックストユース、教育費低減により社会階層の固定化抑制。近所が顔を合わせるような仕組み。一定程度の時間を地域社会で過ごす。

（小林）

いろんなところで言っているが、人々が住みたいと思う要素の集約は、マンションや宅地の広告にあると感じる。「日々の買い物の便利さ」、「教育環境の良さ」、「医療環境の充実」、「職住の距離」、「美術館や博物館、劇場などの文教施設の充実」、「自然との距離」、「交通の便の良さ」etc、がよく見かけるフレーズ。そういったことが住みやすさ、住みたいということにつながっているのではないかと思っている。これらの観点から、現実のまち・環境を考察した場合、全ての点で最上であるものが理想かもしれない。具体的な生活場面について、四国が弱いところは何か、距離、物理的な距離、職場と住居の距離ではない。稀少な珍しいものに接しようとしたとき、例えば、世界的に有名な美術品を鑑賞したいと思ったとき、なかなか四国では見られない。図書館とかはウォーキングディスタンスにあり便利だとか、「自然との距離」など、現に四国

が全国的に高いレベルを達成しているものもある。神戸で育ったが、何かする場合は電車に乗っていかないといけなかった。そういう意味では松山は非常に便利。ただ、文化的な生活を送るための美術品鑑賞や演奏会の機会、企業活動を推進するための情報の入手、人と人との交流のしやすさの点では、欠けているところと思う。五感コミュニケーション環境の実現ができれば、そうした問題も解決できるのではと考え、それを踏まえたくて、具体的な生活場面を想像した。イメージとしては、ドラえものの「どこでもドア」。「どこでもドア」のように移動する必要は無いが、五感の全てで感じることができる、よりリアリティのあるコミュニケーションの実現により、仕事、余暇といったシーンのありようが大きく変わると期待できる。遠方にある美術品の鑑賞、コンサートへの参加が高度現実感をもって体感できる。空間的に離れた多地点の人々と、会議では無く職場の休憩コーナーのような場、雰囲気の中でのインタラクションが可能となる。これによりインスピレーション、(智の)フュージョン、イノベーションが起こる。遠方に住む家族とあたかも同じ空間に生活しているかのような臨場感をともなった日常を送ることができる。ここでの臨場感とは、存在を強く意識しなければならないものではなく、自然な存在感をもたらす臨場感である。空間的制約、人的制約から解放され、これまで教授者と学習者の共存性が求められた教育から開放された新たな教育形態が可能となる。これは単に映像コンテンツの配信では無く、多地点に散らばる学習者のグループワークが可能となる。なお、「住みたいまち」が、「他の地域に比べて住みたいまち」なのか、「皆が住みたがる現存のまちを超越した理想のまち」であるのかによって議論は大きく変わると思うが、連続性を持って議論していく

必要があると考えている。

(大嶋)

四国は大きな困難に囲まれていると言われたが、私は、俯瞰的に少し離れたところから四国を考えてみたい。バックキャストिंगというか、理想をまず言ってみて、現状からギャップを整理していくのはいいのではないかと思う。その中で、基本的に日本はハウトゥばかり。根源的に物事を考えないと本当の解決はできない。そういうところが大学の本来の役割、機能であるが、費用対効果ばかりで評価される仕組みになっており大変残念なこと。自然と都市機能が融合したような地域ということで、我々が成し遂げてきた科学技術をみすみす捨てることはもったいない。ただ、科学技術には必ず光と影の部分があって、光と影の部分を整りながら我々の先人が作り上げた技術をうまく自然と融合するような形で機能させていくという考え方を大事にしないといけない。物質的な部分、目に見える部分にもものすごく力を入れて、経済というお金の流れのもとで動いてきたが、大事なことは、目に見えない心の部分をもう一回復活させる必要があると思う。そのときに大事なものは「コミュニティ」の復活。ではどうしたらよいか。便利すぎる社会がコミュニティを壊している。みんなが一人で生きられるような錯覚に陥っている。しかし、一つ一つを見てみるといろんな人が関わっている。ということで、不便のススメではないが、不便になることで人の繋がりが復活してくる。例えば、昔は舗装されていない時に雨が降ったら、子供が溝に嵌ったら大変だということで、近くの大人が手を引っ張って家に連れて帰るなどしていた。不便であることでコミュニティができる。今はそんなことをすれば、直ぐに警察に連絡され、とんでもないことになる。不

便のススメは乱暴な言い方だが、便利過ぎる社会をもう一回考察して、どこまで便利にするのか、ひとつ整理してやってみる必要があると思う。もう一つは、絶望は死に至る病であるとしているが、人間は必ず死ぬので死から目をそらさず、死を感じることによって濃く生きる、その辺をうまくスパイスとしてかけながら社会を創生していったらどうか、四国とは全然関係ないが、概念的なところで思っていることを話した。なお、キャッチフレーズは、「希望に満ちた幸せなまち」。

(大槻)

4年前に四国に来たが、それまで四国をなめていたところがあった。来てみると伝統的な文化や景観が至る所に残っている。特に高知はそういうところに愛着とプライドをもっている。所得が少ないのに楽しく幸福そう。これはすごいと思う。皆が東京にはなれないことを考えると、大切なのは地域や社会に対する愛着とプライドではないか。私がフォーカスする地域は4つ全てであるが、所得はほどほどであってもプライドと愛着を持ってゆったり幸福に暮らせる四国が目指せればいいと思う。そのためには、シーン的には、地産地消でもって誇りをもって食べられ、来た人にもそれが自慢できる。休日は祭りやイベントもたくさんあって、参加者が一緒に楽しい時間を過ごせるような状況であったり、あるいは、高齢者の知恵や経験が若者に代々受け継がれていることによって、お年寄りも最後までプライドを持って生きられるということ。そして、愛着とプライドを如何に所得につなげるか、四国は、地域間はバラバラであり、交流(行き来)して、他者も含めてお互いに楽しめ、それが地域活性化につながるような社会が理想。あこがれて、永住までではないが、短期・中期の滞在者が来ること

によって地域の担い手になったり、お金を落としたり、これが理想。イタリアの片田舎の島のような、そんなことを思っている。そのため、防災が地域間交流のトリガーになると思っている。防災をベースにして四国の中での交流、連携を行うことによって、四国がプライドを持てるような、地域の資源が所得に足されるような社会的に持続的な暮らしにつながるような設計ができないかということを考えている。そういうことで、キャッチフレーズとしては、「いつもでつながってもしもで助け合う四国」、「幸福度ナンバーワン四国」としている。

(渡辺)

今あるまちを眺めていて違和感や好ましくないと思うことがある。戦後の高度経済成長以後に開発されてきたことが気になってきており、原風景的なものにはいいなあと思えるところがある。中山間地域と郊外地域を切り分けてみたが、四国の場合は、戦後とその前の原風景がクッキリ見えやすい状態が残っている。関西にずっと住んでいたが、関西の場合、履歴が激し過ぎて原風景が見えない。四国はそこが強みと思った。中山間地域は、純粹風景的なことで考えると、どう維持するかというソフトの話になるのではないかと。一方、郊外地域は、農村みたくなところがあってスプロール的に戸建ての住宅が適当に建っているのが多いが、そういう原風景がゴチャットなところでは何か考えられるのではと思った。キャッチフレーズは、「半私半共の庭園連続住居」としているが、現存性みたくなスプロールしているところにどういう評価を与えるのかということ考えた。郊外地域が面積的には多いので、いわゆる原風景が持っている質を保持しながら、新しく出来てしまっているものも活かしながら、重なりの中で、

原風景も生きて、今あるところも生き延びることを考えた。戸建て住宅の場合、自身が満足すれば隣は関係ないという状態なので、風景やコミュニティにしても何かの制約を受け、それぞれが共通の意識をもって共有する意識をもたないと成り立たない。自分が快適で自身の趣味が合っていたらと思うような戸建てを考え直すようなことをしないといけないと思う。それが可能かどうかなどを考えていったらいいと思う。郊外というと戸建住宅地が真っ先に想起され、画一的な新興住宅地、あるいはもと農地に乱雑に新規住宅がスプロールする風景がほとんど。こういった地域の住宅は個々に前庭を持ち、ガレージを持ち、境界を塀などで区切り、などなど、それぞれがバラバラであり、決して好ましい景観を生み出しているとは言い難い。



(資料：渡辺委員提供)

例えば、かつてよく見られた長屋（一つの屋根を共有しながら住居が連結していく形式）が並ぶような風景へと転換できないかと思う。要するにつながっていながら、同時に個別性でもあるような風景である。「長屋化」することで壁面線がそろい、前面の庭が連続していくであろう（空地の魅力ある連担）。また、個別性に関しては裏空間に裏庭やその他個々の自由があるなどの工夫が考えられる。決して画一的に墮すこともないと思われる。

いずれにせよ、全てを個々が占有せずに「空

間を共有」していく姿勢なくして「景観」というものはないように思われる。郊外は郊外となる前の風景があったはず。その特色が反映されるような風景でありたい。

(中川)

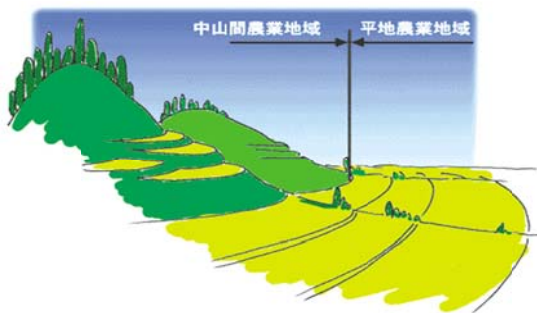
そもその議論は大事で、興味あり。ただ、雲をつかむような感じ。地域を見ると、峠ひとつ違えば、異なる歴史がある。具体的な場面を想定しないままでは議論できないのではないかと漠然とした問題意識がある。自分が接点があるのは「中山間地域」。減少する若者について、根本は「職」と「教育」につきると思う。誇りを持って従事できるか。値が付かない林業では生活できない。農業しかない。如何に付加価値を付けるかで努力している中堅世代の農家はたくさんいる。ただし、農協を動かしているような人達は、60代以上の人で、その人らは新しいことをやっていかなくても、年金暮らしでそこそこ食べていける。40代、50代の次世代は、何を考えているか疑問。そういう人達が新しいことをドンドンやっていくという姿が、日本中のあらゆる中山間地域で活発に起こってくるという動きが、私自身にとっての理想と思っている。教育については、子供が成長するにつれて問題が大きくなる。高知は全国学力テストの結果は低く、山奥の子はもっと低い。そんな中では子供を育てられないということで、外に出したり、家族で引っ越すこともある。山奥でも能力があれば、どんな大学でも受かるくらいの教育の仕組みづくりが必要。そのため何をやるかの明確な答えはないが、例えば、地域で生まれ育った人で知識学歴、技術などを身につけて都会で成功された方がいると思うが、そういう人達が、第2、第3の人生として還元する仕組みが当たり前のことになったとするとうまくサイクルしていくとの期待

を持っている。自身まだ35歳だが、定年後は山奥で塾でもやりたいと思っている。

(安藤)

私自身はあと半年もすると40代が終わる年齢になっているが、50歳以上になると自分の中高生くらいまでの過去の経験の美化された部分が印象に残っていて、それがノスタルジックとなっている傾向がある。「景観」でいいなあと思うところは、その傾向が転写されているのではと思う。過去、中核都市であったところに住んでいるが、開発が制限されており、兼業農家もあり田園風景が残っている。都市的な機能ももっているが、いわゆる田舎。しかし、サラリーマンにはいいところという位置づけ。

中山間地域が、緑が深くなる地点から上部と言われると、私的には「う～ん」という気になる。



(資料：農林水産省)

なぜかという環境整備に耐えられないから。耐えられる人にはいいが。尺度が人によって少しずつ振れるところがあるため。「住みたいまち」は不安感がないというのが一番の大前提。それは衣食住なのか水なのか、職業というのは、お金がないと困るようなシステムになっているので、職業が生き甲斐ということにすれば、それが重視されるが、お金はいらぬという観点もあるかもしれない。生きたいという欲望があるとすれば、食べ物、

水が非常に重要になる。地震で苦労したので、必要最小限ないと不安な状態になる。次には不便でないということ。ただ、人から見て不便と思っても、それを不便と思わないで好き好んでやっている人も世の中にはいるので、議論のあるところかもしれない。不便かどうかより不便を感じさせないというところ。余暇などの+αの部分で満足感が得られれば、その人にとっては住みよいということになる。不便さ以上に余暇が重視されると、すごく趣味性になってくる。選択できることがいいのか。わがままで経済的な観点は考えていないが、例えば、今は都会でないとやりにくい仕事、クリエイティブな仕事でも、自然の中でやれるものもある。これは究極にあるのかなと思う。住居は、土地環境に適合(省エネかつ低コストで快適な室内環境を得る)し、維持や増改築が容易。自然災害にも強い。再生可能エネルギーのフル活用。近隣との適切な距離感。住み替え(転居)が容易。食糧やエネルギーは最小限必要なものであるが、いざとなったら近くで賄えられるというまちが住みたいまちと思う。地産地消で嗜好品を除く食品が安全かつ適切な価格で容易に入手。一部は自家菜園も。飲用可能な原水が確保可能。より環境負荷の低いエネルギー源。一部は、自立型エネルギー源で賄う。交通は、必要なところは病院、学校、買い物などであるが、公共的な機関やタクシーで行くことができるところ。10分はいいが30分待たされるとつらい。また、安全・安心に通行できることも必要。車歩分離や夜間照明などちゃんとしている。教育は、遠隔教育など導入されているが、バーチャルでなくリアリティな接点も必要であり、通うことを考えたいので、その点で時間設定している。病院は、やはり医療の質により時間距離。ただ、遠隔医療というものが入ってくるかもしれない。情報は、遠

隔を代替するということに、今よりも情報の質を高くして近くにいるように錯覚させる五感情報というものが期待されると思う。それもストレスなく受けられるような。現実的には以上に述べた具体的な生活が得られるところは全くないと言っていいと思うが、その裏付けとなる技術やサービスがコストに見合う形で提供できていること。また、システムや法規制については全く考えておらず、それらはなるようになるという前提。

第1回の検討会に欠席された委員で、事前に提出があったポジションペーパーについて、事務局から紹介した。

(事務局)

<田口委員提出ペーパーより引用>

- ・想定した景観：中山間地域
- ・キャッチフレーズ：「創発的集落」
- ・具体的な生活場面について

仕事と余暇がバランスよくあり、煩わしくないが密接な関係が近隣コミュニティで作られ、中山間地域でありながら創発的な知的刺激が日常生活の中にある生活。

- ・検討会の趣旨について

本議論が何を意図しているのかがまったく分からないし、大学研究者を集めて議論する理由も不明。「どのような社会」を議論することによって社会にどのようなメリットがあるのか？ また、ジオラマにしてなんの意味があるのか？ などが理解不能。

<近森委員提出のペーパーより引用>

- ・想定した景観：都市的地域
- ・キャッチフレーズ：「お互いがお互いを大事にしつつ、つながりを育む地域」
- ・思い浮かぶ状況

緑豊かな公園が随所に見られ、市電やバス

など公共交通機関の利便性がよく、自家用車を使わなくとも移動がたやすいために交通渋滞もない。また自転車道と歩行者専用道が、それぞれ整備され、車よりも自転車や歩行者の姿をよく見かけるようなまちに住んでみたい。

・具体的な生活場面

仕事は、ビルではなく、緑の中の平屋の事務所で朝7時半から午後4時ぐらいまで仕事をして、帰宅して趣味の読書に親しむこと。住居は、家族の団らんが促されるようなオープンスペースを中心とする。食糧は、地産地消を原則とするような食糧供給・消費システムの確立。交通は、公共交通中心の交通体系。教育は、地域をベースとして、教科学習と総合的な学習がバランスよく、お互いのつながりを通して相互の教育効果の高めあいが意識されながら実施されること。医療は、患者の自己決定が尊重される医療と保険制度の維持・充実。情報は、ハイテクとローテクがバランスされた情報提供の仕組みが必要。余暇は、人それぞれに余暇の過ごし方は多様であることが認知される社会。コミュニティ関係では、町内会などの組織が行政の末端組織ではなく、地域住民のための組織となり、地域の活性化に貢献できる。エネルギーは、再生可能なエネルギー、特に太陽光発電による発電の個別化が促進されること。全体としては、自己決定、住民相互理解、公共的なものと個人的なものとのバランス、多様性と個性の十全な認知などが地域住民同士のかかわりの中で促されて行くような地域を想定している。一言でいえば、住民一人ひとりの個性及び意思決定と公共性とのバランスが、すべての項目において取れているような地域を想定している。

<吉井委員提出のペーパーより引用>

- ・想定した景観：都市的地域
- ・キャッチフレーズ：「持続可能な田園都市」
- ・思い浮かぶ状況

「田園都市」をイメージ。職住近接、緑豊かで自立した都市。省エネ/将来に対する不安の払拭/人間性の回復（生産の喜び）。

- ・具体的な生活場面

交通は、高いモビリティを有する都市であり、公共交通は無料で提供され、自動車交通は必要最小限に、自動車→公共交通によるにぎわいの創出。

※上記の例として、次の4例の提示あり。

(資料：吉井委員提供)



①パリのフリーマーケット



②ストラズブルグの中心市街地



③ポートランドのトラム



④シドニーの無料バス

③意見交換

次に、意見交換を行った。

(三木)

「景観」をメインに据えて語ってもらったが、難しい面もある。四国と言っても、30～40万人の都市、周辺の中山間地域などいろいろであり、現実の環境は随分違う。高齢者と若者が住む地域が違ってきている。限界集落的なところは、経済性から見捨てられるような状況やコンパクトシティなどの取り組みもあるなど、四国のなかでも大きく差が出てきている。ビジョンにおいては、現実の克服のために、飛び跳ねた議論が最初にできれば収束しやすいと思う。

(安藤)

極論的には、産業、工業化時代はコスト追

求で大都市へ移動。その過去の歪みが過疎化という弊害を生んだ。不便を選択してでも、過疎化をなんとかして支えるのか。この地域で、この方法でといった代表的なところを想定して話を進めるのが頭の体操になりやすいのではないか。中山間地域をあげられた方が多いが、都市的地域も上げられているので、地域ごとにピックアップして議論するのがやりやすいかもしれない。

(真田)

「キーワード」の一つひとつを見ると、例えば、交通ならアクセスが良い方がいいし、風景は風景で大事にしなければいけないということになる。しかし、道路を拡幅すれば風景が壊れることもある。では、それをどうやって両立するか。そんなことを考えると、「不便」をポジティブにとらえることも大事なかなと思った。社会的コンセンサスでは大衆の価値観を求めることが本当に大切かどうかは疑問。広島出身で、東京に14年、徳島に来て5年半。東京は異常と思うようになった。高知は面白そうと思った。ただ、社会的に図っていることと実際に起こっていることは必ずしも一致しない。四国の特性（島国等）を考えると、都会的＝みんなに受け入れられるモデル、あるいは、特異的な価値観＝不便を受け入れるモデルか。オーナー制度というものがあるが、関西の人は、四国まで橋代を払ってまでは来ない。奈良、和歌山などに行く。大都市圏を持たない四国は、田舎として成立するモデルづくりを考えた方がよいと思う。

(金)

「社会的コンセンサス」は、四国圏内でのコンセンサスであって日本全国でのそれではない。最初に説明したように、住みたい四国は、人、自然、もの、の3つが密接につなが

り合う状況で考えるとイメージしやすい。3つがバランスよくつながるコトを考えたとき、少なくとも、美しく、便利に生きるということを我々は目指すが、ただ、その根底には持続可能な社会、持続可能な開発という環境に配慮して、住みやすさや便利に生きるということを目指す必要がある。「Delight 設計」という話があったが、何が魅力かは価値観が問われる。その価値観は、普遍的なものを目指すべき。四国での普遍的な価値観、魅力ある四国とは何かということをおバックにおいて議論を進めた方がよいと思う。「景観」では時間が見える。それぞれの地域の特徴を活かしながら、歴史と文化が見え、しかも利便性の高いまちとは何か、そのバックグラウンド（環境共生）を意識しながらまちの特徴を考えていくと見えてくるのでは。四国を意識した「住みやすい」ということを共通キーワードとして考えていったらどうかと思う。

(平尾)

時間軸として2030年、40年、50年までをイメージした。エリアについては、四国に一体感はなく、「生活圏」には県域は関係ない。そんなイメージで考えた。山間部は、森林、水源、防災といった下流域の生活の安全弁でもあり、特別に議論をする必要がある。自然との関わりについては、戦後の開発の歪みを戻す作業が残っている。そのままの自然が残っているところは少ないが、自然と人間が折り合いをつけた里山、里浜がある。街並みもそういう考え方で見たらよい。

(小林)

松山に住んで14年目、京都→神戸（大学は大阪）→京都→金沢→松山と移り住んできた。松山は住みやすい。ウォーキングディスタンスに日赤、個人病院、学校、スーパーな

どあって居住環境は悪くない。空港も近くで出張も便利良い。バランス良い生活ができています。ただ、文化的な面では都会に比べて欠けている。そういう観点で見ると、松山は80点はいつている。一方、県内全体を見ると、例えば、日赤に来る救急車を見ると、遠方から来ている。そんなところ（救急医療が手薄な地域）には住みたくない。また、学生達を見ると、地元で就職できない現実がある。調べたことがあるが、高齢者は金持ち。経済活動はやっているが、最終的には首都圏の企業等に吸い上げられている。まずい循環になっている。ついては、もっと若者が住めるまちに、そして経済がその中で動くまちにしないといろんな人達が住みたいと思うまちにはならないと思う。

（大嶋）

50年先は遠すぎる。近すぎてもいけない。20～30年後のイメージで時間性を考えることも大事。いろいろキーワードはあるが、四国の特徴を活かしながら設計して行って、現状と理想のギャップが見えてくるので、バックキャストしてそのギャップを一つ一つ解決できることなのか取捨選択し、価値観などのいろんな指標を入れながら進めていくと具体的になっていくのではないかな。

（大槻）

Delight 設計の「魅力品質」という考え方は大切と思う。交通や医療といった四国の弱いところの話は置いて、まずは四国の良いところ、伸ばせるところをキチンと話合おう。そしてその方向が決まった上で、それとからめて最低限保証しなければならないような事項について、Delight 品質と絡めて如何に高めていくかというふうに進めないと、みんな落ち込んで終わるということになりか

ねないのではと思う。四国は多様であるが、例えば、高知市内と領北は違う。四国をタイプ分けして、それぞれがどういうふうに関連してお互いに支え合うかという域間連携の視点も入れないと、サステナブルな未来は描けないのではないかなと思う。コンパクトシティの研究もしており、経済合理性追求の極端な話しができることもあるが、未来を考えると地域を活かすためにはゾーニングが重要。撤退する地域、手入れして存続する地域、もっと伸ばしていく地域など。ただ、撤退地域は生活に文化やプライドを持ちつつ消えていくように、いわば尊厳死で。撤退の部分と残すための持続的な社会のための仕組みづくりという話しをキチンとつないでいく議論ができればと思っている。

（渡辺）

タイムスパンについては、共通の了解が必要ではないかな。法規などのしがらみは準備しないでよいという設定なら、30年後程度が良いと思う。自分自身は建築デザインに関わっており、常に可視化することにエネルギーを注いでしまう分野であるが、仮想のことをやると、それが何の役に立つのかとよく言われる。工業だから今この時点でどう役に立つのかは大事だが、そこが怪しいとずっと思っている。絵を描く立場で言うと、提示するものが、ある種ドキッとするとところがないと意味がないと思う。それは、大前提で当然普通に了解されているところはいじらなくて良いよねというところが、そうじゃないよというキバみたいなものを持っているので、タイムスパンを決めて議論した方が提案したいものが落ち着いていくのではないかな。なんとなく扱いやすいところに落ち着くのはいやだなと、絵描きの立場では思っている。

(中川)

断片的に思うところ2つ。我々にとって住みやすいということだが、大学の研究者という特異な人を集めてやる正当性はどこにあるのか。大学以外の地域の人達が入ってもよいのではないか。最終的に形になるものという点について、誰をドキッとさせたいのか、明確にしておくべき。行政の市長や町長か、一体誰か。そういうところを議論の出発点にするべきかと思う。

(安藤)

タイムスパンは30年ぐらいがコンセンサスか。社会的コンセンサスが得られるかということについては、生活場面がストーリーであると思うが、そのストーリーは自己矛盾など明らかに破綻していなければそれでいいと思う。そのストーリーを選択するかどうかは別の問題、個人の嗜好になる。まとめる際に、似た項目を抽出してまとめると破綻する。先生方はストーリーをつくって話されるが、事務局が切り刻んで共通タームを抽出してしまうと、元のストーリーのポリシーは無くなってしまう。こんなことはやってはいけない。今回、ストーリーは重要であるが、相反するストーリーであってもよい。足りないものを抽出する。例えば、技術、法規制、慣習、文化等々あるが、伝統的、文化的にやってきたものでない部分は変えられていくはずであり、それを抽出できればある意味、共通的に扱っていける。そのところを議論していくというやり方もあるのでは。ただし、その前の段階で折角描かれたストーリーは、後の議論のときに崩してほしくはない。ストーリーの全ては、時間も人の知恵も限られており拾えないが、夢のあるストーリーを出して分析して解決策というか案を考えるということをやると、多分思うところのある人はそれを見

て、自分たちなりにやっていただくというふうな、きっかけになり得ると思う。

(松木)

タイムスパンについては、あえて設けなかった。時期を設定すると課題解決的になってしまうと考えた次第。ただ、皆さんが入れた方がよいということであれば入れる。大学人だけの議論については、研究者は社会に役立つ‘研究’をしており、それを出していただくことを想定。本題に関してはある部分では深く研究されているので、異なる分野の先生方に議論いただくことは価値がある。アウトプットを誰に向けて出すかについては、6大学との連携事業として何らかのものを出さないと先生方の意欲を削ぐことになると思うので、そういうところが想定出来るようなアウトプットができればいいなと思っていた。ただ、それだけ考えると非常に矮小化された課題設定になってしまうので、それを最初に出したくなかった。出さないとターゲットがハッキリしない。この最大の矛盾は分かりつつスタートしているが、いいお答えはない。議論を行う中で、皆さんがそれはそうだねと言われるような部分を膨らませていって、あえて私は最初の段階のスタートのきっかけを与えるだけで、後は皆さんに意見を言ってもらって、その中から共感を生むものについて議論を深めていけたらよい。そういうスタイルを採りたいと思った。だから、今のところ決まっていない。自分が想定していなかったことについて、便利さを追求する場合はスケールモデルで議論は可能。一方、不便さを捉えつつ住みたいまちを考えるのも面白いと思う。地域については、高知県は面白いと言われるが、34万人の高知市以外は2万人弱から5万人程度まで10市、数千人規模が多いが23町村ある。これは面白い構成。単に

ある場所を考えるのではなく、ゾーニングして連携を考える方向は面白いと思った。例えば、高知がこうなったらということで議論を進めることは面白いかなと思った。そのほか、前向きに検討できない項目は落としてもよいと思う。「職」と「教育」は避けて通れないポイントだと思う。都市（地域）の魅力を掘り下げないままで終わりにほしくない。例えば、ゾーニングに関して、高知市では「サービス」、中くらいの地域では「ものづくり」が、小地域は「食料とエネルギー」といったモデルも想定できるかもしれないと思った。今までのスタイルだと次にいけないことが多い。新たなプロジェクトを提案することは我々の仕事であるが、なかなか、現状の中では書くのは難しいと思っているのは、そもそもどうしたいと思っているのかの議論なしに、最先端のリニアモデルで提案していくことについて私自身閉塞感を感じているので、いろんな意見をいただければと思う。高知という話もあったが、最終的には自分たちの地域を考えながら議論していただければと思っている。ただ、原形として、原風景の強みという話があったが、原風景の中に新しいものがぐちゃぐちゃと戦後にできたものがあって、私はそれが気になっていたが、残っていることを強みだというふうに考えれば、そこからイメージしていくことができるだろうと思っている。.....

2. 第2回WG検討会

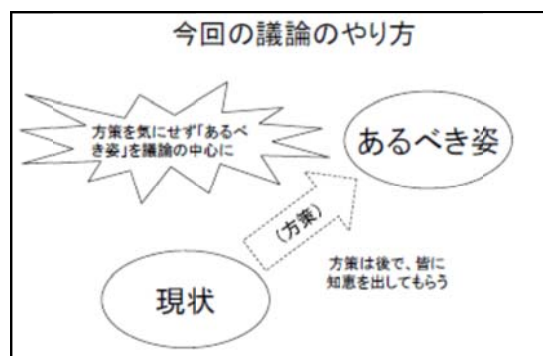
①第2回検討会の進め方

議論の目的等も含め第2回検討会の議論の進め方について、松木所長から説明があった。

(松木)

一般的な議論の成り行きは、現状を踏まえて方策を考えて「あるべき姿」を求めるが、その結果、「方策のための姿」に議論がすり替

わる。そこで、本検討会の議論の目的を再定義してみると、参加者ひとりひとりが自ら「住みたいまち」を考え、その「まち」の“モデル”を作ること。そこでは、現在の技術水準で考え、未来予測は不必要。「あるべき姿」とはそれらのモデル。「都会」、「田舎」といった2元論モデルにならないように拡がりのあるものができればいいなと思う。



(資料：松木所長)

今回、提案したい議論の進め方は、前回の議論で着目したものの2点。ひとつは、「不便さを前向きにとらえる」を出発点にグループで議論を進める。「不便さ」を拡大解釈し、不適切さ、価値の低さ、などマイナス面の意味と解釈するのはどうか。もう一つ、「前向きにとらえる」とは、「我慢する」、ではなく、「不便さ」の代償として得られるプラス面により、生活全体の満足度、QOL等が向上すると考えられるのではないかと。つまり、プラス面とマイナス面がバランスした、特徴的なエリアモデルを考える（その中に“住みたいまち”を見出す）のはどうか。また、複数のエリアモデルを考えて四国全体をカバーしたい。言い換えれば、大都市は外してよいという意味。そもそもこんな議論はおかしいということも議論していただいて構わないが、密に議論するためグループ討議いただいたらどうか。そして討議後、各グループからどんな議論があったかを紹介していただきたいというのが私の提案。私自身、東京が長かった

ので、自身が考えた一般的な大都会のプラスとマイナスについていくつか例をあげることができる。エリアについても書いているが、ざっくり言って、「エリア0」は原始林や自然そのままのところ、「エリア1」は第一次産業的な部分、「エリア2」が第二次産業的な部分、「エリア3」が第三次産業、サービス産業的なところとしてあげている。これで考えていくこともいいし、もっと細分する、あるいは全然違った切り口で分ける考え方もあるかと思うが、ある部分だけで集約しないで、四国全体をカバーできるような統一的なモデルができればいいと思う。そうすると、「四国・住みたいまちに生きる」ということで、エリアの特徴的なモデルができて、参加された先生方の住みたい場所がある程度イメージできて提案でき、ひとつのモデルとして結果として主張できる形になる。ただ、それが価値があるかどうかは難しいかもしれないが、そういう議論をしたらどうか。

②議論の進め方に関する意見交換

(田口)

まだ咀嚼ができていない。言ってしまうえば、そもそもが分からない。何を質問したらいいかも分からない。四国の良さを最終的にはPRすることが目的なのかどうか。アウトプットのイメージが湧かないので、どこからスタートを切ったらいいのか。エリアという分け方がいいのか、世代別がいいのか分からない。

(松木)

具体的に四国をこういうふうにしたらという提案にはならないと思っている。それはある種課題解決的になってしまうと思っている。だから、その部分は外して考えるということ。モデルはどこにも存在しないものを想定して

いるが、その場所として四国を想定する。あくまでも、結論としては、四国を横目に見つつ考えるのは、何らかのモデル、社会のモデルという言い方ができるかもしれないが、ここをこうすればこんな風に良くなるので、こうした方が良く、なぜならこうだからというような議論はしないということ。

(田口)

四国という一つの範囲の中で、いろんな地形条件があるなかで、例えば、平地だったらこういう暮らしがあったらいいなとか、山地だったらこんな暮らしがいいなという、地形的特徴に基づいたライフスタイルを提案するということか。

(松木)

結果的にそうなると思うが、そのときに上から見るのではなく、自分が生活者として見るという狭い範囲からスタートしたい。

(田口)

その点はわかった。あとひとつ、「住む」の意味は？

(松木)

生活をするということ。職を持って、家族もいて、教育もあって、食料、エネルギーもという全てを含む。エリアを越えていくこともある。その場合、四国全体という考え方もあるし、もう少し区分けして、ここはこういう用途に使った方がいい場所だよ、それってどういう条件で決めたらいいのというようなことを考えていきたいということ。少し分かりにくいかもしれないが・・・。

(近森)

私もポジションペーパーを書けと言われた

ときに、何をどう答えていいか分からなかったところあり。今の話を聞いて、議論のやり方は面白いと思った。ちょっと疑問に思うのは、確かに不便さをネガティブに捉えるのではなくポジティブな部分を捉えるのは面白いが、「四国の住みやすいまち」と言ったときに、ハード的なものだけでなく、一人一人の意識レベルの問題まで踏み込んでしまう。価値観だとか捉え方とか。そういうところまでモデル化できるのか。ちょっと疑問に感じた。

(松木)

仰るとおり。私自身も踏み込まないとまったく無味乾燥な分類論になってしまう。その解決方法として、一般論にならないかも知れないが、「私はこう思う」ということを主張しよう、そこで個人の価値観を言っただけであればいい。それが共通項としてあるのであれば、ある種の広がりを持つものになる。だから、ボトムアップ的に好きなことを言っただけであればいい。ただ、欲しい、欲しいということはちょっと待ってくださいということでプラス、マイナスを考えようかなと思った。

(近森)

この議論を通してどんな成果物をイメージされているのかがよく見えなかった。もう一つはここにおられる委員の方々の意識レベルを議論したときに必ず成果物は単純な足し算にはならないと思う。どういうふうに集約するのかと思う。方法論の話しになるが・・・。

(松木)

第三者には何を議論したかを分かりやすく伝えたい。まとめていくなかで、これは違うと思われた部分については、提言集という別な形で出していただく。批判的なこと賛成的

なことでもよい。方法論としてもよい。そういうものを出していくと、全然違った形で現状の四国なり日本なりの問題を考えることになり、そこに価値が出る、ユニークさが出るだろうと。誰かを攻撃する、誰かのやり方を攻めるというのではなく、「こういうの良いよね」と言い続けることによって、一つのコンセンサスを得ることができないか。そうするとそのものもいいとすれば、現状とその差に対して、「やっぱりそこにいきたいよね」と考えたときいろんなアイデアが出てくる。そこは研究になるだろうし、研究の提案ができる。今、我々は課題解決型で研究をやって、実は閉塞感が沢山ある。私はそう思うが研究者のみんながそう思っているのかどうかとか、それは研究としてやるのが正しいのかどうか、その点に疑問を持っているので、そこを一回クリアにして、こういうモデルだったらその道筋はいいよねと言えるとスッキリする。そうなる研究や課題がスムーズに見えてきて、そこで初めて元々考えたことが評価される。これは良かったね、悪かったねと。そこはモデルの議論だと思っていて、そもそも我々はどういう社会に向かっていくのかを少なくとも研究者に言おうよと、そういう形になる。正直結論は分からない。3～4回の議論で何が出るか分からないが、一度やってみたいなと思った。それで、できれば継続して少しずつ貯めた成果や議論の成果を正確に伝えていきながら、いろんな形になっていけば、それが研究につながらなくてもいいかなと思う。

(吉井)

あるべき姿をしっかりと持つという説明があったが、その通りと思う。我々どうしても視野が狭くなりがちであるから。モデルとしたとき、これは理想郷の模型かどうか。

(松木)

私は、元々数学をやっていたので、インスタントクラス、つまり実態そのもの、社会そのものを構成しているルール群みたいなものがある。こういう条件でこういう社会というのは実際には存在しない。でも実例として社会は存在している。ある種のルール群、こういう要件でこういうものを満たすようなところがいいよねという条件を書き出していったものを私自身はモデルと言っている。だから理想郷と言うと、非常に具体的なものになってしまうと、一つの実例になるだろうと思っている。そこは非常に難しいところで、典型例はある。四国はいい場所と言われていて、自主的に文化をリードしなさいとか言われる先生もおられるけれども、その行き先みたいなもの。

(吉井)

理想郷とはモデルが目指す範囲内の一つの例ということか。

(松木)

そう、一つの例。たぶんその例を提示しないと分からないので、最終的にはその例を紹介することになると思う。こんなまちがいいねという話にしたい。

(吉井)

理想郷と考えると制約がなくなってしまうが、「四国」が頭についているのはどう理解したらよいか。

(松木)

四国の大学の皆さんと議論をやっているので、また、自分は四国は良いところと思っているので、その良さというのをもう一回、ロジカルにというか現実的にあれが美味しいとかでなく、もう少しモデル的に記述できない

かなと思った。

(吉井)

そうすると、将来のあるべき姿を考える際の制約条件として四国を考えるということか。

(松木)

四国であればできそうだという例を考えていこうということ。

(吉井)

実現可能性と言うことも視野に入れつつということか。

(松木)

そこは微妙で、個人的にできることだったらいいということ、これぐらいだったらやればできるよねということ、みんなが全員どう考えても無理だよよねという社会を前提にした議論はすべきではないと思っている。

(吉井)

タイムスパンはどう考えるのか。三世代後でもよいのか。

(松木)

それは問わない。時間軸を問うということは、何らかの技術的な発展とかを考えることになり、自分は時間軸を入れる意味が分からなくなる。

(吉井)

時間軸が入ると、それもものすごく制約になるということですね。極端に10世代あってもよいのですね。

(松木)

来年実現するということになる、どうい

う方法で実現するのかという話に必ずなる。

(吉井)

こんなところに向かっていこうということだから時間軸はなくていいということですね。

(松木)

こんなまちがいいとみんながそう思えるかが重要。自然に川が集約して流れていくようなモデルが言えたら。いやそういう議論ができたらいいなと思う。面白いと思っていたらありがたい。

(真田)

理想のまちを議論するということが、そこでの生き方、どういう生き方がいいのかということとそれを担保するところのまちを考えるということですね。

(松木)

あるべき論になると苦しいので、私はこうだといいいね、こうした生活ができればいいねというようなイメージでいいのでは。そうすることによっていろんな分野の方も参加しやすいし、その中で自分の持っている専門のところについて非常に深い知見を出していただけると、深い議論にもなり面白いなと思う。一つのデファランスモデルになると思う。

(近森)

ルール群の話は面白そうだと思うが、一方でエリア分けはリアルな話しになる。これが頭の中ではうまく結びつかない。自分が思うルール群はアルゴリズムみたいなものかなと考えたが。

(松木)

そこまではいかないが、あるところでは、

ある制約がある。例えば、現実に戻ると、いろんな価値観を持つ人が住んでいると。私は静かな方がいいと。でも会社は音を出さないと仕事にならない。そうしたらある場所はある程度は音を出してもいいじゃないかと。その人は我慢するのではなく、そこでないところに住めばいいですよという意味。工場エリア、住宅エリアで分けていくと非常に細かいので、もう少しここはこういうふうにしてもよく、それをサポートしていくことによって非常にうまく回っていくようになる。ここは静かにしようよというのが私の言っている典型的なルールで、そうやって分けていくと住みやすくなるのではと思っている。それを現実に当てはめると非常に難しい、個人の権利とかいう話になるので、そこには踏み込まずにじっくり考えて、こういう場所でこういう生活ができて、そういうルール群ができて不便だけど、こういう価値が生まれる。ここはこういう利便性があるけどこういう不便がある。けどこっちの方がいいねというようなパターンに分かれると、都市と田舎のもう少し面白い形、魅力的な形を提案できるのではと思っている。センシティブな話題に入るので、見捨てるのかとか個人の権利はどうなのかとかそこは注意しながら、そこに入らないように議論したいのが私の気持ち。高知と言った段階で高知をどうするんだと言われる。高知は想定する上で良いモデルとは思っているが、横目で見ながら理想を考える。そういうスタンスができたらと思う。よく分からないと言われるのは、そこに踏み込むと一瞬にして利害関係の議論になってしまうので、そうならないようにしたい。そういう意味でフリーにしたい。

(平尾)

ある程度の高さの問題かなと思うがそれで

いいか。あまり上から見ると変になるし、目線が近すぎるとまたおかしくなるので微妙な高さがよいよう。

(松木)

このレベルがいいというレベルがあるともこのすごく価値があるようになる。それに向かっていくと議論のモチベーションにもなると思う。

(吉井)

ただ、フォーカスの合わせ方が難しい。

(松木)

それは皆さんの意見を聴きながら、寄ったり離れたりしながら議論していきたい。だから前回議論して湧いたイメージは、四国という絵を書いてある種色分けされて、そこはこういうところがいいんだよねと先生方に言われるような、こういうところでこういう自然を楽しみながら生活をしているというような、そのモデルの中で交通網はどうあったらいいのか、人口も想定しながらそういうのを議論してもらったらある程度議論できるのでは。エネルギーは、食料は。そういう議論をしているとある統一したモデルができると、こういうところはサステナブルではないですかと。それが自分の究極にはある。そこまで行けるかどうかは分からない。

(金)

あるべき姿は分かった。不便さをどう捉えるかも分かった。が、最後にエリア分けが出てきてちょっとガクツとしてしまった。四国は大都会はないし他の地域とも違う特徴を持っているが、議論の仕方について、グループ分けして議論するとき、どういうふうに分けてどう進めていくのか。それがないままに

どうしようかというふうになっている。

(松木)

具体的な議論をするときの方向性についての議論とどうグループ分けするかは、専門性とは関係なく、日頃あまりお付き合いのない先生方で3グループにわけ、そもそもから議論いただきたい。それで議論が進んできて形が見えてきたら専門性も考えて分ける。今回はそこまで気にしないでいいかなと思った。エリアについては、自分が考えたサイズ感について、エリア4(大都会)は四国にないので気にしなくてよい。自分の住みたいところが、エリア1(農耕地、漁村、山間地)近くだったらエリア1のことだけ考えればよい。ただ、最終的には全体を考えたいと思っている。ここだけが理想郷だという議論をするのではなく四国全体があってそれぞれ役割分担があるというふうに書きたい。そうでないと理想郷論だけになってしまう。それは避けたい。このエリア論も私が思ったサイズ感を言っただけであり、これに囚われる必要性は全くない。精緻なエリア論を出すとそれはどうだと言われかねないし、それはしたくない。今回は、方向性を決める会議にしたいということ。

エリア分けの例

- エリア0: 原始林、自然そのまま
- エリア1: 農耕地、漁村、山間地
- エリア2: 工場、大規模施設
- エリア3: 地方都市
- エリア4: 大都会

(資料: 松木所長)

(金)

特徴的なエリアモデルを出してもらいたいという希望がある。

(松木)

レベル論にも関係するが、もう少しフォーカスしたエリア論をしたいということであれ

ば、そういうやり方も当然あると思うし、空間的な話をしているので、空間的な話しで切らない方がよいということであれば、別な切り方をすればいいと思う。それを議論して頂いたらと思う。スタートが何もないと議論にならないので提示したもので、けなすところからスタートいただいても構わない。

(安藤)

エリアの分け方はいいが、エリアを議論するとしたらファンクショナルに切り分けられたものであって、現実の地名は出さないまでも具体的な想定もなしに、こういうものが四国にあるとしたらこんな感じだというふうにして議論するのか、あるいは、みんな、う～ん、このエリア1はあそこら辺なんだなと思いつつ議論をしたらいいのか。

(松木)

エリアの分類をしていただくつもりはなくて、その中から自分がここで生活をしたいというところの議論をしていただきたい。まずはそこをスタートにして。プラスとマイナスを議論して自分の目線でそのエリアを見ていただきたい。分類論をして上からみていただく必要はない。自分の視点で自分が住みたいと思ったところについての議論を。

(大槻)

結局、「住みたいまち四国」なので、エリア0はこういう理想、エリア1はこういう理想みたいな話をバラバラにして、最後にがっちゃんこして4つの地域があって、4つの理想がありますよみたいになってしまうと、意味がないし面白くないと思う。如何にエリア0からエリア3のそれぞれの理想を描きつつも、四国全体としてのエリアを超えた一定の共通性、共通のコンセプトを見出すかという

ところが一番大切と感じている。だとしたら、議論の仕方にもそこをうまく話せるような議論の仕方がいると思う。例えば、みんなでエリア1について考える、エリア2について考えるなど、みんなが各自エリアとその共通性を考えておいて、最後に共通コンセプトはこれだねと出すやり方がいいのか、もしくは、初めからエリアで捉えずに、四国は大小の差こそあれ各県がエリア0からエリア3を持っている。だからエリア0からエリア3までの組み合わせとしてどのような理想像が描けるかをテーマにして、エリア間の連携を前提にした理想を議論する。この方がいいのかなと思う。

(松木)

そういう気持ちでいる。結局は、それぞれが独立ということはないので、たぶん、前は、都会の利便性が良いという派と田舎が良いという、住むところは1か2で3に住みたいという人はあまりいないとすると、それらがどういう形でバランスしていると、1に住んで3にも自由に行けたらとか、相互関係を議論するという視点の方がやりやすいと思う。ただ、これで最初から議論する方が良いかどうか分からなかったので、まずはもっと前に戻って、それぞれの立場をもっと深めていただくために、こういう不便さだったら、これはなくてもよいね、受け入れられるよねというところからスタートさせてもらったということ。その結果として、そういうものを満足させる場所を考えていったら、エリア論のようなものになれば定義がしやすいなと思った。ただ、自分で書いてみて、一つのモデルができるかどうか、非常に厳しいなと思っている。ということで、まずはここら辺から議論していただいたらいいなと思っている。どういうことをやるとさっき話したゴールに

向かっていけるか、いけそうかというところを議論していただけたらと思う。強引ですがよろしくお願いします。

③グループに分かれての議論

次の3グループに分かれて、「不便さを前向きにとらえる」ことを端緒にして、議論を行った。

A班：金、平尾、大嶋、大槻、三木

B班：田口、近森、紀伊、安藤

C班：真田、吉井、渡辺、石塚、松木

各グループの討議概要については、以下の紹介があった。

A班：金、平尾、大嶋、大槻、三木



(第2回検討会)

(事務局)

- ・ 生きている意味は、社会とのつながりの実感が持てる「住みたいまち」があることで、その仕組みが大切。それがあればどこに住んでもいい。
- ・ 「職」を通してのつながり以外にコミュニティとしてのつながりが必要であり、究極の兼業、「なりわい」という考え方もできる。
- ・ 山間地等に住んでいる人は不便とも思っていない。生活パターンがそうになっている。
- ・ 都市の高齢者は無駄に時間を過ごしているが、田舎では畑などやること、働く場所もあり時間もある。ライフスタイルにそうした選択可能な状況があることがよい。
- ・ ただ、田舎はネットワークはあるが、息苦

しいと感じる人もいる。短期、中期で生活できるようなことが日常に組み込まれていれば生き生きできる。

- ・ セミオープンな村が理想であり、入りやすいが抜けることもできる。
- ・ 20～30万人のまち、郊外～平地の村、山間地域のこの3つがうまくつながっていること。
- ・ 四国は大平野がないところがよい。
- ・ 四国山地は四国4県の共有地として位置づけられる。山、街、村で連携していくことによって、多様な風土がある四国をまるごと凝集できる。
- ・ 市町村合併があったが、いろんなことがその中で完結できていない。エリアをどうするかの議論もあってよい。
- ・ 水源地域などは責任を持って守ることも必要。
- ・ 高知の嶺北地域は大豊インターがあり、高知市まで40分で行くことができる。アクセスも重要。
- ・ 高知の街が壊れてきている。顔が無くなっており味が無くなっている。電気屋のおじさんがいなくなっているが、大手電機販売店だけがあれば本当に便利で良いのか。
- ・ 1000にする必要はない。流動性を高める。「滞住」という考え方。定住ではない。
- ・ 食い扶持と水と移動ができればよい。車を持たなくなったらまとまって住む局面を迎える。
- ・ 生き方を問われている時代にあり、価値のある多様性を認める「教育」が重要。
- ・ 自然に親しむ等の子供の頃の思い出が生きてくるので、そうした体験が大事。そのためには「教育」。

(大槻)

- ・ 人生3度説について、定年もそもそも65

歳ではなく、40～50代で第2の人生を考える時代になっており、四国はそれにふさわしいのではないかと。サイズも適当だし、文化を持った山や村がある。その中で、一カ所に住むという話をすると煮詰まるので止めようという話になった。それよりも、山、街、村、奥深い山を四国の人々が自由に「滞住」という形で、二地域居住というような形で移動できればという話が理想。そして、比較的可なり可能な人と人がつながれる居場所が、それぞれで持てたら四国の人々はハッピーだよという話になった。

・それに加えて、なぜ山が大事かという、水源として大事だし、災害から守る、海の環境を守るということを考えても、山は四国の4県全てが守るべき責務、守らないと良い生活が崩れていくということ、二地域居住を使いながら山の暮らし、村の暮らしを守っていけばいいかなという話になった。

・その中で「教育」という話がでたが、小さい頃に山や村の良さを知らないと、結局魅力的に感じないようになるので、一ヶ月間程度滞在させてインプティングさせたらどうかという話も出たが、スローライフというような発想も教育によってインプティングしないとダメだね、あるいは、四国山地があるからこそ、良い四国の暮らしが守られるということ、四国は非常に暮らしやすい地域だということ、それを守るためには四国人としてアイデンティティを持って、滞住しながら山を守っていくというようなアイデンティティを持たせるようなことも教育でしなければならないという話になった。

・40～50歳から75歳くらいまでの1ターン、Uターン者にとっても住みやすいような島に四国があったとしたら、そこが若者の職も守ることにつながっていくかなという話だった。

B班：田口、近森、紀伊、安藤



(第2回検討会)

(事務局)

・キャッチフレーズを設けようということで、最初の説明にあったように「プラスはマイナス、マイナスはプラス」をまず提案。

・その点の事例として、良い点と悪い点をいろいろ出し合ったが、まとめると、生き方は、人それぞれであり、生き方によって選べることの検討が必要ではないか、例えば、引っ越しをすれば英断的な考えも場合によっては必要といったこと。

・四国は、地理的にもちょうどいいサイズであり、良い点、悪い点も選択しやすいのではとの話もあった。例えば、災害の話しや今の時代は人の関係が希薄であるが、人との関わりが重要で密になるような検討が必要。

・これらを踏まえて次回の検討につなげていくのかなと思った。

(田口)

・ものの見方として、エリアだけでなく、エリアにクロスしてライフステージという物差しを入れて、マトリックスのなかの泳ぎ方というような選択の可能性を考えていったらいいのではというのがベーシックなところで共有されたものとしてあるように思う。

(安藤)

・四国の良いところが多く出された。このため、デメリットをなんとかしようという議論はしていない。それが耐えられなくなったら、それを得られるエリアに移ればという発想。それは、多分、ライフステージ、独身のとき、就職し始めたとき、子供ができるとか年をとっていかとか、そういうことで選択肢は変わっていくでしょうということ。

・そこで考えるとき、四国は、山地と都市部は距離的にも近いのであえて引っ越さなくても車で1時間程度飛ばせばアクセスの可能性はある。ただ、重要なものとしては、移動手段であり、自分で運転できればいいが、そうでなければ代替する手段が必要になる。そのほかは、水や地域医療が今よりももう少し回ると、選択肢、自由度も上がってくる。ということで、検討事項のキーワードとしては、「移動手段」とか「医療」とかということ。

・もう1点、若手の人が都市部から山の方へ移住してきている事例は多いが、受け入れ側のインフラ整備や仕組みづくりがうまくいっていないというところは、希望もされないし、行ったとしてもうまく回っていないということが重要。受け入れる側の付き合い方もあるし、入って来た人の中での付き合い方といったソフト的部分もうまく回るためには必要という話もあった。

C班：真田、吉井、渡辺、石塚、松木



(第2回検討会)

(松木)

・住みたい場所について議論いただいて、結論としては、全員が住むとしたら、中山間地域。ただし、仕事場は大学人としては都市部がいい。したがって、生活圏という言葉があって、エリアと自分が住む生活圏がうまく成立して、そこの間の移動が適当な時間でできればよい。最初は、中山間地域は地縁、血縁が難しいという議論もあったが、それは置いておいて、住む場所としてはそこがいいと。できれば歩いて20分程度がいいという話もあったが、通えればいいということで、生活圏と移動という話があった。

・事例として、イタリアのラブロという村は、山の上であり、中心部に住んでいるのは55人であるが、村として成立していて、そこにはパブもレストランもあって、ローマまでもそんなに遠くはなく、近隣の町には30分で行かれるし、スクールバスもある。中山間地域のモデルとして成立しているところであり、参考になるのではないかと。また、ライフステージの話とクロスしながらいくつか議論させていただいた。他のチームと似たような議論になっているのは面白いと思った。

・高知はいいところで、収入は130万円あれば楽しく生きていけるという話もあった。食べ物も、魚も買ったことがなく、お裾分けしてもらえる状況で、これは本当の豊かさを見直す例として高知は良い事例だなと、個人的には実感している。ただ、いろいろ順位付けすると高知は下位になってしまう。幸福度といった議論もあるが、ここの中でうまく浮かび上がらせる議論ができればと思う。

・それから職の話では、一つの仕事をするのではなく、兼業というやり方、日本では一つの仕事に集中してどうやるかということが議論になるが、農業もやりといった複数の仕事を平行してやるような考え方が重要との議論

もあった。

・四国の自立、独立を考えた場合、食料はまかなえる。エネルギーは極論すれば、なくてもよい。水は重要。いざというときに何かを守るというプライオリティがあると、もう少し安心した生活ができるという議論も。

・教育はスクールバスを使うのであれば、学校を循環する方法もいいのでは。夏は山や海の近くの学校に通い、冬は都市部の学校へ。それは先ほど出た、村の良さを小さい頃から教え込むということに近いが、いろんな経験をさせる可能性がある。そういう意味では、四国は山もあり川もあり、海もあり、街もあるということで、非常にバラエティに富んでいて、距離感も近いという良さがある。

・外から人を呼ぶとき、空港から1時間半以内にいろいろ揃っているということは重要な要件になるが、四国はその要件をほとんど満足している。ただ、医療に関してはいろいろ議論があって、課題があるかもしれないが、それ以外に関しては、条件を満足している良い場所。全体として、四国は良い場所であり、うまく伝えていく考え方があるといいですねという他のグループと似たような意見に集約された。

④全体での意見交換

グループ討議を踏まえ、全体での意見交換が行われた。

(三木)

利便性を考えた場合、空港から1時間半が限界というような話もでたが、高知周辺はよいが、残った四万十周辺の地域は将来どうなればよいか。空港からは遠い。また、愛媛では愛南地域があるがどうか。

(石塚)

四万十地域は環境をキーワードで一体になろうと動いている。産業にしろ、資源にしろ、食料にしろ。そういう思いのある人達が集まればいいんじゃないのというまちづくりでよいのではないか。来ても一定の数に収束するような感じがする。愛南は、水産業のまちであり、それをベースにより良い生活をどう考えるかであろうが、産業の視点を入れすぎると、お金がどう動くかという話になりすぎて、本来のまちづくりの議論からかけ離れていくと思う。

(三木)

では、高速道路ができれば四万十は荒れると思うが。不便でもいいということであれば高速道路はいらぬという考え方もあるのではないか。

(石塚)

四万十には秘境が残っている。そういうところでは、あまり来てくれるなという考えあり。

(松木)

だから、産業を誘致して活性化して魅力ある場所にするという議論とは全く違う議論が成立しうる。それは何だという議論は今後の議論として面白いと思う。そして、どの班もそれに近い議論があり、キーワードが出ていた。ある意味皆さんそう思っているとの査証ではないかと思う。

(近森)

伝え方の問題で、スタンダードが必要。民度という尺度では四国は下の方にあるが、そういうスタンダードを変えていく努力が必要。伝え方という意味で。大学は評価流行りであ

るが、その基準を変えていく必要がある。徳島では、南の人が作って欲しいというので、白鷺大橋の上に高速道路まで着けようとしているが、シアトルの例では、島のクオリティを守るため橋に反対している。逆転の方向も重要で、そのためには伝え方が重要。

(紀伊)

この集まりは産総研と大学の学長さんの総意での集まりなので、例えば、レポートを書くとき、大学と一緒に何かやろうというこの議論の発端を考えると、大学生の大学間の移動だけでなく、教員の移動・交流の仕組みづくりなどの提案もあってよい。

(松木)

交流、流動性の視点はいろんな側面で捉えられるように思う。受け入れてもらえるか分からないが、皆さんの意見を前向きな形で一つの提言にできるといいなと思う。

(大槻)

大学の話に関係するが、高知大学は、県外から来た学生をド田舎に入れて、自然や文化などの体験をさせているが、6大学で共通プログラム的に持って、大学に移動するだけでなく、それぞれの大学が持っているフィールドに入れるようになったらいいのではないかな。

(松木)

例えば、四万十の良さを最大限に上げていって、人が動きながらその良さを知っていく、そのフィールドとして四国がいいということか。それには大学というツールもあるし、コミュニティというツール、あるいは観光というツールもあるかもしれない。特徴を出していくことが重要で、その一つの軸で、私は便利さとか上げたが、そういう方向で価値を上

げる方法があると思った。

(真田)

インフラは文明の話になるが、ここで出た議論として、人間も含めた生き物の生息環境の価値をちゃんと評価しようという話もあった。

(近森)

その価値を計る尺度だが、選択の幅の豊かさというのがあっていいのでは。自分のニーズに合ったものを選び取ることができる。それには移動も含めてという形ではないかなと思う。

(大槻)

人口減少社会の先進地四国では、マイナスに捉えないとしたら、余った国土、まち、畑でも山分けできるようになる。このようにポジティブに捉えて、一カ所に住むのではなく、それらを積極的に享受する発想があるのではないかな。山、まち、村が近接した四国はそのモデルケースにできるのでは。そうやってパラエティに富んだ四国は幸福なんだというアイデンティティを持てればサステナブルにできる原動力になると思う。

(吉井)

移動というのは大事だが、コミュニティの帰属意識が芽生えるまではそこに住まないと思う。移住ばかりでなく定住とのバランスもいるのでは。

(松木)

イタリアの村の例では、55人は老若男女バランス良くおり、いろんな仕事の人が入って成立しているとのこと。これは小さなモデルであるが、もう少し大きなモデルもあって、それらがある種魅力のある場所として成立し

ている事例なので、あとでお伺いして、中山間地域のイメージを出すときに、マイナスイメージでなく、それをこんな形でできる事例としてあげたら面白いと思う。

(近森)

移動と定住の流動性に関し、国際教育開発の中では、パートナーシップとオーナーシップの2つが満足されるべきとの議論あり。そういう意味では、自己の個別性を担保しつつ、外から来る、この場合は支援だが、この2つがバランス良く保たれることによって、支援する側も受ける側もお互いに向上していくという考え方がある。このパートナーシップとオーナーシップが確立されていると、非常に両方ともやりやすい。

(松木)

先日、西条まつりを見に行ったが、お祭りは定住していないとそのコミュニティは成立しない。でも、いろんな人が来てその中に参加するというのもありで、定住と移動というのは、いろんな意味で面白い議論だと思う。

(金)

四国は高齢化が進んでいくが、第2の人生の場として四国が選ばれていければと思う。そして四国は成熟したまちになっていく。その際、四国に元々住んでいた受け入れ側の発想が大事。ある意味四国は、島としての我々意識がより強いところではないかと思う。戦後、人を家に入れられないような閉鎖性が強くなっていく中で、もっと開かれた心を持って受け入れようとしないと、流動性を高めようということにつながらない。その意味で、如何に開かれたまち、あるいは人の心、というのが根本的に大事ではないかと思う。

(松木)

それはレベルの問題で、あまりそこばかりに降下するのもどうかと思うところがあって、まず魅力の部分からスタートして、流動性の良さというところから入っていくと、自然とそういうふうになっていくのでは。先ほどの議論で、中山間地域はいいのだが、今住むとしたら、いろいろな意味で難しい。ロケーションだけでなく人間関係での難しさも当然あるので、そういう課題を解決するというよりは、こうなっていったらすごく良いよねという形で議論できたらいいなと思う。

(大槻)

さつき金先生と、根無し草の都会かコミュニティに入って出てこられない田舎かという話をしたが、所属意識ができるくらいに繋がることができて、我々意識でやれるが、もう少し着脱可能な形のコミュニティやネットワークが作れたらいいねと。風通しと我々意識が感じられるようなコミュニティが作れたらと思う。先ほど「滞住」と言ったが、週末だけ、あるいは夏と冬だけとか、第2のライフステージとかいう話もあったが、コミュニティ間の移動が楽にできながら、でもコミットできるというちょうど良い慣行を作っていないといけないという話が出た。

(平尾)

医療福祉の議論もしていただきたい。転勤して何年か住むとそこの住人になるが、住みたいと思うかどうか難しいところがある。医療福祉の面でこうあったらよいということを出してもらったらと思う。

.....

3. 第3回WG検討会

①委員による事例紹介（イタリア・ラブロ）

これまでの議論をまとめると、「第2回検討会要約」の右下に示しているような四国を模した図が想定されるが、第2回検討会で出たイタリアのラブロという小さな基礎自治体（コムネ=コミュン）がモデルになる可能性もあることから、徳島大学・真田委員から紹介してもらった。



（第3回検討会）

「四国・住みたいまちに生きる」 第2回検討会要約



社会とのつながり、コミュニティ、ネットワーク

- 社会的つながりこそ生き甲斐
- 開かれたまち、人の心、セミオープンな村。
- 着脱可能なコミュニティ/ネットワーク（柔軟性）
- 受け入れ側のインフラ整備、仕組みづくり、入る側も含めソフト的な配慮。
- 定住とのバランス
- 移住には自助努力と協調

教育とアイデンティティ

- 自然、山、水源、環境保全の大切さを教育、すり込む。
- スクールバスにより地域を循環して教育
- 大学生のフィールド体験、滞住。

アクセス

- 空港から1時間半
- 医療福祉には1時間
- 居住と職場が適切な距離

“不便”でも魅力あるまち

- 魅力ある地域の基準を変えていく、発信する。
- 多様性と持続性があるゆえに幸福
- ヒトも含めた生息環境の価値

ライフスタイルとライフステージ

- 人生三度、なりわいを考える。
- 地形的特長を生かした生活、居住は中山間地域、仕事場は都市部
- 兼業（農業+）、畑作業等、時間と場所が存在。

森林保護

- 水源、河川、海洋などの環境保護

検討課題：医療福祉のあり方



2013/2/1 mk

独立行政法人 産業技術総合研究所

（真田）

●歴史、景観、都市計画史、緑地計画歴史をやる工学系の歴史の研究者としてやっていこうとしていたが、徳島に来てなぜか、地域・集落の再生の方に引きずり込まれた結果、そっちが専門のようになりつつある。一番最初に集落再生に引きずり込まれた地域再生塾というのですが、徳島大学に来たのが2007年1月で、2006年の中ごろに大学と那賀町が協

定を結んで、地域の活性化をするリーダーを育てるという講座をつくった。それで私が来たとき、そういうことをやる人間だと思われ、那賀町に行くようになった。その時は3人で、私の先生である山中先生という交通の先生とそのほかICTの先生、薬学・薬草の先生の3人で、地域づくりと地域特産品を活かし、その情報を発信するため、3人の先生が3つ

の教室を作ってやっていた。年数が立つにつれなぜか私だけが通い続けているという状況になっているが、いろいろ楽しくやっている。

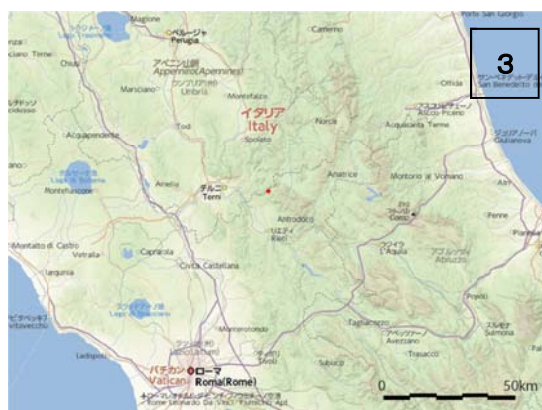
●大学時代は東京に居て都市景観などもやっていたが、3年生が終わってから1年間留学したところがラブロというところで、田舎暮らしという経験が頭の中にあって集落再生のことを考えているのだと最近特に思っている。このパワポをまとめながらそういうことを思っている。

●3年生終了後の2006年から2007年の冬にかけてこのラブロに住んでいた。通産省（当時）とEUIが交換留学のプログラムを持っていて、最初の4か月が語学研修、その後の8か月が企業でのインターンシップというプログラムで行ったもの。最初の4か月はフィレンチェにいて、その後、企業研修でベネチアに行ったものの、あまり仕事がもらえず、途中でラブロの建築家のところに移動しインターンシップを受けた。



●山の上に集落があるが（真田委員提供資料の番号1）、中部イタリアでは珍しいものではなく、いろんなところにこういう小さな集落がある。場所はイタリアのど真ん中（番号2、3）。ラチオ州の中にローマがあり、その北にペルージャがある州があり、その境のところ

にある。リエティという県があって、ラブロはその端っこに位置している。ローマからは高速道路を使って、テルニというところで降りる。鉄道では、ローマからテルニを通過して、アンコーナというアドリア海に抜けるイタリアを横断するものがあり、テルニからラブロまでは、バスで30分ほどかかる。ただ、テルニは北の方の州に属するので行政的には関係なく、実際はリエティの方が、行政的に結びつきが強い。リエティは高速道路でもローマとつながっておらず、バスで行き来する。リエティとテルニの間に地方鉄道があるが本数があまり多くなく、不便なところ。このように比較的大きな都市としてはリエティとテルニがあるという環境。



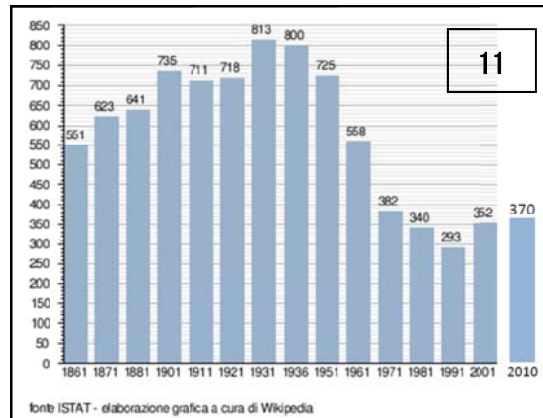
●街の入り口はこんな感じで（番号4）、当時はここに郵便局があり、広場になっており駐車場になっている。ここに門があるが、この門から中は、中世から建て替わった家はないというようなところで、車は通れず、移動は徒歩という街。街の入り口に3か所駐車場があって、そこから街中にアクセスする。



街中の中央にメインストリートがあり、右の方は階段を上って玄関にアクセスするという状況になっている（番号5）。こっちは道の低いところに家があり、玄関が2階になっているような入り組んだ造りになっている（番号6）。古い建物が多く、密集しているので、街中がアーチでくっついているようなところ（番号7）。街からの見晴らしが良く、ティエディリ湖がありリゾート的な街でもある（番号8）。これが平面で集落自体は小さい（番号9）。



●行政的にはラブロ自体が一つの自治体になっている。この街中に住んでいる人は多くはなく、周辺の農地に住んでいる人もいるので、2010年段階での人口は370人（番号10）。面積は11.42平方キロメートル。イタリアの行政の仕組みとして、15の普通州と5つの特別州（アルプス方面）がある。そして15の普通州の下に94の県がある。その県が県道や公衆衛生など担当するが、各県の下に約8000のコムーネという市町村がある。コムーネは、義務的事項としては、コムーネ財産の維持、警察、保健衛生、教育、社会福祉などを担当している。可能な事項としてガス、水道、公営マーケット、薬局など直営すると書いてある。ただ、教育といってもラブロには学校はなく、リエティに行っている。日本では小さい町は都市計画ができなかつたりするが、イタリアの場合、人口200万人のミラノやローマの大都市も、こういう370人のラブロも同等の権利を持っているような感じになっている。



●生活に関して、テルニとラブロを結ぶバスは、自治体が違うのでない。リエティとの間のバスは、リエティ行が7時10分と14時50分しかなく、ラブロ行きバスは、14時10分の1本しかない（番号12）。

行政	
人口 370人 (2010年)	10
面積 11.42km ²	
※独立した一つの自治体	
イタリアの行政の仕組み	
<ul style="list-style-type: none"> ・15つの普通州、5つの特別州 ・15州の下に94個の県 県道、公衆衛生、特定の地方学校、厚生 ・約8000の市町村 (comune コムーネ) 「地方的利益全般を保護する基礎的自治体」 義務的事項: comuneの財産の維持、地方警察、保健衛生、教育、社会福祉等 可能な事項: ガス、水道、交通運輸、公営マーケット、薬局等の直営 人口200万人以上のコムーネもラブロも同等の権利 	
<small>「ヨーロッパの国土計画」国土計画協会 朝倉書店 1993 「にぎわいを呼ぶイタリアのまちづくり」宗田好史 2000</small>	

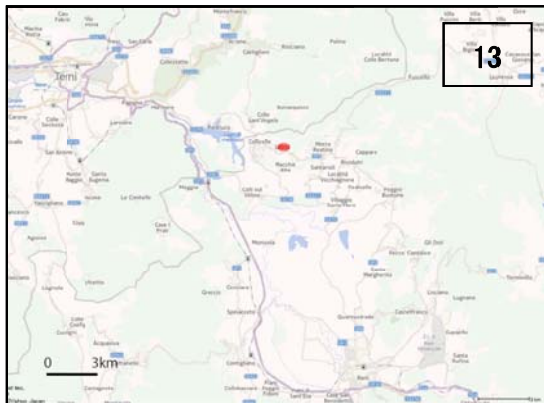
交通・職・食・医療・教育	
Rietiとむすぶバス	12
Labroから 7:10, 14:50	
Labroへ 14:10	
TerniとRieti (近隣の街)	
買い物、仕事、病院	
公立の学校はRieti	
Labroに移住する人	
イタリアの建築家、ベルギーの建築家など	
夏だけ住む人もいる	

●人口の推移をみると（番号11）、1991年まではどんどん減ってきているが、1991年からの10年では増えており、日本では中山間地域の自治体の人口が増えることはあまりないが、ここでは増えている。

イタリアでは学校は午前中だけなので、これが通学用バスになっている。近隣の町のリエティ、テルニに職場や病院、マーケットなどあるが、ほとんどがそこに行っている。バスの路線は、地方の幹線道路があり、都市間交通となっているが、テルニとリエティを結んでいるだけで、近隣の集落は結んでいない。このため、くねくねといろんな集落を通ってバスで移動しようと思ったら、実際の距離よりも相当時間がかかる状況（番号13）。

ラブロに移住する人が、私が居たころにもいて、イタリアの建築家やベルギーの建築家が何人かいた。ほかには夏だけ住む人もいる

そうで、私は冬に住んでいたのが夏だけ住む人の部屋を借りていたような形になっていた。



●不便は不便だが、子供も結構いて若い人達もいて、それでうまく機能しているのではないかと思う。ラブロほどの小さい街で病院を持つとか職場を多く確保するのは現実的に難しい。しかも公共交通はなかなか機能しないくらいの人しか住んでいないが、若い人が集落の中にいれば移動手段は確保できるので、それでなんとかやっつけているのではと思う。自治体の規模が小さくても人口の年齢構成がバランスよければそれなりに回るのではと思う。

●街の中には、なんでも売っているよろずやさんが1軒（番号 14）、パンは近くのパン屋が焼き立てを届けてくれ、そのほか週に1回、野菜などの移動販売車が来る状況。レストランが集落の中と少し離れたところに5軒くらいあり、集落の規模からすると多いのでは思う。コーヒーを飲んだりするバーが2軒あって、ホテルが3軒ある。公共のものと思われる小劇場が1軒あって、元々は集落の一番上のところにあった修道院を改修して作ったもので、これを改修した人のところで私は働いていた（番号 15）。古い建物の壁部分に鉄やガラスを組み合わせて、一つの新しい機能をもった建物にするということがよく行われ

ている（番号 16）。ここではコンサートなども開催されていた。頻度までは把握してはいない。

街の中のお店

よろず屋さん 1軒

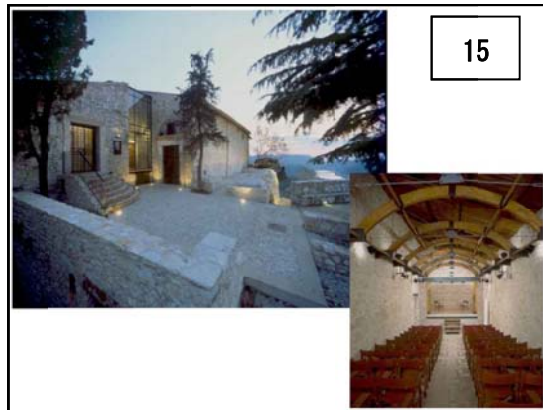
パンは毎朝、焼きたてが届く
その他、週に一度、野菜などの移動販売が来る

レストラン 5軒

Bar 2軒

ホテル 3軒

小劇場 1軒



PALAZZO CRISPOLTI

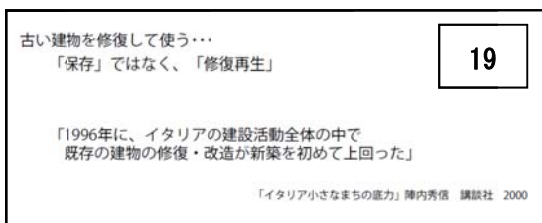
HOME IL BORGO DI LABRO PALAZZO CRISPOLTI LE STANZE INFO LISTINO 2010 MAP

●ホテル3軒のうち1軒が集落の中にあるが、高級なホテルになっている。また、集落から1キロ程度離れたところに、少し大きな修道院があったが、それを改修して、結婚式場、レストラン、宿泊施設、劇場、イベント施設もあり展示会などでもできる施設になっている

(番号 17)。私が居たときは、建築家が修復している段階で、現場を見に行ったこともある。これが公共のものかどうかわからなかったが、経営自体は民間がやっているよう。もともとの所有はよくわからない。ここが警察 (番号 18 : 赤○)。



●そういうふうに、小劇場、ホテル、イベント会場にしても古い建物を修復して、保存ではなく再生するという方法がとられている (番号 19)。



日本では文化財にしてそのまま残すが、修復することでカッコよくして活用することがよくやられている。そういうことを「レスタ

ウロ」という。本からの情報だが、イタリアでは 1996 年に修復改造が新築を上回ったと書いてある。

集落の中にはチェントロストロコという歴史的中心地という場所が指定されているが、ラブロくらいの小さい集落でもそういう区域が指定されていて、相当規制が厳しい状況。日本だと改築等において基準に合えば認可されるが、イタリアでは審査が厳しく土地の雰囲気にあっているかどうかまで 1 件 1 件審査されるそう。規制が厳しいということは財産権の制限が厳しいということでもあり、建物の所有が個人であっても公共的価値があるという証拠かなと思う。こういう考え方が、空き家の活用にも影響があるのではと思う。日本では集落を活性化させようとしても、空き家を人に貸さないということが問題になるが、イタリアでは自分の建物でもそうじゃないみたいな考え方が浸透していて、活用してナンボという考え方があるのかなとも思う。

●そのほか、イタリアの小さな都市が元気な理由として、特性から、中小企業が多いことと、大企業によって画一的な文化が作られることがあまりないということ、それから地域そのものの文化を大切にすることが根付いていることが大きいと思う (番号 20)。歴史的には 1861 年に初めて統一されてイタリアという国ができたが、それまでは都市ごとに国家を作っていたような感じだったので、地域の文化がそれぞれの地域でそれぞれ違うという考え方が根強く今でもある。また、学校の制度として、専門的な高校が多く、そこに通うことが普通になっている。皆が大学に行くという考え方ではなく、伝統文化を学ぶ学校、観光ガイドになるための学校など専門を学ぶ学校が相当あるのが面白い。そういう土壌が、みんなが大都市に住もうというよう

な考え方ではない文化を生んでいるのではないかと思う。

イタリアの特性	20
<p>中小企業が多い</p> <p>地域の文化を大切にする</p> <p>歴史（1861年に統一）</p> <p>学校の制度（専門的な高校が多い）</p>	

●地域の個性に関連して、1998年、バンディエラアラチオーネ、オレンジ色の旗という意味だが、ツーリングクラブイタリアーノという団体が、小さい街で優れた観光環境があるところを認証する制度を作ったそうで、その目的は、地域資源の価値付け、おもてなし文化の開発、地域ならではの手工芸品の活性化、地域の企業家としての能力を増進、地域のアイデンティティの強化で、こういう制度があることも小さい街に行きたがる理由のように思う（番号 21、22）。ラブロは、これに認証されており、ラブロみたいな小さなところがリストアップされる、価値付けされるような仕組みがあるということだと思う。

地域の個性について	21
	

地域の個性について	22
<p>Bandiera Arancione</p> <p>Touring Club Italianoの認証制度</p> <p>小さな街で、すぐれた観光環境の場所</p> <p>1998年～</p> <p>目的</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域資源の価値付け 2. おもてなし文化の開発 3. 地域ならではの手工芸品の活性化 4. 地域の企業家としての能力を増進 5. 地域のアイデンティティの強化 	

●一次産業について、最近では有機農法が多い、小規模経営が多いということだが、日本と共通していて、広い農地で大規模にやるというのではなく、家族経営をしているような農家が多いという特徴があるそうだ（番号 23）。日本と違うところは農協にも出しているが、そこに頼り切るのではなく、自分で市場に出しに行ったり、自分のところで直売したり、加工もやったり、宿泊施設にしてアグリツーリズムに対応しているのかもやっている。

イタリアの一次産業について	23
<ul style="list-style-type: none"> ・ヨーロッパ最大の有機農業国 ・小規模経営が多い（日本と共通） ・多角経営 <ul style="list-style-type: none"> 農協、市場、直売、加工販売、アグリツーリズム ※例）ワインの格付け「統制原産地呼称ワイン」 地域特性が味、品質を決定しているという認識が前提 <p>EUの農業政策（CAP）</p> <p>1992年以降、農政の重点を変化させている。</p> <p>価格・事象政策（価格補償直接支払と輸出補助金）</p> <p>農業環境政策を含む農村地域開発</p> <p>※ただし、EUの統一的な農業政策により、伝統的な農業が失われかけたため、CAPから離れようという動きもある。</p> <p>「オーガニックなイタリア農村見聞録」高谷栄一 家の光協会 2006</p>	

また、ワインの格付けに当たり原産地を統制しているところもあり、地域ごとに味が違うとか、地域のものという意識があることがイタリア人の共通の認識になっている。ワインだけでなくティーピコピアット（その地域独特の料理という意味）を普通の人々が作れて、それぞれの特徴を大事にする文化があるのだ

ろうなと思う。EUの一つの国になっているので、EUの農業政策として1992年以降、価格だけでなく農業環境を含む農村地開発を重視していることがあるそうだ。ただ、イタリアとしてはEUの基準に合わせすぎると伝統的な農業が衰退するということで、EUの農業政策から少し距離をおこうという考えもあるそうだ。いろんなところで地域の個性を尊重するという文化が根付いているので、交通の便はあまり良くななくても、ラブロには人が来るし、若い人もいて、生活がある程度成り立っているのかなと思う。

②事例を踏まえた意見交換

真田委員の事例紹介を受け、意見交換が行われた。

(松木)

自治体の収入はどういうふうになっているか分かれば。小さくて成り立つなら日本でもできると思うが、普通であれば、警察組織まで持って回っていかないように思うが、どうしているのかなと素朴な疑問を持った次第。

(真田)

ホームページなどで調べたが、そこまでは分からなかった。

(松木)

基本的には都市国家なので自立性が高いことはなんとなく理解できるが、現在でもそれを維持しようとする、コストもかなりかかる気がする。今まで回ってきたということは、ある程度何か支援があるのか。

(真田)

国庫補助があるのかもしれませんがね。

(松木)

コストでいえば、ホテルの宿泊料なども高いのですね。それぞれのサービスは、外から来たいという人に対する魅力をラブロが持っていて、週末や休みにはそういうところで過ごしたいと思う人達がいて、お金を落としている仕組みができてるように思う。

(真田)

そうですね。集落の外にあるホテルは少し安いところがあるが、集落の中にある古い建物を修復したホテルは高いようです。

(松木)

付加価値があるから高いと。みんなが欲しいことが満たされるので、ある程度経済性が成り立つような感じでしょうか。370人の町と200万人の都市が同じ権利を持っているというのは、聞いてみないとわからないものですね。

(真田)

大都市と小さい町では議員の数も当然違うけど、同等の権利を持っているということ。ただ、問題は出てきつつあるので、山の上にあるような町は山岳都市連盟をつくって広域で何かしようというような話も出てきているということが、2000年時点だが本に書いてありました。今は、少し変わっているかもしれません。

(松木)

日本の市町村数とオーダー的には同じくらいでしょうか。

(平尾)

面積では日本の8割程度、人口は半分程度。あと気になったのは、日本みたいな合併はな

いのでしょうかね。

(真田)

ないでしょうかね。そんなことしたらすごい反発が起こると思います。

(松木)

古い歴史をもっているところは、一つのコミュニティを構成しているのですね。

(大槻)

僕はイタリアのサルディーニヤとか行きますが、こんな感じの町が山の上にボンとあったりする。山の上にコンパクトシティがあるような感じで。そういう点では密集しているから、行政サービスがしやすいし、コストがあまりかからないということもある。サルディーニヤもそうですが、夏だけ住むとかして、冬は空き家になるんですね。1 か月、6万円程度で部屋が借りられたりする。そんな形で都会人がその季節だけ気軽に泊る。その場合、税金がどうなっているかわかりませんが、その間お金はキッチンと落ちるので、そんなことで支えられているのかなと思う。

(真田)

1 か月は夏休みがありますからね。

(三木)

町のなりわいは？ 観光業、サービス業？ 子供もいたりということで、何で生計をたてているのでしょうか？

(真田)

ホテル経営者は観光業としてやっているし、そこで働いている人もいるが、テルニやリエティに働きにいつている人も結構いると思う。

(松木)

車だと30分程度で、そうした町に行けるということですね。バスだとどうでしょうか。

(真田)

バスでは1時間弱といったところです。

(松木)

そういう感じのところは四国もありますよね。

(真田)

ローマからすごく遠いと思っていましたが、実際は、そうでもないんですね。ただ、ローマまで働きに出るのは難しいですね。

(松木)

リエティの市内に住むよりはラブロに住んだ方がいいという人がいるということですね。あとは、建築家等の通わなくてよい人達が移住してくるということですね。

(三木)

極端ですが、寝たきり老人などはないのかどうか。病院がないので、その場合は、どこかに行くわけですね。また、石の階段が多いので、老人には苦痛が大きいのでは。

(真田)

いたかもしれませんが、ちょっと詳しくは分かりません。少し話はそれますが、歩き始めた子供が、丸石がでていような石畳の凸凹した道を走り回っており、こういうところで生まれ育った人は、結構足腰が強いのではなかったことがある。お年寄りにも会いましたが、ゆっくりですが一人で歩いたりしていました。天気の良い日には、外に出て広場に集まっておしゃべりをするという光景が見ら

れました。

(松木)

この小さな村でレストランが5軒、バーが2軒というのも、それが成り立つということは、皆が利用するというような文化があるのでしょうか。そうすると、コミュニティとして成立するんですね。日本の常識とは違うなということですね。

(大槻)

昔から成立しており、それが人口が減りながらも続いているということではないでしょうか。

(松木)

人口の推移をみても、一番多くても813人ということは、日本と同じようにある時代都会には外に出ていたが、やっぱりここがいいねということで踏みとどまっている感じがしますね。

(真田)

イタリアの都市でも古い建物を壊して市街化していくという時代があったようです。それではやばいと思ったのが日本より早かったということでしょうか。

(三木)

ヨーロッパの建物はそのように補修ばかりで本当にもつのでしょうか。

(真田)

人が住んでいないものは古くなって崩れてきているのはあるが、修復して済んでいるのが倒れるということはないようです。修復は、レンガを積み重ねて、漆喰を塗ったり、あるいはきれいな石を並べたりとかするようです。

ここは地震もあまりないようです。私が見た現場では空洞のあるブロックを重ねてその中にセメントを押し込んで終わりみたいな感じでした。

(松木)

水や下水はどうなっているのでしょうか。

(真田)

水は、よくわからないのですが、集落の中に共同の水汲み場があって、それを昔は使っていたので、今は汲み上げているのではないかと。

(三木)

ラブロの標高はどの程度？

(真田)

約600メートルあるが、冬も雪はほとんど降りません。

(大槻)

夏だけ滞在する人はその人口の何%くらいいるのでしょうか？ 感覚的に。

(真田)

2～3人程度ではないか。私が居た時の人口が55人でしたので。

(松木)

その周りに残りの300何人かが住んでいるということですね。

(小林)

レストラン5軒がそこでどうすれば経営が成り立つのか不思議ですね。日本人の感覚からすれば、そんなに外食しない。観光客かなと思って聞いていたが、そうでもなさそうだ

し。夏場の滞在型かなと思う。長期滞在客がいてシーズンに稼いでということは考えられるかもしれないが。その村の人がよく食べにいらしているとしても、その人たちはどうやって稼いでいるのかとも思ってしまう。

(真田)

観光もなくはないと思うが、それは週末くらいだろうし。地域の外から食べに来る人がいるので、ある種、観光なんでしょうね。

(平尾)

消えてなくなった集落はないのでしょうか。

(真田)

ないことはないと思いますが・・・。

(松木)

この村が特殊な例ということでもないのでしょうか？

(真田)

ここまで小さいのは珍しいのでは。もっと小さいところでは潰れてしまっているところもあるかも。

(平尾)

これらの建物はいつごろからあるのか。

(真田)

中世から建て替わった家はないと言われてる。

(平尾)

街中に住んでいる人以外の人は農業？

(真田)

周辺の人達は農業が主体です。

(松木)

街の中心の55人が働いているのは、ホテル、警察など十数人くらいかもしれませんね。

(三木)

これらの建物規模で55人ということは、かなり空き室があると思うがどうか。

(真田)

そうですね。だから昔はもっと住んでいたんですね。

(松木)

建築家はなぜここに移住したのか。

(真田)

小劇場を改修したときにこの街が気に入って移り住み、ここで仕事（設計事務所）をしている。

(松木)

設計事務所であればここで十分仕事ができるのですね。ネットがつながっているからできる。

(真田)

そうですね。ただ、電気に不安があります。昔のお城のところにも一本電線が来ているだけであり、風が強かったりするとよく停電したりしていた。

(松木)

収入はどのくらい？

(真田)

よくわからない。裕福ではないが、幸せそうにしている。

(参考: 出典: プレジデント 07 年 12 月号)

・ 平均月収 (額面)

日本（東京）314,600 円、
イタリア（ローマ）190,200 円
・実質月収（手取り）
日本（東京）240,000 円、
イタリア（ローマ）140,000 円

（三木）

ここが有名になったのはどういうきっかけ
でしょうか。

（真田）

衰退していた時期があったが、ベルギーの
建築家が来て鋳鉄とガラスを組み合わせたよ
うなものを造って、街の中の何か所かおしゃ
れにしたりして、それで少しずつ有名になっ
たという経緯があります。

（大槻）

中世時代から安定していて、もともとサス
テナブルだったが、加えて外から滞在しやす
い社会制度的なバカンスがあると、ちょっと
おしゃれなところに行きたがるということが
あるかも。日本だったら移動時間がかかるし、
移動する人数も多いのでこうはいかない。ほ
かには、アグリツーリズムの中にワインがあ
るが、日本みたいに免許がとりにくいという
こともないので、ハウスワインとか各農場や
各町にワインがあって、それを飲ませてくれ
る。そうすると、そこに人が集まって滞在し
てくれる。ワインフェスティバルなどあれば
周辺からたくさんの方が集まってくる。車で
来て、飲んで騒いで、また車で帰るといふこ
ともあるかも。日本がやろうとしている滞在
型アグリツーリズムと似たようなものだけ
ど、それを成立させる社会の仕組みが大きい
のではないか。盆、正月以外の休暇があれば
いいですね。

（中川）

教育の話があったが、子供を学校に上げる
ときにどうするか。また、学校に上げるため
のお金をどうするかという問題が出てくるこ
とが、日本の農村で若い人達が定着できない
理由の一つかなと思っているので、解決策が
海外の事例であるのであれば、参考になると
思う。

（真田）

休暇の取り方など仕組み自体が日本と違う
ので、小さい中山間地域に住みながら大学に
行くのは難しいのですが、途中3カ月間程度
ベネチアに住んでいて、そこでベネチア大学
の学生と仲良くなったが、彼女らはイタリア
各地から来ている。その人達は一軒家に7人
で暮らしていて、一人卒業して出て行ったら
また一人入れるといったことでシェアしてい
る。大学も授業料は日本より安いだろうし、
一人暮らしさせるにも初期投資がかからない
し、家賃も7人でシェアすれば安いし、そう
した仕組みも全然違う。子供を大学にやるお
金も全然違うと思いました。大学の進学率も
日本に比べて相当低いと思います。

（参考：OECD 資料：図表で見る教育 2012 年版）

- ・2009 年の大学進学率 イタリア 49%、
日本 51%、加盟 36 カ国平均 62%
- ・2005 年の大学退学率 イタリア 55%、
日本 10%、加盟 36 カ国平均 31%

（松木）

専門的な学校が多いので、そこに行って卒
業して勤めるというのが一般的なものでしょ
うね。ヨーロッパはそんな状況ですよ。

（真田）

そうだと思います。大学に行くための高校
が特別にある状況のようですから。

(小林)

想像ですが、ファミリービジネスというか、親がやっていた仕事に近いような仕事でまかなえるだけの規模になっているのではないかと。つまり、人口が爆発的に増えたということがないと、周辺で仕事に就くことができるので、別に学歴を高くして職を探す必要性が少ないという気がする。日本は戦後、爆発的に人口が増えて、都市に出ないと就職できない。そして都市で生活するとなると学力なりを身に着けておかないと仕事に就けない。それが結果的に今のような状態に。特に医者になろうとすると学力をもっとつけないとなれない。そこまで高い必要があるのかどうかは分かりませんが。

(真田)

もしかしたら、今後変わってくるかもしれないですね。私が第二次ベビーブームの終わり頃なのですが、その後どんどん減ってきています。小学生の頃に地域の文化を学ぶことなどなかったのですが、今の子供は地域の特産物に触れるとか、お祭りに参加するとか、地域の良さを学ぶ機会が相当増えてきているので、少しずつ子供の意識も変わってくるのではという気はします。

(小林)

第一次産業にしろ、ホテル・旅館等のサービス産業にしろ、お客さんが来てくれれば、親の仕事を継いでいけますね。だけど、いわゆるサラリーマンという種類の人は、そこに入る力をつけておかないと難しい状況もありますよね。だから、親も大学に行かせたい、学力をつけさせたいと思う。そうすると、就職に有利な都会に出たいとか、教育環境の良いところじゃないとということになる。農村周辺の農業高校や水産高校を出ても、はるか

に役に立つことができるのと思うが・・・。

(松木)

でも、少しずつそういう方向に変わってきていて、テレビの番組でも取り上げられていたが、若い女の子が都会に行きたがらなくなっている。必要なものは地元でもネットでも買えるし、情報も来るし、地元で楽しく暮らした方がいいという。ある意味、そういう感覚になってきたのかなと思う。ただ、それをどういう方向で集約していったらいいか、今は壊れている状況で、どういう方向へ行けばいいのか分からなくて、それがこういう議論にもつながっている状況だと思いますが・・・。

(小林)

地域の経済が成立するかどうか、地域の中でお金が回る仕組みがちゃんとあるかどうかポイントになるのではないかと。若い人がそこで収入があって子供を育てられてというふうな。そんな中に観光客がお金を持ってきてくれて潤うというのも一つの見方と思う。コミュニティに根付いている人達が経済的に成長していけるのかどうか。

(松木)

もう少しお金を使うように日本はならないといけませんが、今、高齢者の方たちがお金を持っても使わない、使い道がないと言っている。少子高齢化の問題というより、消費が少なくなっているのが景気が悪くなっている原因だと言っているが、確かにそうだなと思えるところもある。その問題を議論するとなると厳しいが、課題解決ではなく、実例としてやっているところがあれば、なんとかなるんじゃないのというくらいの明るさで、いろんな可能性を議論するというふうにしたいなと思っている。それで、議論の仕方とし

ては、ラブロをモデルにするかどうかは別に
して、そういう成立しているモデルと都会側
での成立モデル、ある種の都会、街中でもい
いが、四国で考えているので、高松とか徳島
とか松山、高知で考える。そのように、街中
と田舎であるモデルが考えられたらどうかな
と。こういうふうになっていけばいいので
はないかという議論ができたらと思う。この
問題がなくならなければダメだという議論に
なると議論が止まってしまうので。

(三木)

循環するモデルで、例えば、100人で果
たして回るのか、あるいは、最低でも200
人、300人必要だとか、そんな議論ができ
るのだろうか。

(松木)

今の経済学だと、発展しマスが増えないと
モデルとして成立しないので、たぶん、どこ
かで閉じた瞬間に回らなくなると思っている。

(紀伊)

食べる部分に関しては、一次産業の人達は
それなりに食べていっている実態があります
よね。

(松木)

前回の議論で、高知では130万円で暮ら
していけるという話があったが、そういうレ
ベルを考えると、それはそれで楽しく生きて
いけるのでは思ってしまう。

(紀伊)

ただ、工業製品を買うのであればこれだけ
のお金がいりますよねという話になり現金収
入がないと難しい。自分たちが作ったものを
人が買ってあげれば、食べていけると思う。

(三木)

食っていけるだけでは閉じられないのが今
の世界と思うが・・・。

(紀伊)

だから、もの以外の収入が得られないとい
けない。100人のところでも、農作物を作
って外に出したことによってお金が入り、工
業製品を買う。そうなれば場合によっては可
能かもしれない。

(三木)

でも食っていけるかどうかは非常に難しい
ことだと思う。

(松木)

世界が100人の村として、役割分担を考
えたときに、銀行家は何をしているのかな、
なんて思ってしまう。価値が増えていくのに
応じて、お札を刷っていくというのは、人口
が増えている状況がモデルであるが、90億
人が地球に住んだら、そろそろ無理が出てく
るという雰囲気になると、人間はモデルをま
だ持っていない。

(大槻)

さっきの話を伺っていて、人口減の話と高
齢化の話をまぜて考えると、人口規模より人
口構成の方が問題ということが非常に分かる。
もちろん、文化的な背景が違うにしても、人
口のバランス、生産する側とのバランスがと
れていると、比較的小さいところでも回って
いくということが分かった。そのことを考え
ると、「住みたいまちに生きる」ということで
特に田舎を考えると、いかに若い人が都会か
ら田舎に来るかということがポイントになる
と思う。そこを考えると、一足飛びに定
住という話をすると踏ん切りがつかないこと

になる。コアが移住、定住としても、そのすそ野にゆるやかなものがたくさんあってこそ出てくるので、そこをもう少しとらえ直すべきなのではと思う。滞住もその考え方の一つですが、滞住の前の交流を如何に増やすか、交流のすそ野が増えると、短期的に住む人が増えて、そういう人が増えると定住の人が初めて出てくるというところを再確認した方がいいのではと思う。定住の人がいないと成り立たないので、交流のすそ野を増やして、定住すると短期・中期に滞在する人を計算することで、人口構成の補正をできるような仕組みを考えると、現実的なことになるのではないか。四国のど真ん中に大豊町があるが、そこに入って見て思うのだが、大豊町は人口が4,400人いるが、高齢化率が52%であり、消費が生まれにくい。介護といったことを除いて。地域が自給自足で食えるというのは悪い話ではないが、逆に言えば経済が発生しない。だから、4,400人のうちの2割、880人の若い方が、住民票を移して住まなくてもいいが滞在する仕組みを作ったら、それによって、今あるいくつかの店は回っていくし、定住する一部の人には、その人達を相手に何か新しい商売ができるかもしれない。そういう仕組みを目指したらどうかなと思う。一言でいえば、定住を前提とせずに、ゆるやかな感じで人口移動、人口補正を行うことで経済を少し回しながら、中山間地域の維持やコミュニティづくりなどの担い手としてそうした人を使っていく、そんな絵が描けるとサステナブルになるのではないかと思う。

(松木)

それぞれの土地で若い人達が来たくなくなるような魅力をつくれればいいわけですね。

(大槻)

結局は、生産年齢人口が増えれば良いということ。

(松木)

生産年齢プラス消費が生まれれば良い。

(中川)

そうですね。退職金を持った人達が常に入ってくるようなことも考えられる。

(松木)

定年以降の人達がうまく老後を楽しく過ごせる場所だよというふうになればいいですね。

(真田)

ただちょっと気になるのが、そういう場所になぜ定年退職した人が来るかというと、環境がいいから来るのであって、その環境を維持しているのは一次産業なので、その担い手がいることが条件になる。

(松木)

そうですね。その人達は一次産業に入ることができないですね。たぶん。

(真田)

若い人が一次産業でやっていけることも必要ですね。

(中川)

儲からない農業をする人はたくさんいると思うが、それは若者である必要はない。ただ、若者が農業に就いて食べていこうとするときは、維持できる何か新しいことをやっていかなきゃいけないという問題は引き続き残っている。

(松木)

明らかなことは、80歳くらいまでを労働人口にしないといけなくなっており、今が過渡期かもしれない。そういう人達が働いて、生きていける場所をちゃんと考えていけばいい。若者の定義を少し広げることも必要かもしれない。

(真田)

50歳くらいは若いうちに入ると思いますね。

(大槻)

高知の中山間地域に入って思うのは、「人」、「もの」、「金」があるが、「もの」としての環境は非常にいいが、「金」がない。そして「金」以上に「人」がいない。だから、新しいアイデアを出して形にしてマネジメントしていくということが必要。人がいないから、なかなか踏み出せない状況にある。日本一にならなくても、食っていくためのスモールビジネスを考える。意外とハードルは低いはずなんです。それを越えるだけのアイデア、あるいはマネジメントがないかどうか最近考えているところ。そういう意味では、ラブロの建築家ではないが、呼んできて手伝ってもらえるような枠組みができればいいなと思っている。

(真田)

徳島の神山ではサテライトオフィスが活発になってきているが、そこは外の人たまに來たり、滞在したりしており、古民家を改修してレストランを開くとかという話が進んでいて、まさにラブロの例のようで、なかなか面白いなと思っている。神山はそこで自分で仕事ができる人を逆指名して移住してもらう仕組みをつくっていて、町が仕事を用意しないと來ないような人には、來てもらわなくてい

いと。町の中にパン屋さんが欲しいとかいうふうに進んでいる。今のところ、私が心配しているのは、その周囲の農地などの環境が永続的なものととらえられているので、一次産業を担う人を集中的に呼んでくるということをやれば完璧になるのではと思っている。今うまく回りつつある例だと思う。

(大槻)

「限界集落」という言葉があるが、大豊町は4,000人程度ですが、「限界自治体」といえるかもしれませんね。高速を使えば高知へ1時間くらいで行けるので、意外と良い場所ではと思う。

(小林)

否定するわけではないが、建築家等をという話もあったが、來れる人は少ないと思う。そういう人達が本当にそこで食える環境ができてきているのか、結局、芸術家だとか大学の先生とかもあるかもしれないが、時間が使えて、晴耕雨読の生活でいいような人達は少ないと思うんです。そういう人達が行こうと思うような環境が十分でないのではないかな。経済が回らないといけないので、プラス観光も必要になるのでは。

(松木)

だから、次にリタイアして年金をもらいつつある人は、ベースはそう多くないけど生活できるから、そういう人達を一つのリソースとして考えて、そういう人達が來やすいところをつくれれば、買い物等はするのでベースとしての産業はできる。一次産業の方は集約して農業を効率化していく、ものづくりの技術を農業に入れるということで効率化でき、大儲けはしないが普通に維持できる程度であれば可能と思う。

(真田)

集約化というが、棚田を集約するのはなかなか難しいし、そうすると風景も変わってくるのでは。

(松木)

棚田は守るのですが、棚田のやり方を少し変えて景観も保ちつつ、機械化することはできるのかなと思った。

(真田)

小型の機械は今でも使っているのですが、集約は山の裏側の田んぼはやめて町の中心にある休耕地に移動してもらおうとかいうことでしょうか。

(松木)

今は山の田んぼに行くだけでも大変ですよ。くずれそうな道沿いを上がって行くようなことは老夫婦には難しいので、そうではなく、何かやり方があるのではと思う。

(真田)

町の中心の休耕地の権利の転換がうまくいけばいいかなと思う。あるいは、付加価値だと思っていて、今は食の安全などから有機農業も行われているが、価格が高く売れるものができれば。ただ、土づくりに3年くらいかかると言われており、集落に住んでいて年金をもらっているお年寄りが、年金があるうちに土づくりを行ってくれて、次代に継いでくれたらいいなと思っている。

(紀伊)

そういうところはある程度組織だって取り組む必要があり、銀行が知恵を出せる場所だと思う。

(松木)

どうしても銀行はリターンを取ろうとするので、リターンを取らない世界でコミュニティを守りたいという気持ちでやることに、銀行が出てくるのは難しいのではないかなと思う。自分が住んでるところに他の人も住んで、継続的に町を村を守っていってくれるのなら、私も加わろうという気持ちになるような取り組み、それが回るような、しかも、病気的时候は最低限のケアは受けられるような、そういう何かがあるコンセプトがあると、それなら俺も行ってもいいという人が出てくるイメージを持っている。じゃ、そのとき何をしたらと言われたら、まずは土づくりを3年お願いしますと。1年単位ではなく5年くらいのレンジで考えてもらおうと変わるかもしれない。企業ではやれないですね。3カ月先はどうなるか分からない状況ですから。

(紀伊)

棚田を残すという便益が他の面に波及するということがあると思うが、例えば、観光だとか著名人が来てくれるとか。そうするとリスクだけを棚田を造る人に背負わせるのではなく、リターンする仕組みがないと難しいのではないかな。

(松木)

小豆島の棚田に先日行ったが、そばのレストランは非常に混んでいるんですね。私の車は品川ナンバーなんですけど、わざわざ東京から来たんですかと問われたり、いずれにしても相当人が来ている。だから、棚田だけでも観光資源になるんだと。

(小林)

香川というと「うどん」ですが、田舎にあるうどん屋のうどんだけ食って帰っていくと

ということがあるが、でもそのうどん屋はうどん屋だけをやっているのではなく、農業などもやっていますよね。昼間の時間だけ開けて売り切れたらお終いということで観光客も来る。定住ということではないが人が来る。そういうことで、うどん屋の息子も継いでやろうかというケースも出ている。

(松木)

前にも話したが、農業だけをやるのではなく多様な仕事をやって、それでそこそこの収入があるようなモデルができれば回っていく。

(大槻)

さきほど銀行の話があったが、一番高知に欲しいのが、マイクロファイナンスなんです。人、もの、金の話がでたとき、特に地域おこしとかしていると、男ではダメで、お母さん連中が地元の文化を活かしてカフェをやったりとか、そこから民泊に行くとか、うまく回っているところはコミュニティビジネスが成り立っている。漁師町の土佐佐賀にしても四万十町にしても。ただ、集落によっては、パワーが弱いし、個人としてのお金がない。そういう状況で何かアイデアがあって面白いところまで行ってポシャってしまう。するとそのまま高齢化が進んでしまう。そういうときマイクロファイナンスとかクラウドファンディングとか、最初の一步を提供する仕組みがあればと思う。そういうのが地域の永続性や多様性を伸ばすのに大切と思っている。そのほか、高知県の住宅課の方と話したのですが、実家持ちの人がいて、継がないと思っている人がいるが、いちいち帰って管理するのは面倒くさい。だったら、その実家を自分の友人や管理する人とシェアできないかと考えており、管理コスト、人的コストもシェアする。例えば、年に10万円かかるのであれば自分

が5万円負担するので、残りの5万円を友人たちに負担してもらい、友達がそこに遊びにいったら自由に使ってもらう、あるいは被災した際は、そこに疎開してもらってもいい。また、今やっているのはコミュニティどうしの交流。受け入れ側も飛び込む側もよっぽどカリスマ性がある人がいないとなかなか進まないが、まずはちょっと遊びにいったときに交流することから始めたらよいが、そのときコストも絡めた仕組みがあると無理なくつながっていくのでは。そしてそこから滞住とか定住とかにつながっていくのではと思っている。

(松木)

お金を払ってでも不便なところへ行きたいと思わせるような仕組みを考えるということですね。

(大槻)

私の父も、実家の維持に100万円とか出し、累計すると1,000万円くらいになるかもしれないませんが、そんなことしても、誰も住みに帰らないと思うのですが。」

(松木)

その状況は、日本のいたるところにあると思いますね。息子さんは都会に出て、家族も子供も持っていて、実家は親父さんもお袋さんも亡くなって空き家になっているが、売るのは親戚が反対するという例が、私の周りにもたくさんある。

(大槻)

だとしたら、お互いにシェアしあって、例えば、行ったら掃除だけしてきてもらうだけでも大分違う。そうしたパーソナルネットワークを核にした交流というのは強いんですね。

仕組みだけつくって赤の他人のところに行きましようとか移住して頑張るってねというのはなかなかプレッシャーが大きい。

(松木)

小さい町のモデルは面白いと思うので、今回まとめるうえで、一つの典型としてラブロの話は取り入れさせていただきたいと思う。また、今日お聞きして新たな疑問もでてきたのですが、特に経済のところ、どのくらいの収入があると回るのかなという点、ホテルもどのくらい収入があるのかな、ホテルだけでやっているのかなとか疑問は広がるが、おそらく、そこそこの収入はあって、また、いろんなことをやって生活しているのだろうなと、あくまで想像ですが思います。そしていろんな人が来て、バランスして回っているんだろうなと。あまり大儲けはしないけど、食っていけるというスタイルが出来上がっているという理解ですがどうでしょうか。

(真田)

そうですね。すごく大きなお金が動いているという感じはないですね。

(松木)

高知で130万円で暮らしていけるということからして、似たように必要なお金は使っているし、それが回るような仕組みができていて、地元の人たまにはレストランにも行ったりしているし、いろんなところにちゃんとお金を落としていると思っています。

(三木)

高知に居たことがあるが、高知は相当お金を回してますよ。喫茶店も多いし、酒もどんどん買っているし。

(松木)

宵越しのお金を持たないことは経済にとっては大変重要なかもしれませんがね。

(真田)

年金を持っている人がわざわざ来るような場所にしようと思ったら、やはりクリエイティブな人、都会的なセンスを持った人がそこにいて、定住するというのが絶対に欠かせないと思います。

(三木)

大学の学生を、そういうふうに洗脳できないかな。徳島大学の学生を住みこませるのかなのでしょうか。

(真田)

工学部の学生は難しいでしょうが、別のデザイン系などは可能かも。高知女子大学ではパッケージ系のデザインをしたりして地域に関わったりしていますね。

(大槻)

高知大学でも、自分もやっているのですが、大豊町で二酸化炭素削減健康野菜を三セクでつくっていて、棚田は管理できないので、そこを借り受けて、代わりに農業をして、文化的な景観を残しながら高齢者を支援しようとやっている。大豊町でコメを作ってもしかなかったないので、野菜に変えていこうということで取り組んでいる。「萌えキャラ野菜」として全国から萌えキャラを募集して、おたくの学生がフィルタリングをかけて、最終的には町民の投票で決定して、商品パッケージになって、高知県下のスーパーサンシャインで販売するということをやっている。そういうことで認知度がアップしてきているが、少し付加価値を付けた野菜が安定的にブランドとして

県内で流通する形をつくりたいなど。そうすることによって、高齢者の所得も少しプラスになる。次は、それを契約栽培という形で外食産業にも買ってもらえば、もう少し経営が安定することになる。そういうステップを踏んでいきたいなど町長と話をしているところ。なかなか難しいところもありますが。

③都市的地域についての議論

(松木)

田舎派の人が多数で、小林先生が都会派だったようですが、松山がこうなって欲しいという視点で観たときに、もっとこういうふうに変わっていけば魅力的な街中になっていくという議論をしたいのですが、いかがでしょうか。

(小林)

松山はコンパクトシティとして考えていて、医療関係が1時間半かかるのは自分にとって我慢ができないが、今のところは徒歩10分で行けるし、路面電車を使えば県立中央病院へも行けるし、もっと高度な医療であれば、がんセンターもあるしというように非常に便利です。いわゆる大きなホールもあるし、演奏会も米朝も来るし、そこそこ満足ですよ。1回目にもお話ししたように、ヨーロッパの何かの展示会は松山ではないですよ。そうすると出張で東京へ行き、それを観て最終便で帰ろうかなという生活をしてます。私はそれでいけるが、そう出張もない人は悔しい思いをしているんだろうと思います。

(松木)

でもその人達に、では東京に住みたいですかというとならないのかも。

(小林)

そうですね。移動に時間がかかるとか、例えば、文京区だとかに家があれば便利ですが、そこに住める人間がはたして何人いるか、現実には八王子に住んで通勤時間に1時間半とか2時間かけて満員電車で都心まで仕事に行くのはごめんだよねということになりますね。私自身は関西で育ちましたので、大阪に出るのに電車で30分は当たり前だったので、都会の生活がどういうものか想像はつきませんが、今のような気楽さをともなう生活をしてしまうと、手放したくなくなってきましたね。

(松木)

松山は50万人程度の都市ですが、周りは急に人口が減るのではなくだらだらと少なくなるんですよ。

(小林)

松山の経済圏で言えば、南の伊予市、東南の砥部町、東の東温市が入りますね。教育という点で言えば、鹿児島と松山くらいしかないという言い方を私はしていますが、私学の進学校があるというところがいい。県立のトップ校はどこでもあるが、プラスして私学の進学校があつて、県外生徒も来る。このクラスの進学校があるのは、首都圏、名古屋圏、関西圏ぐらいしかないですよ。このように教育でもそこそこのものがあつて満足できる。

(松木)

そうすると、お医者さんも安心して通勤して来れる？

(小林)

現実には、県立中央病院以外の松山以外にある県立病院の先生の子供さんは寮に入れていると言われますね。そういう点では松山市は

コンパクトシティとしていいレベルにあると思う。東京でなくてもいいかなと思えるのは、インターネットが普及してオンラインでものが買えるので。愛媛大に来る前は金沢大にいましたが、その8年間は、研究者としてはインターネットを使っていましたが、金沢に来たときはオンラインショッピングはできなかった。それでがっかりしたのは、専門書が見られないこと。地方の本屋に行っても専門書を置いてない。だから、関西の実家に帰ったときに梅田の紀伊国屋を覗いて手に取って見るということをしていました。そのように金沢でなかなか手に入らなかったが、今はインターネットで洋書も和書の専門書でも手に入る。欲しいものが手に入る状況では松山もいいねという感じになる。

(松木)

東京でないと買えないものはないと。レストランの料理とか、美術展とかは松山では難しいが、それ以外は支障はないかもしれませんね。そうすると東京にいる意味もなくなってしまう。ウインドショッピングができないので女性にとってはどうかというところがあるかもしれませんが。

(真田)

私は出張の際に行っていますね。年に20回以上。

(小林)

そうですね。出張に行けるのであまり感じないのかもしれませんが。

(松木)

大学の先生は、東京だけでなく海外にも出張で行けるので普通の人はちょっと環境が違いますね。

(紀伊)

ブランドが揃うのは100万人くらいの都市圏が必要で、その意味では四国は人によっては物足りなく感じると思うが、高速鉄道などがあって30分くらいで都市間を移動できれば、100万都市圏が形成できる。そうすると今までなかったサービスもどちらかの都市で受けられる可能性が生まれる。

(松木)

先般、四国フォーラムというところで藻谷さんが書いていましたが、橋ができる前は不便だったが、できたら京阪神に買い物に行って地元が寂れてしまうと。ストロー現象で、仙台もそうで、東京にくるようになってしまったと。必ずしも、交通手段が整備されたからといって思ったようにはいかず、その辺微妙だなと思っている。

(真田)

徳島大学の学生も学割を利用して関西に行って、ワンシーズンに一回買いだめしてくると言いますね。近くにそれくらいの規模の都市があれば、広島でもそうですが、有名な全国展開している店舗が一つのデパートに入っているというのが一つあれば便利ですね。東京であれば、この店は新宿で、あの店は銀座でということがあがるが、これは結構不便ですね。

(小林)

淡路島では阪神間の学校に通わせている例がありますよね。舞子の駅までバスに寄せ、灘とか光洋とかに通学している。これは橋ができてからの話ですが、淡路島のバス停の駐車場には、送迎しているお母さんたちの車がたくさん見られる。教育の面でもストロー現象が起こっているんですね。

④四国地域でのモデルの事例を議論

(松木)

最初の会議で、大学にみんな行く必要がないとか、競争のことは別問題とかのお話がありました。現実的にはそんなことも起こっており、アンバランスがあるということですね。都市の規模について、30万人くらいの規模はいい感じだなと自分では思っています。田舎だと3,000人くらい、合併前がほしいような感じで、今治市や新居浜市が中心街とその周辺で3万人くらいの規模でないか。最初のエリアのゾーンという話でこのことも言ったが、規模ごとの特色が出て、自分が選んだ地域で、特色にあった形で住めればいいよということでモデルができればいいかなと最初思ったんですね。今でもその気持ちはあまり変わっていないが、都市部と田舎部については、ラブロは極端に小さいが、うまくアイデアを出していけばモデルになるのかなと、そして都会の方は都市計画を専門にしている人がいるが、モデルづくりは実質的に難しい状況もあるのではないかと。だったらアイデアを出していったら面白いのではないかと。それを一つ絵を描くと、四国としてちょうどいいのができるのでは。

(小林)

ちょっと話は変わるが、合併の話で少し思うのですが、合併しなかったところは、結局は経済的に成り立っているところですね。いろんなタイプがあるのですが、よく見かけるのが温泉を抱えていて経済が成立しているところが残っている。だから、3,000人なり、1万人なりで残れたところはそういうところかなと。

(真田)

徳島の佐那河内は合併していませんが、合併の時、ゴミ処理をどうするかという問題で、処理場を持ってないから合併しないというところもあったようですが、佐那河内ではゴミの分別を徹底して、資源になるゴミと処理に費用の掛かるゴミに分けて、また、ゴミの収集日を半分くらいに減じて、浮いたお金で中学生まで医療費をタダにするとか仕組みを作って、みんな頑張っているなどの例もある。

(松木)

それは面白い。お金が戻ってくるとなると真剣になりますよね。

(真田)

しかも、環境のために分別しましょうということに加えて、お金がかかるゴミとお金になるゴミという分け方をしているんですね。これは結構若い職員が一生懸命熱心にやっていますね。

(松木)

都会でもそういうメッセージは伝わりますね。今、なんとなしにやっていて面倒くさいと思っているが、仕組みができれば従うよということはありませんね。

(小林)

佐那河内の人口がどのくらい分からないが(事務局注:約2,500人)、人口が50万人のところ、こんなことやりましたと言っても、一人当たりでは100円とかそんなオーダーの金額でしょうが、人口が少ないところでは直接的に自分に返ってきていると感じますよね。

(松木)

コミュニティの中でコストと時間が何にかかっていて、どうしたら良くなるかという情報をちゃんと共有化できたら変わるかもしれないですね。コミュニティが小さければ小さいほどうまく回るかもしれませんね。単に我慢するだけでなく、コストを理解しましょう、そしてこれだけ返ってきますという目標ができれば、コミュニティの連帯感をつくることになりますね。

(真田)

そうですね。面白い取り組みをいろいろやって、昔の集落ごとに、47集落くらいあるのですが、それがいくつか集まった単位があって、それがどのくらいの単位かは忘れましたが、あるグループの人達が村長の前でプレゼンテーションして、こういう事業をやりたいのでこれだけお金をくださいというようなことをやって、実際事業をしたら、またプレゼンテーションをして結果を報告するというようなこともやっている。議会もあるので、あまり直接自治みたいなのをやりすぎると、議会の人達が怒ったりすることもあるらしいんですが、自分たちで発案して村のお金を分けてもらう方が、良くお金の流れが見えてくるというのは面白いかなと思います。

(松木)

以前もちょっと話しましたが、海士町でしたか、コミュニティがちゃんとした経営をすると一番変わり得ると思います。面白いところは、みんな市長や町村長がコミュニティをうまく動かしていますよね。国のルールは超えられないけど、だったら特区を設定してやっていくと。そんなパワーがあると変わるかもしれませんね。だから小さいところはそんな可能性を秘めているのかなと思う。ポテン

シャルもある、魅力もある、ただ、人が来るきっかけが作れないのと、どうしたらいいのかわからないというところがあるかも。

(大槻)

なんとなく似たようなことですが、大豊町や土佐町、本山町も同じような状況であり、どんぐりの背比べなのですが元気なんです。例えば、本山町は健康米という棚田を利用した米作りを行っています、何が違うか、文化的な背景とかあるんでしょうが、動ける人がいるかどうかなんです。そういう人がいると外から人を引っ張ってきて、もっと人が入ってくるという循環ができています。こういうところはモデルケースになる。でも、そうでないところは、回らない。もっと言えば、問題なんだねと言いながら変わらなくてもいいやと何か理由付けして変わらないところもある。そこを打破する人、もの、金の何パターンかの方法や提案が、プラス α のところまでいけるといいのだがなあと思う。その中には、さきほどのゴミの取り組みもあるしといった。

(真田)

確かに田舎の方は保守的な部分があるが、まずは交流人口を増やして、外の人に来てからといって悪いことにはならないということと言い続けていくことも大事ですね。神山の場合、外国人のアーティストがいっぱい来ていますが、その人達を受け入れていくなかで、知らない人が居ても面白いんじゃないかなという空気ができていったということです。

(大槻)

能力がすごくある人、例えば建築家などですが、そういう人を一番初めに呼んでくるというのも一つの手ではないか。絶対地域に何かしてくれると。高知ではそういう取り組み

をしているところがあるが、例えば、旧土佐山村、そこではパタゴニア関係の方で外資系の広告代理店の偉いさんだった方呼んで、地域全体を「土佐山アカデミー」として町づくりや地域活性化の学びの場としている。今度は、その人が仁淀川に移るといので土佐山地区はどうするんだという話もあるようですが、外からキーとなる人を取るということも大切になってくる。そういう意味ではシンガポールのように、能力のある人はどんどん移民してくださいというような話を聞くと、最初の一步として面白いアイデアや変える力を持ったプロフェッショナルな人を呼び込んでくるということも、もう少し制度的にやるのもいいのかもしれない。

⑤地域医療について

(松木)

前回、話ができていなかった医療の話で、平尾先生からコメントを頂ければ参考にさせていただきます。

(平尾)

若い人は病気やけがをしても、もとの健康を取り戻すことを目標にできるが、年齢を重ねるとそうはいかない。高齢者に対する医療の役割は、個人がやりたいことができる健康水準まで引き上げるということになる。それぞれのライフステージにおいて、そのような医療の在り方が大切だと思う。

(松木)

ある意味、病気と闘うのではなく、病気と付き合って、あるいは向かい合いながら自分のやりたい生活をしていくということが選択肢に入るといことですね。

(平尾)

屋島までは登れないけど、栗林公園までは行けるようにしてあげたいということ。

(松木)

そうすると治療のやり方が変わってくるということ？

(平尾)

そうですね。機能維持、足りない部分を追及するのではなく、プラスの部分を考えていくということでしょうね。

(松木)

我々の仲間でも田舎に住みたいが医療が充実していないと不安だという人がいる。衣食住の「衣」は「医」で、「食」は「職」と思うところがあるが、それらが安心できれば田舎に来れると思う。医療の現場では、考え方が患者の幸福度を維持することに着目する方向に変わってきていると聞いているが、そのように変化してきているのでしょうか。

(平尾)

変化してきていると思う。ただし診療報酬制度などの仕組みがそれに合っていないところもある。医療施設も経営しなければなりませんから。また最近では、患者さんの専門医志向があり、自分の専門以外は診ないということも出てきている。そうすると医師が何人いても足りない。そういった中でジェネラリストである総合医を育てていこうという動きがある。その一方で手術などは専門性を要求されるが、近年外科系の医師が不足してきている。今後高齢者の増加とともに手術は増えることになるが、手術を行える施設は集約化される可能性が高く、住んでいる近くの病院

で手術を受けられないケースも多くなってくるだろう。

(松木)

住むんだったら、それで満足してくださいねということも言えるのでしょうか。

(平尾)

ある程度はそう言える。全部そろってないと住めないというのであればそこはあきらめるしかない。

(大槻)

田舎に医者を呼び戻すという話があるが、そういうときにこういうポイントを押さえていたら呼び戻しやすいという何かがあるのかどうか。

(平尾)

若いうちはどこそこへ行けと言われれば行ったかもしれないが、それを機能させていた医局制度は崩壊した。また病院では40歳代が中核となるが、医師にも家庭があり、ちょうど子供の進学を抱えていれば、田舎には家族で住めない。実際に単身赴任という人もたくさんいる。

(松木)

医療の問題でなく教育の問題が絡んでいるということですね。

(平尾)

そのほかにもプライバシーの問題もある。私も小さい町にいたことがあるが、自分の行動をみんなが知っているというプレッシャーがあった。

(松木)

地域で医療をやりたいけど、40代では家族の問題で出ていく人がいる。教育の問題がなければずっと居たいという方もいるわけですよ。

(平尾)

今後、医師の世界でも高齢化が進む。あと10年経つと高齢医師がさらに多くなるが、この方々にも地域医療をお手伝い頂くということも考えられる。

(松木)

高齢医師が高齢者を診るという構造。ただ、高齢者だけを集めるという発想はどうかと思う。人口構成はバランスして欲しいと思う。

(平尾)

そこに住みたいと思う人が住めるような仕組みを整備して、それをなるべく維持して欲しい。

(松木)

さきほどのラプロの話にあったが、公共のバスが3本しかないということですが、日本だったらもっと増やせというのでしょうか。やれないことはやれないという割り切りや、不便だけでもしょうがないと思いきれるのは、住民側の問題なののでしょうか。医療も同様の感じがしますね。

(真田)

公共に対する期待が日本と違う。自分でやらなきゃという意識があるよう。イタリアの公立病院は全部無料なのですが、その分サービスはあまりよくないということは割り切っているようです。列車が遅れるのも当たり前であり、一定のサービスが受けられるという前提のもとに生活していない。

(松木)

そういう意味では、日本は良い国であり、そのコストを払いきれなくなっている。風邪で病院に行くのは日本くらいとも言われているが、そうなると、この議論が難しくなる。ただ、メッセージとして、公共のものに対して頼る姿を変えていかないとこのままではやっていけないということが明らかですね。

(平尾)

サービスが全くないわけではないが、その地域でのサービスの在り方はこうだと理解して住む必要がある。医療は対面が基本であるため難しい部分もあるが、ICTで補える部分もある。共通電子カルテなどの整備を進めていかなければならない。

(松木)

ただ、それに関わっている若い医師は危機意識が非常に強いようですね。

(大槻)

市民側に対する医療教育、プライマリケアは専門性を言わないなど、医療教育を踏まえた地域医療づくりの仕組みができればいいなと思う。患者の立場では、どういう医療をどう受けたらよいか不安だから、つい、専門医をと言うのだろうし、その一方で、何かあったらということでリスクを回避することに医療現場が疲弊し、医療システム全体が回らなくなる悪循環になってしまう。

(三木)

今の状況で、例えばの話であるが、四国が一つだったら医療はどうでしょうか。

(平尾)

ある県には何科がたくさんあるが、この県

には少ないといったことがなくなるとか。また、県境のところの人は他県の病院に行っており、患者さんの動きと行政の管轄が合っていないところがある。市町村はあってもよいが、県はどうだろうか。

⑥とりまとめについて

(松木)

いろいろお話をいただきありがとうございました。この四国がどういうふうになって、こんなところになったら魅力ある場所になる、というそのゴールを議論してみようという取り組みは、青臭い議論になるかもしれないが、やってみましょうということで始めた。どうやってそこに行くかはわからないけれども、行った先の世界では自立できそうな、そういうイメージを持つような画が描け、それ自体に価値を持っていれば、みなさんそこに向かっていくようになるだろうと思うし、社会に対してインパクトが生まれる可能性がある。そういう志で始めた。こういう具合になったら面白い活気のある四国になるのじゃないかなという素案をまず作らせていただいて、それに対する意見を今度いただくというやり方をしようと思っている。この議論はいつまでたっても結論は出ないので、いついつ時点でこういう議論をしましたというのを整理させていただいて、それに対して皆さんの意見をここはこうだねということを入れていただいた形に整理する。そういう形でまとめておきたいと思います。また、今後、外部の方との議論の機会も設けようと思っています。ありがとうございました。

4. 議論を振り返って～委員からのメッセージ～

3回の議論を踏まえ、松木所長を除く各委員からメッセージをいただきました。

徳島大学 田口太郎 委員

現代は高流動性社会であり、情報化社会である。高速インターネットインフラやネットワーク技術の普及により、カメラ付きの端末さえあればどこでもテレビ会議を手軽に利用し、世界中とリアルタイムで情報交換することも可能となった。こうした時代では場所に立脚した優位性や不便がかなり減りつつあるといえる。インターネットに限らず物流システムも高度化していることから買い物弱者の解消もあながち夢物語でもない。こうした状況を踏まえると、今まで「不便」と言われていた、あるいは「不便を受け入れる」必要があった地域でも、不便の解消は近づいているとも言える。どうしても「住む場所」を考えると、都市部か農村か、仕事があるかないか、という二元論で考えがちであるが、暮らしが場所に縛られなくなれば、フワフワと浮遊するノマドな人生も現実味を帯びてくる。

現にIT技術者やデザイナーなどは必ずしも都市部に居住する必然性もなくなりつつあり、各地で多自然居住を満喫するライフスタイルを聞くようになった。つまり、住環境が豊かだとされる中山間地域（いわゆる田舎）を多く有する四国はこれまで大都市へのアクセスが悪く仕事の少ない、居住困難地域であったと言えるが、近年の技術発展によってその物理的デメリットはなくなりつつあるのである。一方で、誰でも田舎に居ながらにして仕事ができるか、というところではない。田舎で仕事を進めるにはある程度、仕事が個人レベルで出来るということも必要であろう。となると、これもいわゆる都会的な仕事の仕方とも違ったものとなる。しかし、近年個人の働き方も変わりつつ有り、1人で仕事をこなす若者も多く現れている。彼らは自ら需要（仕事）を創り出し、様々な業態を掛け持

ちすることで、クリエイティブな生活を維持している。こうした“新しい仕事の仕方”が出来る人材にとっては「都市」や「農村」という枠組みよりも「自己実現の場」としてどこが適しているか、という選択となっている。都市のメリットとも言える知的刺激や情報量をインターネット技術により克服できるようになるこれからの社会ではむしろ豊かな住環境を有する四国のような場所の方がメリットが大きいのかもしれない。

無論、四国を始め日本の地方都市や農山村には居住者に提供する仕事は少ない。しかし、上記のような新しい仕事スタイルが広まる中では、仕事は自ら作り出すものであるがゆえに「地域に仕事がない」は理由にならなくなって行くと思われる。さらに“自ら仕事を創り出す”タイプの人材がこうした地域での暮らしを選択すると、必然的にクリエイティブな人材が多く集まる、という状況を生み出している。これは東京にもまさる密度の濃いコミュニティが実現する場とも言える。

私自身も四国・徳島に来て1年半であるが既に多くのクリエイティブな知人を獲得することが出来、こうしたネットワークによりクリエイティブな刺激は十分受けている。学術的な議論の場はSkypeなどのサービスを利用することで、移動の時間を割かなくとも議論の場への参加は可能である。大学人は大学という組織に属していながらも比較的自由度が高いため、場所を選ぶ必要が少ない職種の一つかとは思いますが、今後さらにその業種は増えていくと思われる。

近い将来、それこそ「住環境」が居住地選択の重要要素となり、それを高く維持する地域が豊かな地域となっていくだろう。

徳島大学 真田純子 委員

「四国・住みたいまちに生きる」という本企画は、研究者が『そもそもどういう社会を想定して研究開発をしているのかということ』を議論することが目的の一つにあったようである。

この問いに答えるため、まずこれまでの私の経歴や徳島に来て感じたことを紹介する。

私は東京で大学時代を過ごし、就職のために徳島にやってきた。

東京にいるときにはそこでの暮らしに大して疑問も持っていなかったが、徳島に来てみて「一極集中」という言葉が頭をよぎるようになった。つまり、皆が東京に集中しすぎている、と感じるようになった。それは人口配分のみならず、考え方も東京を中心にした「消費社会」の考え方もあるように思った。

地方には、地方の良さがあるし、地方の暮らしがある。たとえば東京で週末に自然の豊かな場所に遊びに行こうと思えば、まずは渋滞にはまる必要がある。そして公園など「用意された」自然に触れ、帰りにはまた渋滞である。一方で地方では、車で20~30分も走れば、すぐに絶好の遊び場となる河原や、滝、その土地ならではの美味しいものに到達することが出来る。これほど暮らし良い場所はないのではないと思う。しかし、そういう側面はあまり理解されていないし、地方に住む人でも、週末には大型ショッピングセンターに行くことなどが「遊び」であって、地方な

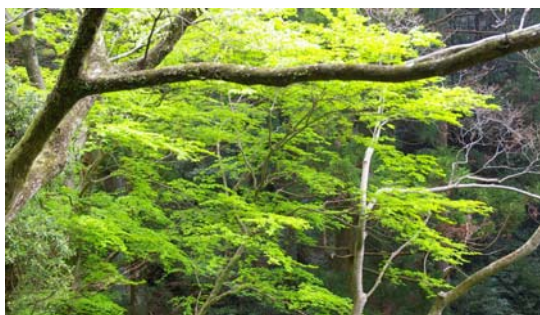


図1 身近にある良い環境

らではの暮らしを享受している人は少ないように思う。

また、徳島に来て農家の方々とともにまちづくりをするようになって、そこには「暮らし」があることを実感するようになった。

地方の活性化などを都会の目線で見、「都会の人がそこに行って交流すれば地域は活性化する」と考えている人は、実際に多い。

しかし、地方の人は都会の人の「遊び場」を提供するためにそこにいるわけではない。行くだけでは生活は成り立たないし、田舎の体験観光だけでは、地方に暮らす人（とくに農産漁業にたずさわる人）の暮らしが成り立つほどの経済規模にはならない。

徳島に来て、地方の目線から上記のような都会の研究者の価値観に触れたとき、「これは私が地方に来てみて分かったことを、地方から全国発信するしかないな」と感じた。

先の問いに答えるならば、私が研究活動を通じて目指している社会は、東京一極集中の世の中を是正すること、都会にも地方にもそれぞれの暮らし方や良さがあることを、多くの人が人生の早い段階で理解し、住む場所を選択するような社会である。

そのために私は、地方に住む研究者の責務として、地方にいるからこそ気づけたことを全国的に共有できるようにするべく、学会等で積極的に発信していこうと考えている。



図2 散歩道としても楽しめる生活道

1. 今年度の検討委員会における発言の背景

「生きる」という次元では、水・エネルギー・食料が必須要因である。しかし、「住む」という次元では、ただ単にこれら3つの要因が満たされるだけでは不十分である。このことが、「四国・住みたいまちに生きる」というテーマのもとに検討がなされてきた所以であろう。私は、授業その他の大学での業務のために第2回検討委員会にしか出席できなかった。今あらためて私の発言内容を見直してみると、その中で発言は、十年以上前から関わってきた途上国に対する教育支援での経験を踏まえたものとして集約できる。

2. 先進国 - 途上国、都市 - 地方及び中心部 - 周辺部：格差

教育支援での経験を通して私が得た気づきは「先進国と発展途上国、中央政府と地方自治体、地方自治体における県と市町村、市町村における中心部と周辺部などの関係に類似したものとして捉えることができるのではないか」というものであった。なぜなら、これらの関係の類似性は、質の良い教育や医療、あるいは収入のよい仕事へのアクセス、社会的インフラの整備などの点で「住む」ことの質において両者の間に大きな格差があること、さらには、この格差の量的・質的格差の大きさが、国際協力のみならず中央政府からの地方自治体への補助金など、支援の内容を決定する大きな要因に他ならないからである。

ただ、このとき考慮すべきは、この格差を規定している基準である。第2回検討委員会の議論において、私は「意識レベルのモデル化」への疑問や「スタンダード（尺度）」の必要性を述べた。すべての人々が、その居住する地域の自然・社会・文化などに関わらず同じ基準を求めているという前提は、必ずしも自明ではないのである。

3. 来年度における検討への提案

3-1 エリアモデルづくりの原理抽出

第2回検討委員会では、検討委員会の企画

者側から、「方法」はともかくとしてまず「あるべき姿（エリアモデル）」を考えていきたい、ということであった。教育支援においても同様に「あるべき教育の姿」を枠組みと詳細な実施計画が策定される。しかし、実際に関わったものも含めて、支援する側が、ほぼ一方的に策定したモデルや計画は、ほとんどの場合、実践に移された段階で多くの課題に直面することが多いというのが実情であった。

同様に外部において作られた「四国の住みたいまち」のモデルには、実効性を期待できない。第3回の検討委員会では、イタリアのラブロという集落の事例が紹介されている。来年度には、国内外の「住みたいまちづくり」に関わる事例を集め、「パートナーシップとオーナーシップ」をキーワードとして整理し、「あるべき姿」づくりの原理を帰納的に検討・抽出することを提案したい。

3-2 原理抽出の事例

東北大震災以後の再生可能エネルギーへの関心が高まり固定価格買い取り制度が実施に移された。その中で、吹き抜けていく風も、降り注ぐ太陽の光も地域の資産と捉えられるようになってきた。このような基準の変更を踏まえて、地域資産である光や風を使って発電し、その収益を地域づくりに生かそうとする動きが徳島県の中心部ではなく、周辺部で出始めている。

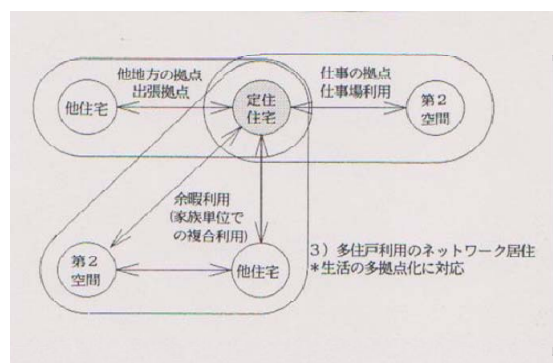
このような動きの特徴は、エネルギーや環境問題の解決を一義的なねらいとしているのではなく、これらの問題を「地域づくり・町づくり」という枠組みの中で実施しようとしていることである。この枠組みの変更により、地域の人々のオーナーシップが高まり、課題意識を高め、地域内外におけるコミュニケーションを円滑なものとし、実効的なパートナーシップが育まれることが期待される。これは原理抽出に関する一例であるが、こういった検討が来年度行われることを期待したい。

これまでに第1回、第2回の「四国・住みたいまちに生きる」WG検討会に参加し、その趣旨の理解とともに、様々な議論を通じたイメージの具体化に努めてきた。第1回目は各委員から出されたポジションペーパーを基に四国の住みたい環境のイメージについて意見を交わした。ただポジションペーパーにおける想定地域（都市的地域・中山間地域・海岸地域・郊外地域等）とキーワード（景観・仕事・住居・エネルギー・食糧・交通・生活・教育・医療・余暇・情報通信技術等）が多岐に渡っており、様々な意見が出し尽くされたが、共通のゴールを見出せないまま終了した。その中で、「不便さを前向きに捉える」ことを議論の出発点とすることに共通理解が示された。ただここで取り上げた「不便さ」の捉え方、つまり「〇〇を不便とみるかどうか」は外からの論理で、マイナス面とプラス面という価値判断の基準をどう捉えるか、課題もみえてきた。第2回目は、3つのグループに分かれて議論を進め、最後に各グループ別報告内容をもとに意見交換が行われた。四国の最大の強さは中規模の都市と農山漁村が一定の距離内に程よく配置されている点であろう。各地域のアイデンティティ（地域性）を担保しながらそれぞれが自立・共生するには、地域間の連携がどうしても必要となる。つまり「異なるエリアの連合」により、各地域がもつ利点・価値を分け合い、共有する「地域循環」の発想である（合併とは異なる）。そこで大事なことは議論の中で出たキーワード、「滞在」と「流動性」ではないかと考える。第3回のWG検討会でも同じ脈絡での議論がされている（第3回WG報告内容参照）。

さて、地域循環を「滞在」と「流動性」のキーワードで考える際に、生活の拠点となる「住まい・住む空間」が問題となる。これまでの住宅計画・政策は「1世帯（家族）1住戸」を目標に展開され、供給してきた。しか

し家族の小規模化・個人化が進み、家族は個別住居と地域の枠を超え（ボーダーレス化）、複数の世帯に分散し、複数の住居をダイナミックに利用しながら生活要求を全体として満たす、居住のネットワーク実態が明らかにされている（ネットワーク居住の成立*）。ネットワーク上の各拠点（住宅）は「狭域」「中間域」「広域」といった分散距離と状況に応じて交流・援助・空間利用等、様々な関係を構築し、居住関係を再編成している。そこには家族だけではなく、友人や隣人等非血縁とのネットワーク居住の事例も多く見られた。

家族の十全な住要求の充足が、ネットワークによる複数住宅間の役割再配分によるものであれば、「完結した1住戸」が示唆する地域定住構造は変化せざるを得ない。なお「地域間ネットワーク居住」を機能させるためには「(特化された空間機能をもつ) 軽い住居」と「中間拠点（第3の拠点：各種施設・生活支援サービス等のサポートシステム）」の充実化が求められる。そのために地域における住宅ストックをフルに活用・管理し、居住の流動性や滞住にも備えることが必要とされる。



「多住戸利用のネットワーク居住」

* 金貞均 (2003) 高齢者の継続居住を支えるネットワーク居住と集落環境のあり方、都市住宅学第43号、pp. 60~65

普段は保健・医療・福祉の視点から四国の高齢社会について考えていますが、今回のWGでは様々な視点からの議論がなされ、大変有意義であったと思います。ただもう少し時間が欲しかったことと、議論の視点が四国外部からの視点にやや偏っていたような印象を受けます。外部者の視点は大変重要なものですが、内部者の視点との融合も今後必要と思います。

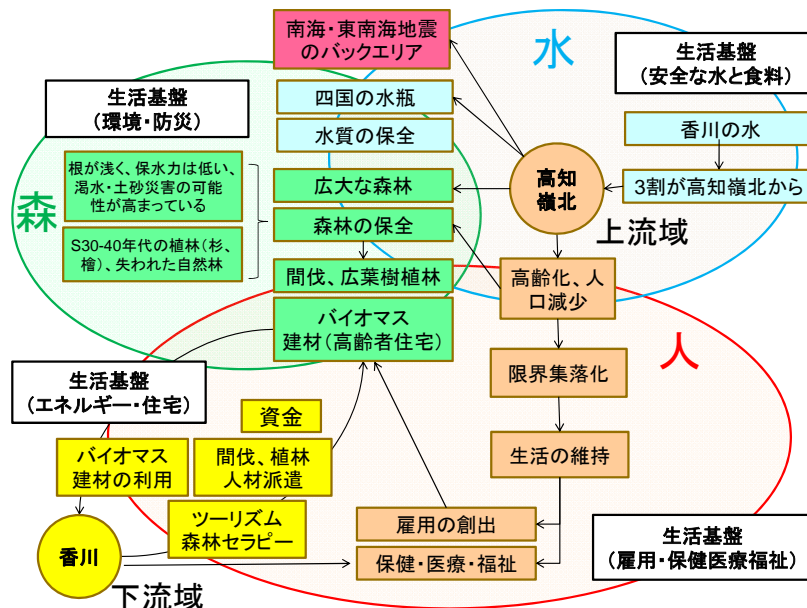
四国をひとつとして考えることは大変意義深く、必要なことであると思います。しかし、四国は地勢や気候などから、それぞれのエリアが半ば独立して歩んできた歴史があり、それが四つの国、現在の県として存在しています。そのため、なかなか四国という枠組みでの歩みが遅い印象を受けますが、まずは四県共通の問題を取り上げ、具体的な議論を行い、そしてそのなかで次第に行政界を取り扱った議論に進んで行くのが良いと思います。例えば南海地震への対応、気候変動の問題、原子力を含めたエネルギーの問題、水源地の保全と集落維持の問題などが挙げられるのではないのでしょうか。

私どもは平成23年度より、香川と高知嶺北地域を例として、水源と森と生活の保全を目指す「早明浦プロジェクト」を行っています

が、最後にその問題意識をご紹介します。

“水は生活を営む上で欠かせないもので、多すぎても少なすぎても私たちの暮らしに大きな影響を及ぼします。長年に渡って水不足に見舞われてきた香川は、古くからこの問題に直面してきました。そのようななか、昭和50年の早明浦ダム、香川用水の完成は香川に大きな恩恵をもたらし、この時より、吉野川上流域と香川は、新たな水系を通じた「上流域と下流域の関係」になりました。水源は豊かな森林からなっており、水系全体の環境や私たちの生活の基盤となっています。

それから40年近くが経過し、上流域、下流域とも多くの社会的問題を抱えています。特に上流域では、高齢化と人口減少が進み、森林の保全が十分にできない状態になっています。これが長く続くと、将来的には水系全体の生活圏に大きな影響を及ぼしかねません。上流域と下流域は一蓮托生であり、県境を越えた四国サイズの問題として捉える必要があります。これまで上流域と下流域の関係は行政主体で築かれてきました。その基本は今後も変わらないのかもしれませんが、しかしこれらの問題を理解し解決に至るためには、民官学、市民レベルにおける、さらなる人と知の集結が必要と考えています。”



香川大学 紀伊雅敦 委員

本WGでは、産総研および四国の国立大学の様々なバックグラウンドの研究者が参加し、各研究者が個人として住みたいと思う社会をテーマに、興味深い議論が行われた。そのなかで印象に残ったいくつかのトピックについて、振り返ってみたい。

まず、第1回目のWGでは、研究者という特異な人を集めて自分たちの住みたいまちの形を議論することの正当性について疑問が呈された。私自身も、同じ疑問を持っている。研究者の個人的価値観は、人によっては（少なくとも私は）一般的な価値観とは相当ずれており、そうした価値観に基づき社会の将来像を描きどのようにアウトプットするのか、よく理解できないまま議論に参加していた。私自身は関心のある研究ができる環境を求めて移住を繰り返しているが、これまで個人として地域コミュニティにコミットしてこなかったし、恐らく今後も必要に迫られない限りコミットすることはないと思う。個人のリソースの大半を研究につき込んでいるので（費用対効果は低い）、居住する上で交通と居住においてできるだけ煩わしさの少ない社会が望ましい地域社会であると今は考えている。所属意識の高いコミュニティは学会や、仕事を通じて関心を同じくする人々、おもに研究者のコミュニティである。研究を進めるうえでの知的刺激は、日本中、世界中に存在し、必ずしも地域に閉じていない。四国に居住する場合であっても、それらへのアクセスもそれほど不利ではないため、私自身は、現在の居住地に満足しているが、より良い研究環境があれば、地域を問わずまた移住するかもしれない。

参加された先生方は研究分野も様々だが、年代・経歴も様々であり、長く四国に住んでいる方もいれば、あちこち移動し、今たまたま四国にいる方もいる。それゆえ、望ましいと考える社会のありようについても、様々な意見が出されていた。

四国の中には多様な自然・社会条件の地域があるため、ライフステージや個人の価値観によって移住が容易な社会が望ましいとの意見も出された。一方、コミュニティの帰属意識が生じるまでは定住すべきであり、定住と移住のバランスが必要との考え方も出された。子育てや、地域の助け合いを必要とする人々にとっては、こうしたコミュニティへの帰属は重要であり、多くの人に当てはまるのかもしれない。一方で、こうしたコミュニティは、四国の中では入りづらく出ていきにくい点が指摘され、今後は、所属意識ができるくらいにつながっているが、着脱可能な形のコミュニティが望ましいのではとの意見も出された。コミュニティは一つの社会であり、構成員と非構成員を区別する。しかし、個人が複数の社会に所属することは可能であり、理論的にはこうしたコミュニティもありうるだろう。想定するコミュニティの定義についてWGでは明確化されなかったが、互助的な組織を想定していたように思う。その場合、コミュニティが着脱可能とするならば、その参加者には互助ルールの順守徹底が求められるであろう。そうでなければ、フリーライダーが現れ、互助コミュニティは崩壊する。コミュニティへの帰属意識とは、負担があるからと言って、容易に抜け出せない意識である。一方、居住地の選択自由度の増加は、コミュニティルの合理化、効率化を促す可能性もある。

本WGの議論の進め方として、そもそも方向や年次を定めずに、研究者がそれぞれの成果を適用する場としての社会をどのように想定するのか、また個人として望ましい社会のありようはどのようなものかを、自由に討議することが事務局からの提案であった。望ましい社会は個人により様々であり、活発な議論がされたことは私にとっては大いに刺激となった。私自身はあまり議論に貢献できなかったが、この成果が四国研究プラットフォームの今後の活動に寄与することを期待する。

WGにおける議論の詳細は、中間報告本編にまとめられていることから、ここでは、WGに参加しての雑感を述べることにします。

「四国・住みたいまちに生きる」WGへの参加の話が来たときには、若干の戸惑いと期待を感じました。まず、戸惑いを感じた理由は、私自身の専門が情報工学や通信工学といった領域であり、景観や空間といった観点での「街」との接点が、これまで無かったことです。もちろん、そこに住む市民として、日々の安らぎや寛ぎを求めるといった意味での景観や環境に対して無関心であったわけではありません。しかし、景観や空間の専門家として、「街」を議論することができるかという、否であるということです。

一方で、以前から情報・通信分野における地域の活性化に大いに関心があり、自分自身、地元大学の教員として、その貢献が役割の一つであると日頃から考えていました。それだけに、WG参加の話は、私にとって、大いに関心と期待をもたらすものでした。情報・通信技術は、交通、エネルギー、水道、医療、商業、金融、教育など、様々なインフラを支えており、「インフラのインフラ」となっています。人々が住みたいと思う街を持続させるためには、情報・通信技術は不可欠なものになっています。「住みたい」を実現する為に、情報・通信技術が今後どのような方向に進まないといけないのか、また、どのように貢献できるのかを、他分野の人たちの話を伺う中で見だしたいとの思いがあります。さらに、大学は人材を社会に送り出す役割をしています。「住みたいまち」の実現に貢献する情報・通信技術者を地域に送り出すという役割において、どのような人材を送り出す必要があるのかを考える参考を得たいという思いです。

さて、このような戸惑いと期待を持ってのWGへの参加でしたが、予想通り興味深い話題に触れる機会となりました。

四国における様々な地域における人々の生活の様子、地域の人たちが主体となり、魅力ある街作りとする取り組み、また、海外の魅力あるまちの情報を知ることができました。

これらの議論や話題は、単一の価値観に縛られるものではなく、多様性を持った議論であったと感じています。

一言で四国と行っても、地勢上の多様性や歴史的な背景の違いなど、決して均一なものではありません。またそこに住む人々の価値観も単一ではありません。四国内の様々な地域が、それぞれに、それぞれが持つものを活かし、独自の魅力を高めることが、結果として「住みたいまち」を創造することに繋がることでしょう。

様々な分野の研究者を集めたWGは、様々な視点から、様々な意見を交換して来ました。WGの今後の取り組みにおいて生み出される提言や報告も、様々な多様性を踏まえたものになるのではないかと考えています。そして、様々な価値観の全てに対して一つの方向性で対応するのではなく、いくつかの方向性を示すことになるのではないかと感じています。

そして、WGへの参加を通して得た知見は、自らの専門である情報・通信分野の技術の活用への手がかりとなり、「住みたいまち」の実現に貢献できる人材育成の参考となることでしょう。

愛媛大学 吉井稔雄 委員

18世紀、国富論の中で「科学は熱狂と狂言に対する優れた解毒剤である」とアダムスミスが唱えています。一方の現代、我が国は、人口減少化社会、低成長社会に突入しており、国民が継続的に豊かな生活を送るための科学的な処方箋（解毒剤）を作成することが我々技術者の務めではないでしょうか。

豊かな生活を送るためには、将来に対する不安を払拭し、生産の喜びを得ることで人間性を回復することが重要であると思います。幸いにも四国においては、適度な人口密度が保持されていることから、都市部へのアクセスに関するモビリティを確保することで、近代都市における高い文化に触れながら、しかも農山漁村において生産の喜びを味わうことのできる理想的な生活を実現する可能性があります。今後の人口減少化社会においては、大都市からの移住者を受け入れ、適切な人口を維持することで、このような理想的生活を行う基盤となるまちづくり（村づくり）を進めていきたいものです。

このようなまちづくりを行うに際しては、現代文明に不可欠となるエネルギー確保の問題を解決することが必要となります。平成23年に発生した東日本大震災により、持続可能なエネルギー政策のあり方が議論されるようになりましたが、省エネ社会を創造するとともに持続可能なエネルギー源を確保することが、我々世代に課された最重要課題の一つであると考えます。

省エネ社会の実現に向けては、19世紀末にEbenezer Howardが提唱したGarden Cityを参考に、職住接近型の都市を構築し、移動にかかるエネルギーを抑制するとともに、地産地消を推進することによって物流によるエネルギー消費を抑えることが有効な方策であると考えられます。たとえば、コンパクトシティを構築することで自動車の移動量を抑えることができますし、ストラスブルグ（図1）

などの都市に見られるように、魅力的な公共交通を整備することで都心部の魅力も高まり、賑わいを創出することができます。また、都市周辺で収穫された農産物をフリーマーケット（図2）など産地で販売することにより、物流によるエネルギー消費を抑えることができます。

このように、省エネルギーを実現し、かつ中心市街地の賑わいを創出するようなまちづくりを行っていくことが我々技術者の使命であると思います。



図1 ストラスブルグ中心市街地



図2 パリのフリーマーケット

今回、「四国・住みたいまちに生きる」をテーマにして議論させて頂きましたことは、私にとって非常に有意義でした。このような会にお呼び頂いたことに、まず、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

それでは、何が有意義であったかと申しますと、終始「自由度の高い議論」になっていたということが最初に挙げられます。

日頃行われるだいたいの議論というものは、目的が狭く限定され最初から着地点がある程度予測できるようなものですが、今回はそれがほとんどなかったように思います。その点本当に良かったと思います。

目的が明確化された議論に慣れている私を含めた多くの委員の方々には、なんとなく違和感が最後まで付きまっていたのではないかと予測していますが、そう感じていたのは私だけかもしれません。

しかし、いずれに致しましても議論の目的を明確にすることは多くの場合、部分の議論に陥ってしまいがちになり、全体が見えていないといえますか、全体を見ていない場合が多いように思います。

全体を見る視点が多くの議論で欠けていることを常日頃から強く感じていた私にとっては、今回の議論はとても新鮮で有意義でした。今後も、全体の最適を考える視点を持ちながらこのような議論が熱く何度も繰り返されることを、切望しております。

さて、今回の“議論の仕方”に関します感想はこれぐらいに致しまして、四国を如何に住みたいまちにしていくかと考えた時に私が最も大切だと思うことは、「子供を安心して産み育てることができること」ではないかと思えます。その次に大切だと思うことは、その子供たちが自然と深く触れ合いながらこれから長い人生を歩んでいく上でとても重要になってくると思われる感性を磨けるようなまちづくりが、とても重要ではないかと思えます。

子供は我々の未来であり、大切な存在であることは言うまでもありません。子供を安心して産み育てる部分は、社会構造の問題が根底にあり、構造転換をしないとどうにも解決できそうな問題ではなさそうですので、今回あえて触れません。

もう一つの子供たちに自然と深く触れさせて豊かな感性を小さい時から身に着けさせることは、本当に重要だと思います。ひらたく言えば、美しいものを美しいと感じる、また、汚いものを汚いと感じる感性を育むということです。このことは、将来の子供の基本行動を決定してしまうのではないかと思うぐらい重要なことだと私は感じています。

子供の頃にこの感性が育まれていないと、極端な言い方をしますと自ら何もできなくなってしまう。それは、あらゆることに問題意識を持つことができなくなり、言葉は悪いですが無気力なヒトをつくることにつながるのではないかとさえ感じています。

山や川や海に行って、自然の美しさ、恐さに触れ、その経験から自分も自然の一部であり、あらゆるものはつながっているということを実感することが、感性を磨いていく上で必須だと思います。これを実現する環境が四国には最初からかなり備わっている訳ですから、この価値をしっかりと再認識して豊かな生活とは何なのかをもう一度考え直してみてもよいのではないかと思います。

そこに住む一人一人が豊かな感性をもち、そしてつながり、それぞれが多様な役割を果たしていることを実感し合える“まち”はヒトを大切にする“まち”であり、このような“まち”こそが皆が住みたいと思うまちではないかと思えます。

この度は、このようなことを考える機会を与えて頂きましたことに心から感謝して、稿を閉じたいと思います。ありがとうございました。

人口減少社会という、過疎地、限界集落化（イナカ）、中心市街地の衰退・無縁社会（トカイ）など、マイナスイメージが強いが、人口が減る＝国民一人当たりの土地・家屋の「わけまえ」が増えると考えれば、悪いことではない。政策的に居住の流動性を高めることで、バカンスがある欧州諸国のように、既存ストック（土地・建物）を活用した旅行と移住の間である新しい住まい方「滞住¹」を実現するチャンスにもなり得るのではないかと考えている。

中小都市と農村部・漁村部がコンパクトにまとまっている四国は、全国に先駆けて「滞住」モデルを導入しやすい地域だと考えている。「滞住」を通じて「イナカ」「トカイ」の双方にとって持続的かつQOLの高い住まい方を提供することで、「住みたい街 四国」を実現できればと考えている。

そのためには、大きく次の3点が必要であると考えられる。

一つ目は、都市住民の呼び込み戦略の見直しである。過疎地域における都市住民との呼び込み政策は、ごく短期間の「交流」もしくは、半永久的な「定住」のどちらかに偏重しがちである。「交流」にきた都市住民を「滞住」者として戦略的に囲い込む仕組み、その上で、「滞住」者を地域経営の担い手として活用する仕組みが必要である。

二つ目は、土地・家屋の所有と使用の分離である。

農村部・漁村部において、空き家・空き農地の活用が進まない理由として、（都市にいる）所有者が、「いったん他人に貸し出すと手元に戻ってこないのではないかと不安が強く、また親戚等に気兼ねして、転売や賃借ができない点が挙げられる。例えば、京都市や金沢市など、都市部の空き家ストックの活

用事例で用いられている、定期（建物）賃借制度²を四国全体として戦略的に推進することで、空き家・空き農地の所有と使用を明確に分離し、「トカイ」の住民が「イナカ」に滞在しやすい環境を作ることが必要である。

三つ目は、滞住期間に応じた税収の振り分けの仕組みづくりである。

具体的には、住民票の有無にかかわらず、年間における一定の滞住期間を満たす地域に対して、滞住者が住民税相当分の一部を振り分ける仕組みが必要となろう。現状では、「ふるさと納税」による寄付制度の活用により、一定、同様の仕組みが可能である。都市部の地方自治体からの大きな反発が想定されるものの、過疎地域を持続的とするための方策として、寄付控除額の上限の緩和などの国民的な議論が必要であると考えられる。

なお、このような「滞住」モデルの実践例として、筆者は高知県内をフィールドとして、災害時に備えた、日常時からの都市と農村の連携に取り組んでいる。

具体的には、防災キャンプや備蓄食料づくりのための耕作放棄地での協働農業を通じて、都市住民の農村部への「滞住」を促進し、農村部の活性化を図りながら、被災時に都市住民が疎開しやすい環境をつくる取り組みである。

関心のある方はぜひお問い合わせください。

¹ 「ヨーロッパのバカンス・避暑、日本の湯治など、数日から数ヶ月単位の渡って、居住地以外に（反復的に）滞在する生活様式」

² 契約で定めた期間が満了することにより、更新されることなく、確定的に賃貸借が終了する建物賃貸借のこと（国土交通省 HP より）
<http://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/torikumi/teishaku/tei01.htm>

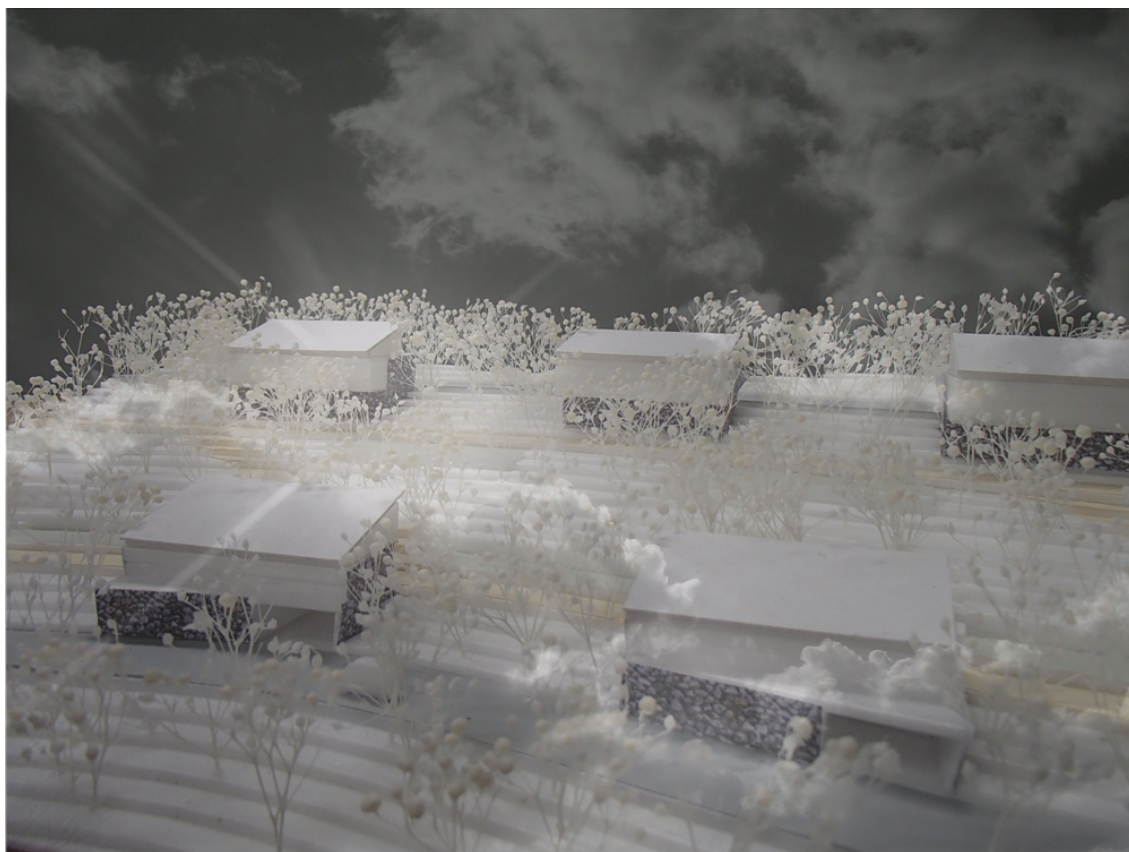
賃借契約期間：1日～数年。契約期間終了後は、契約が確定的に終了

前半 2 回の議論に参加した。「個人として、そもそもどんな社会や未来に生きることをのぞむのか」という「そもそも」の始点であった。このことがよくありがちな展開を防ぐ抑止力になったと思う。「ありがち」とは「自由闊達な議論」という建前だけがあって、その実、予定調和のお話にすぐさま落ち着くというヤツである。その意味では、今回の設定は意義深かった。さらに第 3 者の「誰か」という想定でなく「自分自身」の意識が問われたことは極めて重要だったように思う。

初回の議論で、四国に見られるある種の「不便さ」が四国独自の魅力の鍵になるという展開に導かれ、その後は中山間地区を対象とした議論に比重がうつった。そこで住まうことの魅力と、教育環境の不備などの問題点をいかに解消するかなどが議論された。その話は興味深いものではあったが、中山間地区の魅力を向上させるにはそのエリアだけを対象に

しても無理ではないか。最初に設定した「郊外」や「都市」などの他エリアとのネットワーク形成こそが各領域の魅力を引き上げる肝になるはずである。その相補性こそ、徒に「昔回帰」に堕さない、現代性を有する構想のキーになるように思われた。

その後、高知に近い将来襲来する南海大地震に備えて高台に移転する、その暮らしの風景をラフに描く機会を得た。想定敷地は高知市内の北側斜面。未開発領域だが、その造成を最小限にいとめる、斜面ならではの魅力ある住風景を描いてみた。結果、郊外よりも都市に近く、風景としては中山間地区集落のようなものが浮上してきた。中山間地区での住まいは現在の空家などを活用すればよく、それは必須だ。ただ、今回、高台住居を描くことで、四国にまだある新しい「エリア」の存在を期せずして感じるようになった。



「四国・住みたいまちに生きる」WG検討会に参加して、最初に驚いたのは、どのような社会・未来に生きたいのかに関するゴールについて議論するという、検討会の切り口の設定の仕方に対してであった。

四国には、非都市部特有の問題を抱えた地域が多く存在している。ほんの一例を挙げるとすれば、数十年後には集落の維持が困難になることがかなりの精度で予測される地区が増えている問題、猪や鹿に農地を荒らされる事象が多発している問題、都市部から農村へ移住する若者の定着の難しさに関する問題、農業従事者の高齢化の問題、南海地震が想定されるにも関わらず、既存不適格の木造家屋の耐震化が進んでいない問題、また沿岸部において津波被害が想定される問題などを挙げることができる。

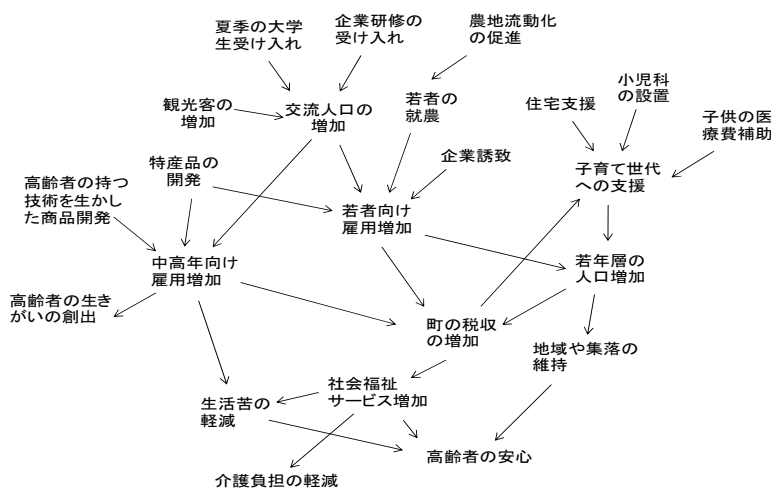
こうした問題が山積している中で、私自身は、手のつけられそうな問題から研究を行い、問題分析や解決策の検討を行ってきた。下に示した因果関係図は、高知県内のある町の調査に基づき、こうした分析を行った例である。

このような私にとっては、課題解決のための議論とは一旦切り離れた、地域としての理想の設定のための議論というのは、あまりやったことのないことだったのである。

今、議論を振り返ってみて、この検討会が当初期待していたような議論が出来たとは必ずしも言えないかもしれない。どんな社会でどんな人生を送りたいかという問題を、社会全体の問題として議論するという事は、なかなか取り組みにくい課題であり、ともすると井戸端会議的な議論になってしまったこともあったように思う。しかし、そのような議論の中でも、私自身が改めて気づかされたことの一つは、地域問題を解決する際に、単に望ましくない状況を解消するだけでなく、それをきっかけとして新しい理想を設定することの重要性・有効性である。マイナスの状況をゼロに持っていくことを目指しても、高々マイナスの度合いが緩和されるに過ぎない。新たな理想を設定し、それを実現しようとする中で、同時にマイナスの状況を解消してゆくということが、地域問題に取り組む姿勢として重要ではないかということである。

このことと多少関連するが、私は高知県内において、既存不適格の木造家屋の耐震化を成し遂げた家主の人たちに、その経緯や揺れ動いた心情の変化等を聞き取り調査し、耐震化普及のための制度設計のヒントを見出そうとしている。発見した事の一つは、耐震化にたどり着けた人たちの一部は、そこに至るま

問題分析や解決策考案のための因果関係図(例)



での過程を、一種の自己実現過程と認識していたということである。彼らは単に「脆弱な住宅に住む危険さ」というマイナスの状態を解消しただけでなく、安心・安全とは全く別の価値を見出しており、これが耐震化に踏み切れた要因の一つになっていたのである。このような視点で地域問題に取り組んでゆくことが、我々には求められているのだらうと考えている

“住みたいまち”を描くために、まず四国の現状を、地形、高齢化、人口減少、産業などの統計により可視化した。四国中央部の中山間地、山間地の荒廃は、早明浦ダムに代表されるような四国の水源の危機であり、さらに河川や海の砂漠化にも繋がる。四国の“かなめ”に人が住める“まち”をつくるのが課題である。

ひとつのヒントは、四国で最も医療費（医療費地域差指数）が低い上勝町である。“いろいろ”の取り組みを経て、生き甲斐もお金も得た高齢者の元気が四国で一番をもたらした。

高齢者が健康になると同時に、活気のある“まち”には子供が居て欲しい。県都周辺や産業集積地で年少者（15歳未満人口）比率が高いのは当然として、山間部にも特長ある地域が点在する。以下がそれら“まち”と雇用（産業従事者比率）状況である。

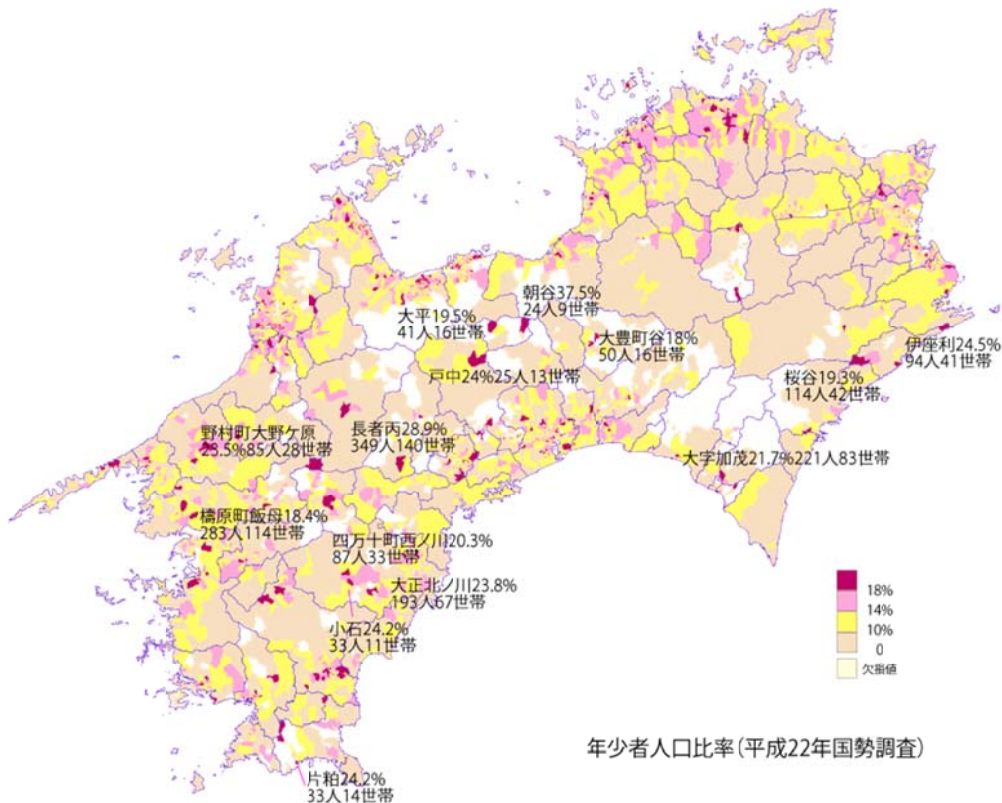
高知のマチュピチュと言われる長者は鉱業（石灰岩）従事者がその地域の47%、橋原町飯母は地元ミロク工場があり製造業16%、

建設業19%。四万十町西ノ川は建設業35%、四万十町小石は建設業と製造業が24%である。農林業従事者が多いのは野村町大野ヶ原75%、大豊町谷74%であり、四国カルスト近隣の畜産、大豊インター近くの製材業が推定される。また、この2つの地域は自営業主と家族従事者を合わせた比率が6割以上で、雇用者が大部分の他地域と対照的である。

美波町伊座利は漁業24%で、小売りと宿泊飲食業が11%ずつ。地域ぐるみで人を増やし滞在を促して、経済的な自立に取り組んだ住民の努力の賜であり、今後の新しい“まち”づくりに希望を与える。

“住みたいまち”には“生きるための糧”や元気な子供、人の出入りや交流が不可欠である。高齢者も生き甲斐がなければ死ねない。上述した“まち”が築かれてきた歴史、人々の工夫を知ることが手掛かりになると考える。

※四国は東南海地震の懸念もある。“まち”づくりには思い切った発想も必要である。



年少者人口比率(平成22年国勢調査)

産業技術総合研究所 安藤 淳 委員

唯一、「四国外」のメンバーとして、ワーキンググループに参加させていただきました。

ワーキンググループでは、具体的な地（域）名も挙げられて意見交換がなされたため、イメージが掴みにくいところもありましたが、四国内各地の持つ地域資源・課題・様々な取り組みなどの一端を理解しつつあると感じています。

このワーキングで取り上げられている、「住みたいまち」に生きていくために、取り組んでいくべき課題は、敢えて単純化してしまえば、我が国内で広く議論されている、「日本、特に地域における将来的なあり方」と同様なものと極論することも可能ではありますが、単純な「コスト論」等では導き出すことのできない「住みたいまちの実現・維持」に向けてのツールとして、支援ツールとしてのテクノロジー以上にそれぞれの地域が有する自然や文化をうまく活用していくことは重要であると思われれます。豊かな自然や文化を有してきている「四国」は、他の地域と比べても有利な位置に立っているのかもしれませんが。

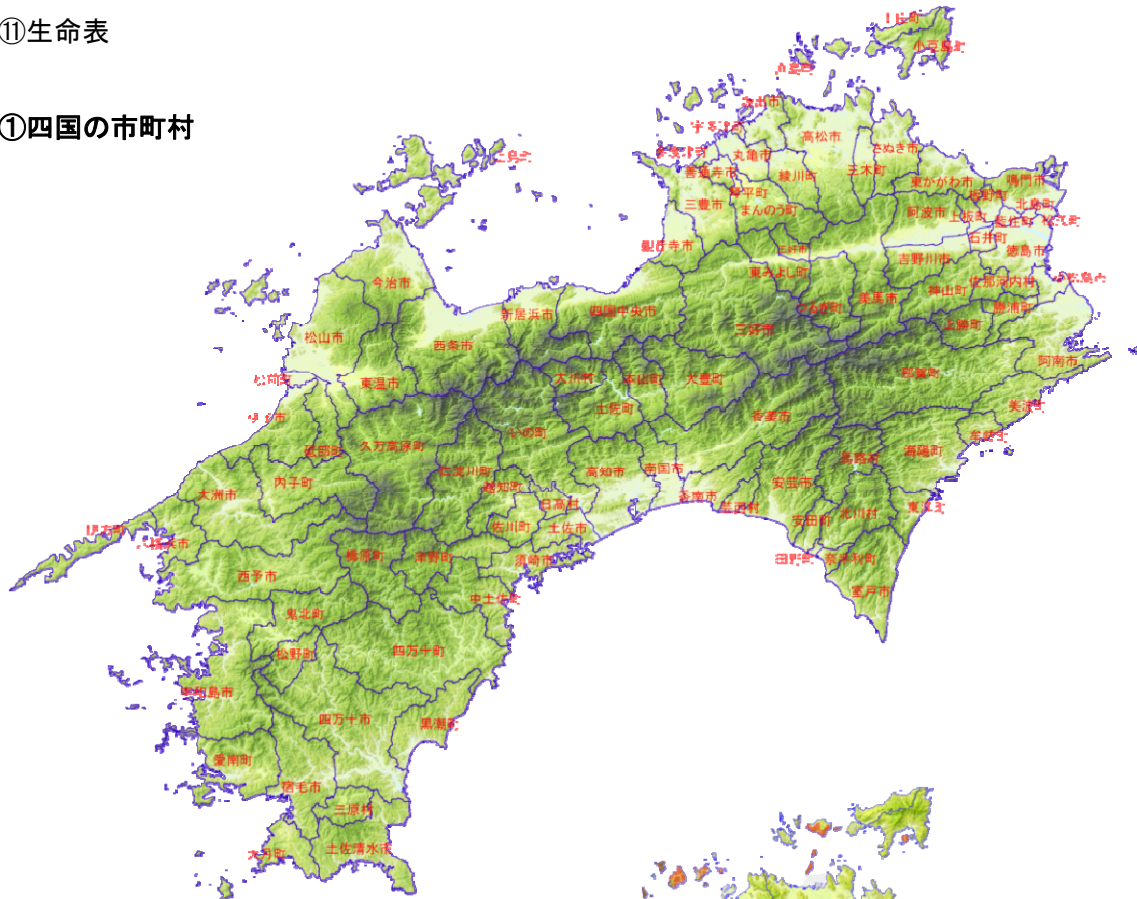
課題はある程度整理づけられても、活用ツールが各地で多様に異なることや、そもそも「住みたい」という個人的価値観に左右されるテーマですので、ある程度の共通点は見出されても、必ずしも一つ（もしくは少数）の結論が結果として導かれるということに、このワーキングとしてはならないであろうと感じられます。そうだとしますと、私の専門領域である半導体デバイス分野における「国際技術ロードマップ」のように、「議論をすること」ということ自体が最も価値のあることなのかもしれません。そういった機会を与えてくださいました皆様に感謝するとともに、今後とも議論を深めていければと思います。

(参考1) 四国の市町村別情報 (地図)

資料：産総研 三木委員提供

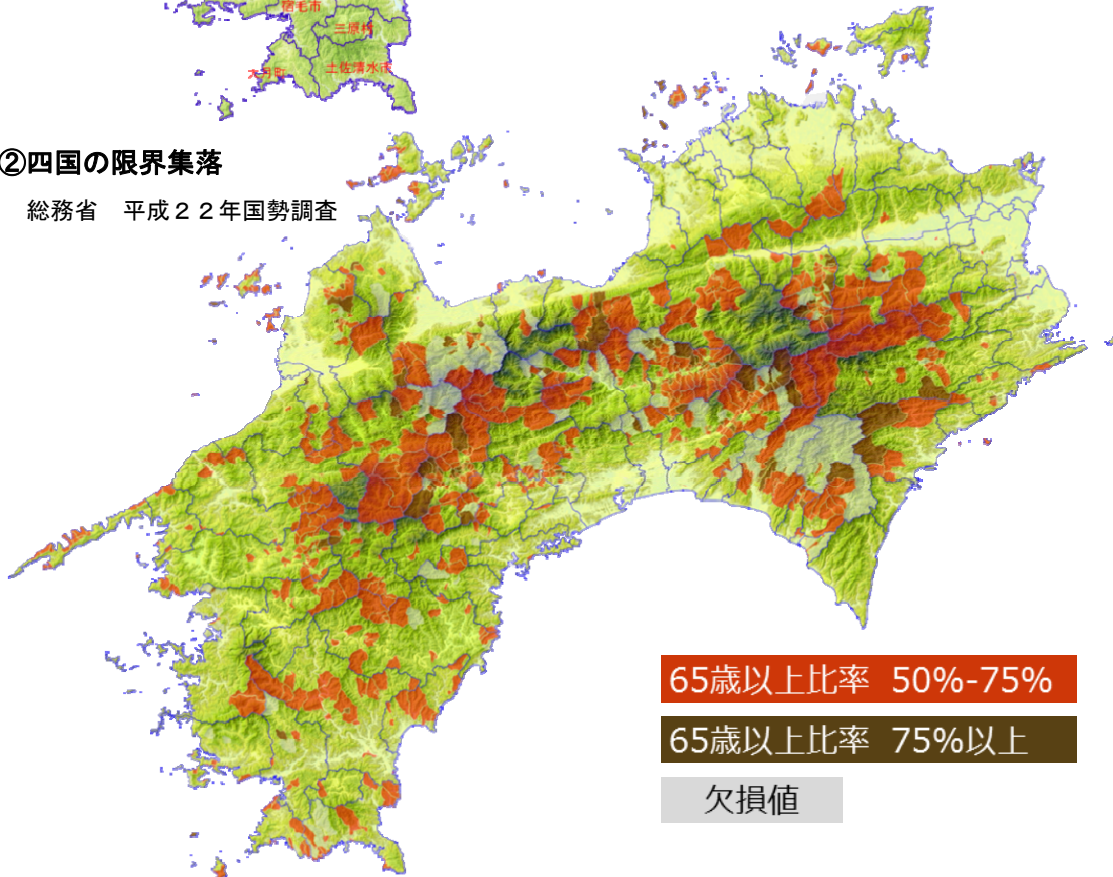
- ①四国の市町村 ②四国の限界集落 ③四国の将来推計人口 ④将来の老齢人口割合
- ⑤高齢者の世帯構成 ⑥製造業事業所数 ⑦製造業従業者数 ⑧製造品出荷額
- ⑨医療費地域差指数 (入院、入院外、歯科の合計) ⑩医療費地域差指数 (入院、入院外)
- ⑪生命表

①四国の市町村

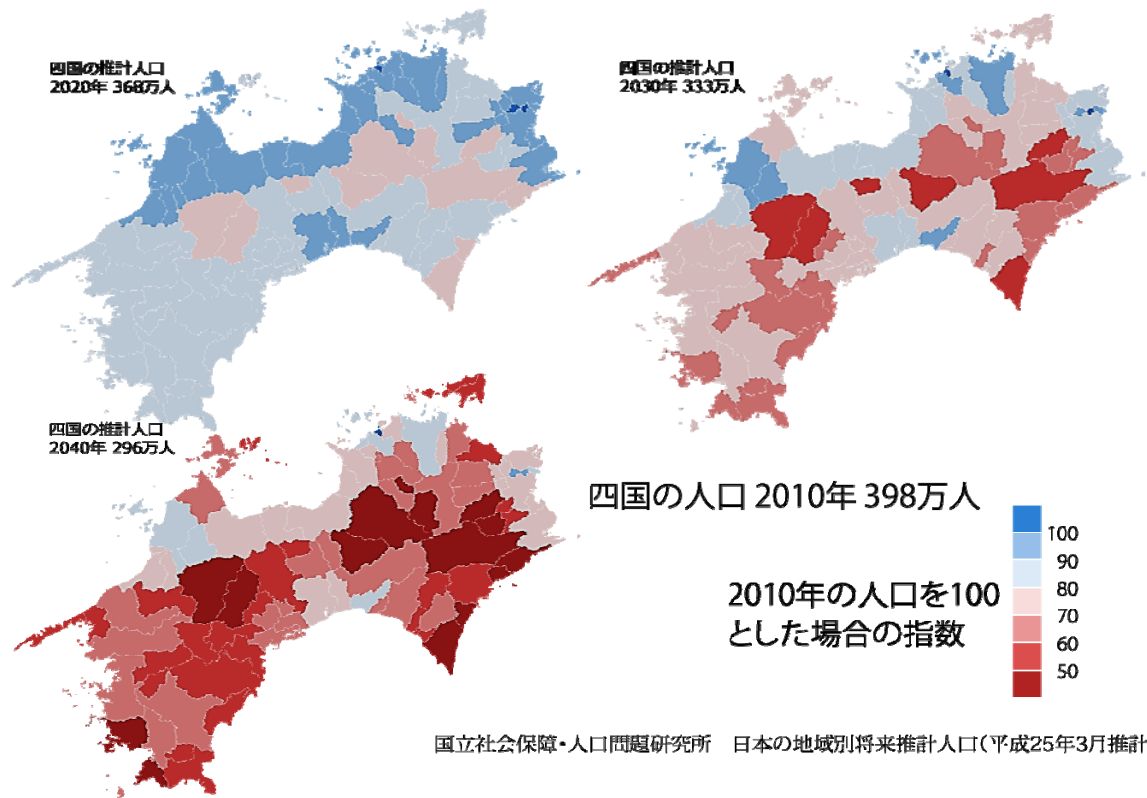


②四国の限界集落

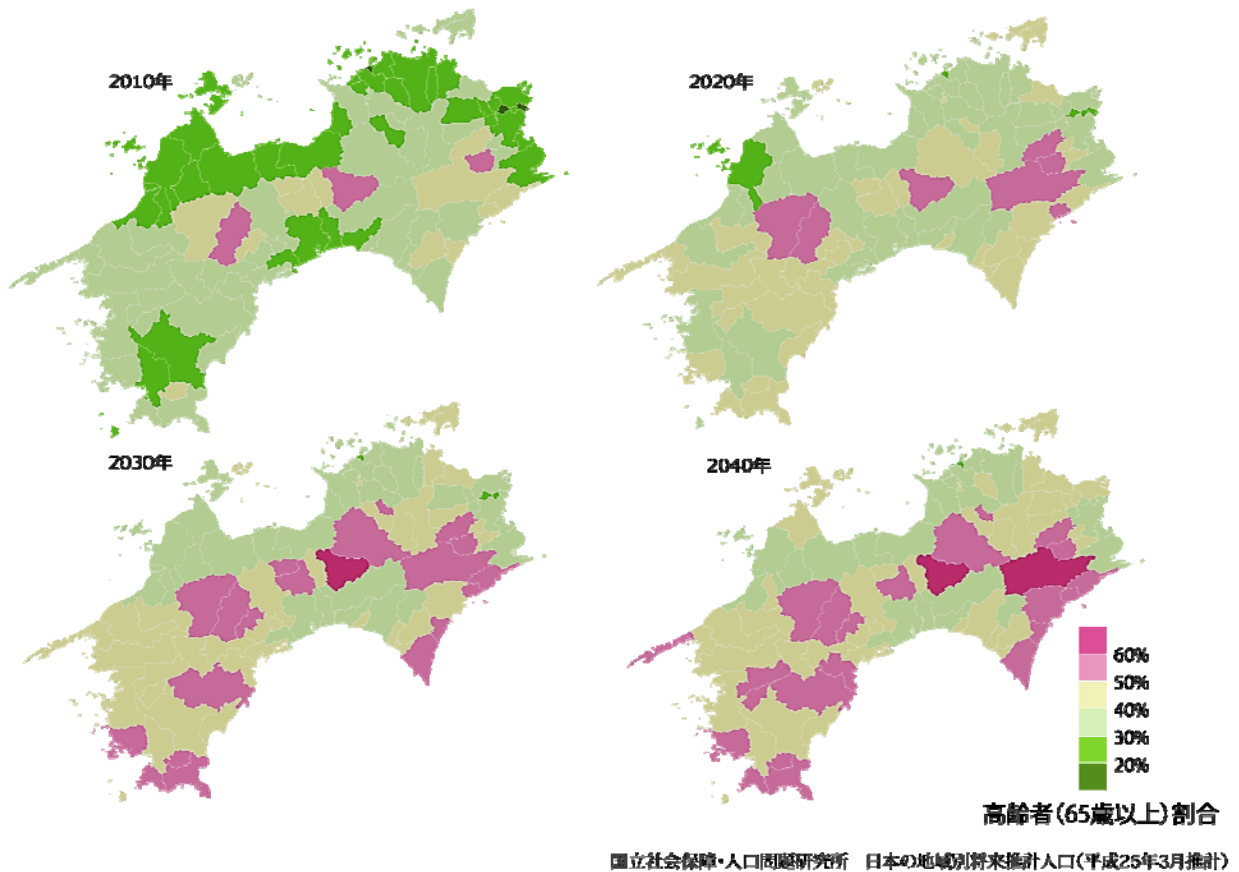
総務省 平成22年国勢調査



③四国の将来推計人口



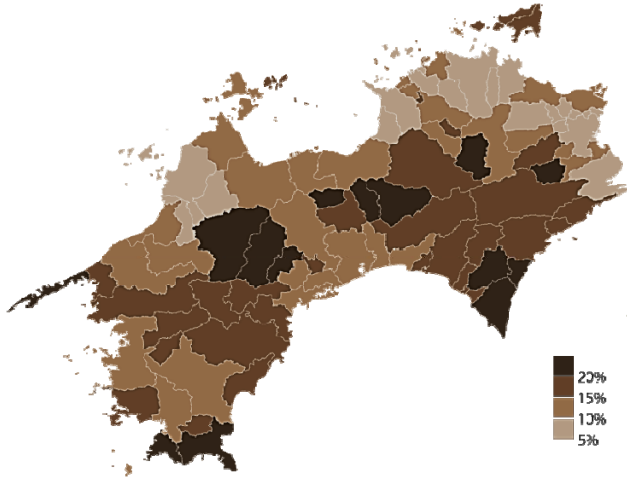
④将来の高齢人口割合



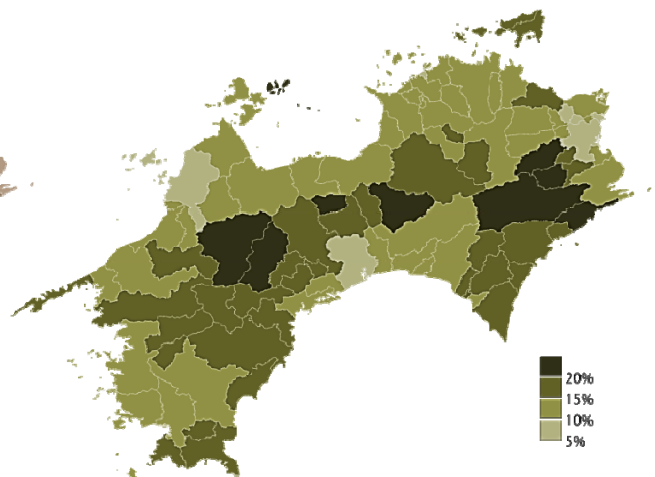
⑤高齢者の世帯構成

平成22年国勢調査

高齢単身世帯数割合



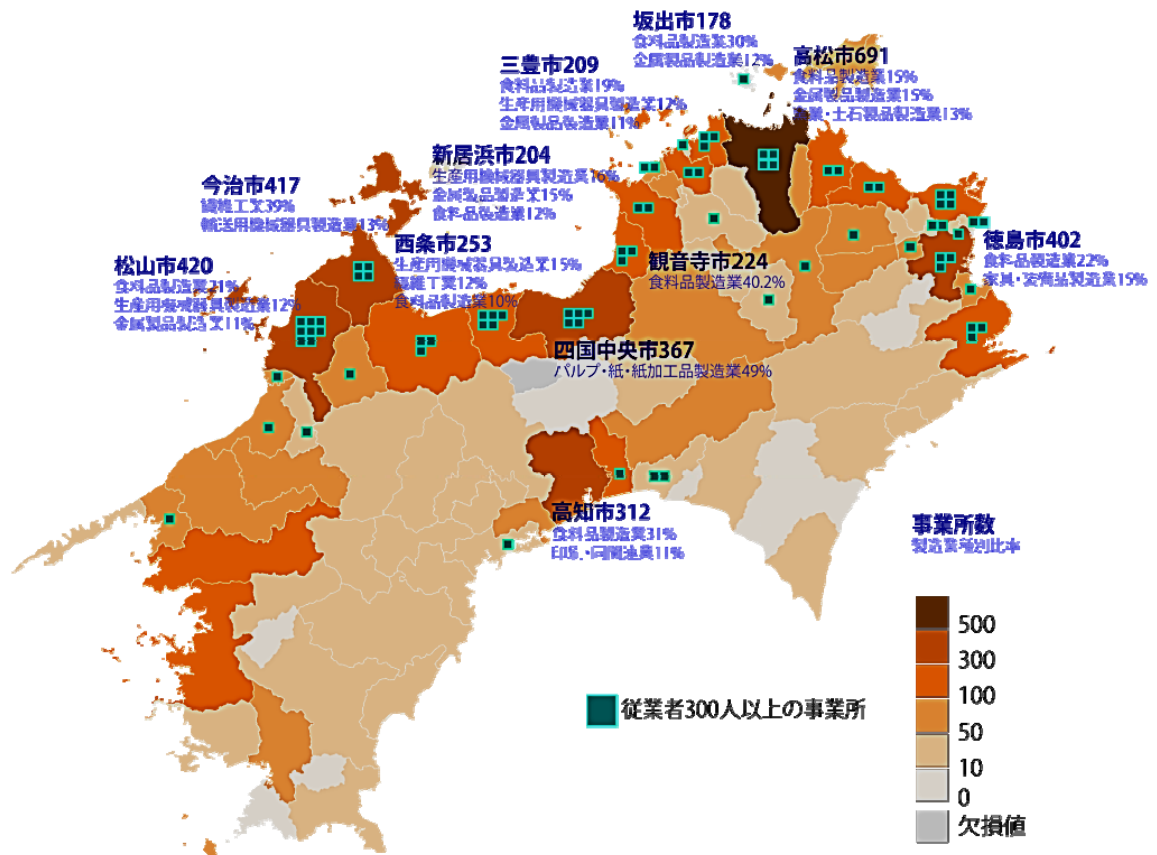
高齢夫婦世帯数割合



⑥製造業事業所数

経済産業省 平成22年工業統計表(平成24年4月)

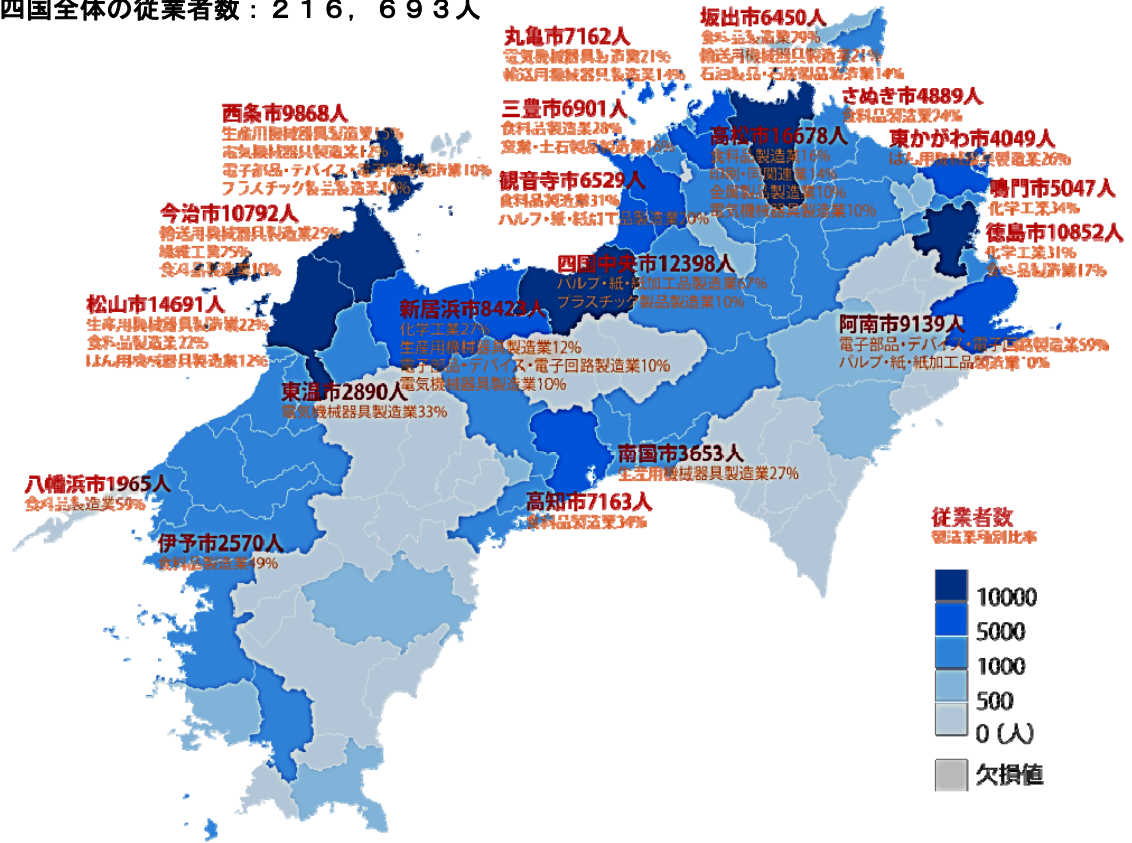
四国全体の事業所数：7,165



⑦製造業従業者数

平成22年工業統計表（平成24年4月）

四国全体の従業者数：216,693人

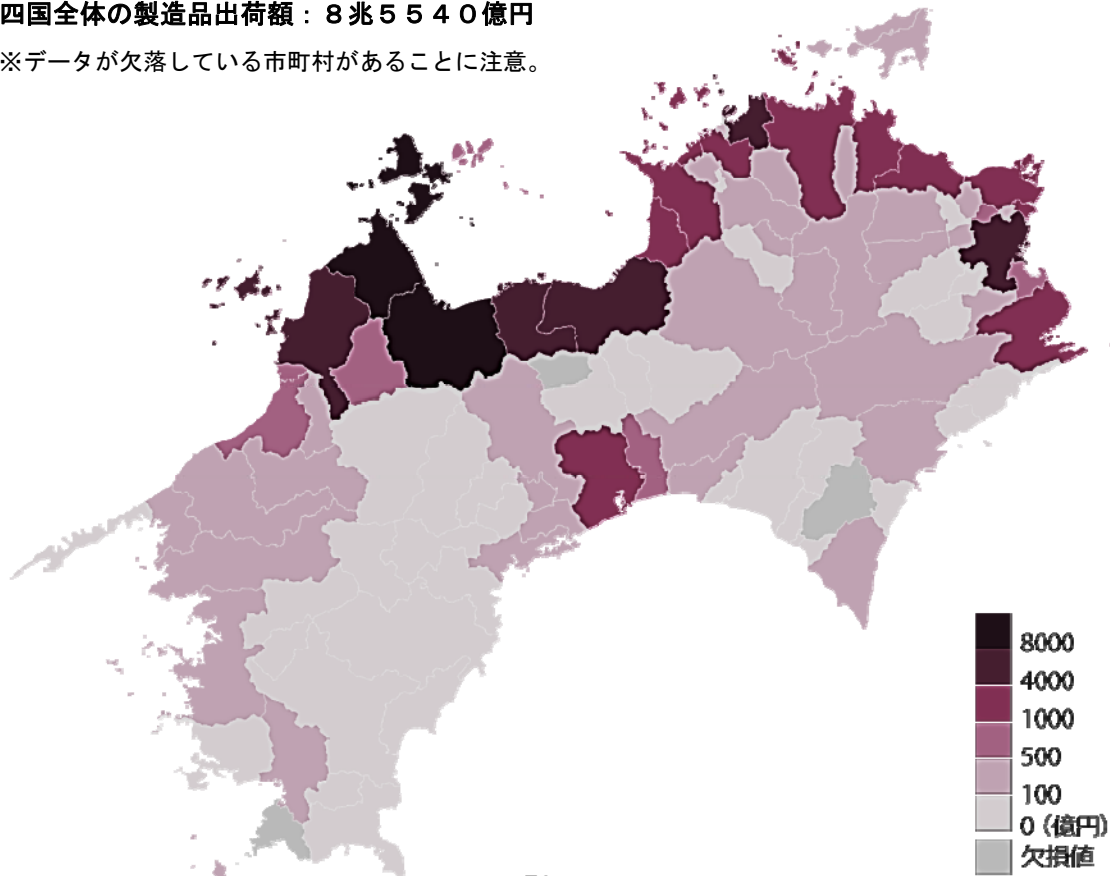


⑧製造品出荷額

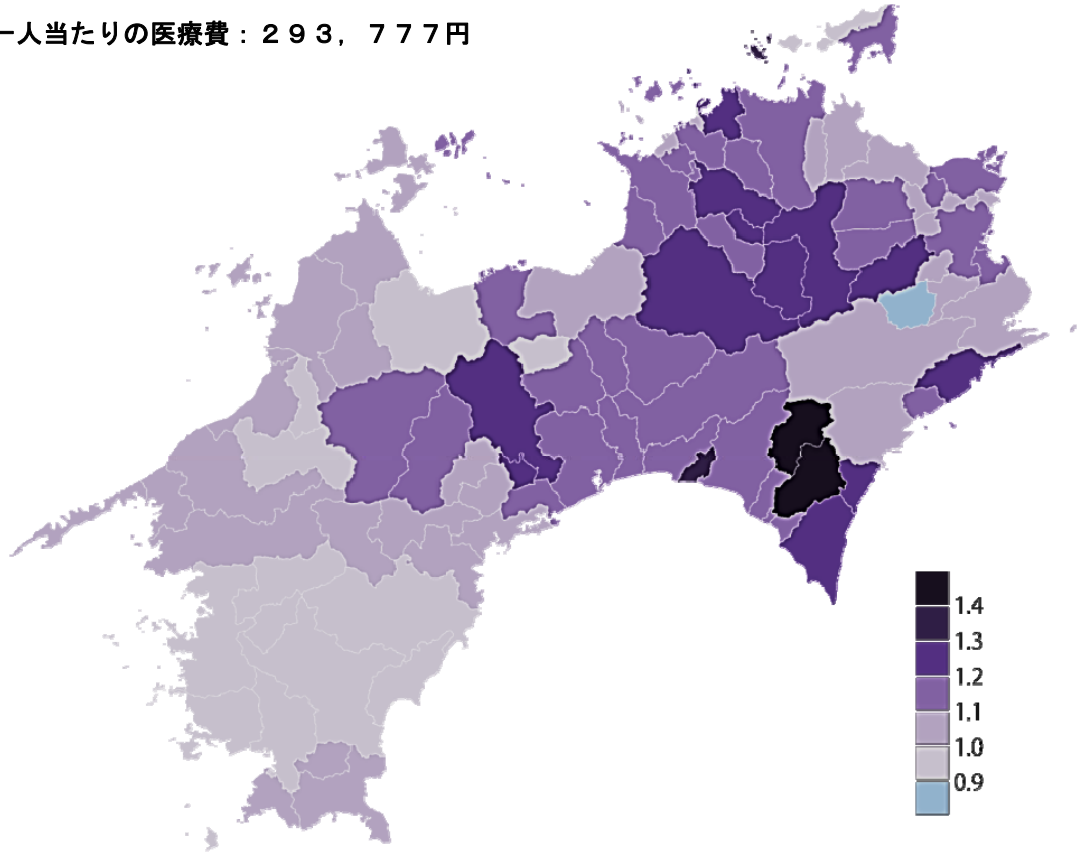
平成22年工業統計表（平成24年4月）

四国全体の製造品出荷額：8兆5540億円

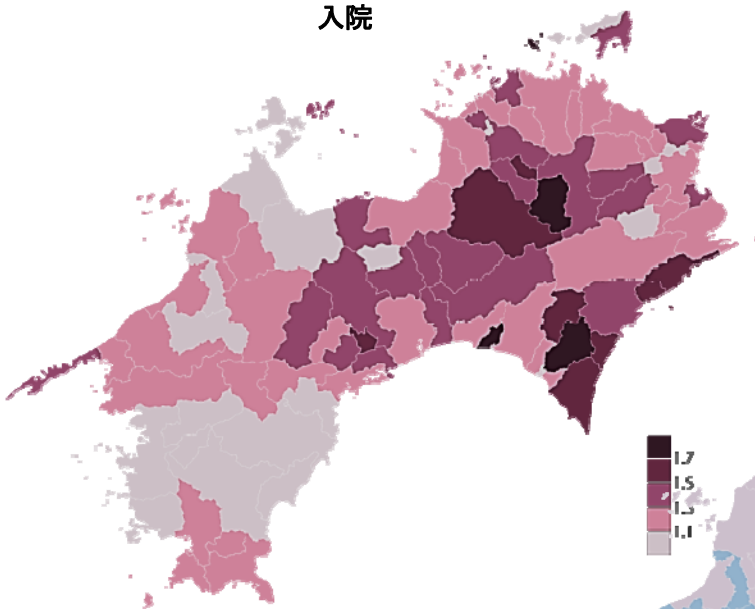
※データが欠落している市町村があることに注意。



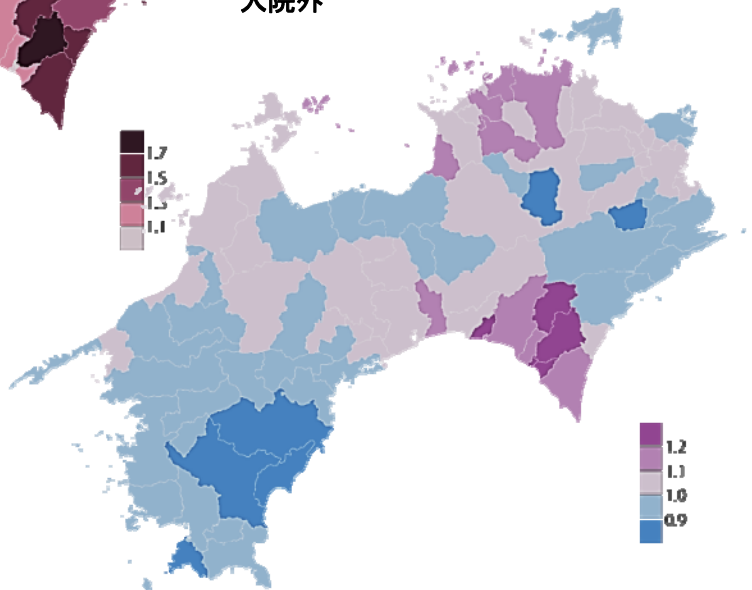
⑨医療費地域差指数（入院、入院外、歯科の合計） 厚生労働省 医療費の動向（平成22年度末）
一人当たりの医療費：293,777円



⑩医療費地域差指数（入院、入院外）
入院



入院外

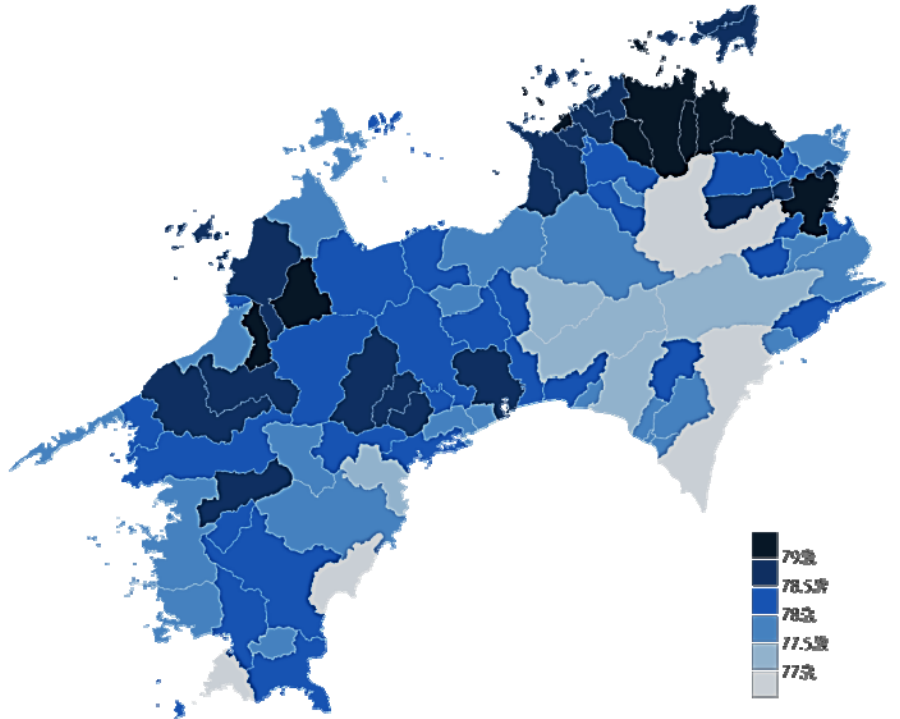


⑪生命表

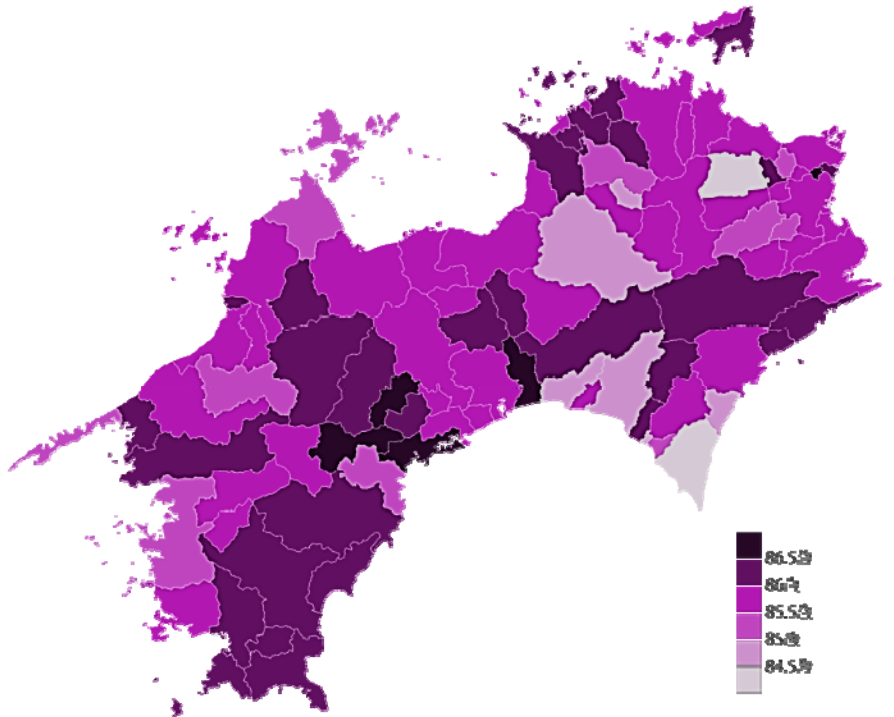
厚生労働省 生命表（平成17年）年

※データが古いことに注意

男性



女性



(参考2) 四国研究プラットフォームについて

◆目 的

四国の大学と産総研が、技術ポテンシャルの融合や補完などに取り組む「場（環境）」を整備し、地域社会活性化に向けて力を結集する。

◆研究プラットフォームづくりに向けた取り組み

- 平成17年 8月 四国5大学・産総研連携協力・推進協定締結
- 平成18年11月 高知工科大学・産総研連携協力・推進協定締結
- 平成21年 3月 「四国力協創産学官共同体構想」を、5大学、四国経済連合会、4県が提案（産総研四国センター、高知工科大学は協力機関として参画）
- 平成21年 6月 第15回大学・産総研四国連絡協議会（合同）において、「食と健康に関する四国力協創産学官共同体構想」の再構築で合意。
- 平成22年 9月 四国国立大学協議会において、研究プラットフォーム構想を報告・討議。高知工科大学学長に報告。
まず、「食と健康」分野で取り組むことで合意。
- 平成22年12月 四国研究プラットフォーム第1回実務者会議に報告。
- 平成23年 4月 産総研四国センターから「食と健康」研究プラットフォーム企画案を提案。
- 平成23年10月 四国研究プラットフォーム第2回実務者会議にて平成23年度の活動を報告。
- 平成24年 2月 四国国立大学協議会において、学長に報告・討議。高知工科大学学長に報告。
- 平成24年 5月 四国研究プラットフォーム第3回実務者会議開催。「食と健康」研究プラットフォームの継続と分野拡大について討議。
その後、平成24年度は、「四国・住みたいまちに生きる」をテーマに検討することについて了解あり。

◆四国研究プラットフォーム実務者会議メンバー（平成24年度）

徳島大学	野地 澄晴	副学長・理事（研究）
鳴門教育大学	前田 英雄	教授
香川大学	大平 文和	理事（評価・社会連携）
愛媛大学	矢田部 龍一	副学長・理事（社会連携・渉外）
高知大学	受田 浩之	副学長
高知工科大学	木村 良	研究本部長
産総研	松木 則夫	四国センター所長
	吉田 康一	健康工学研究部門長
	三木 啓司	上席イノベーションコーディネータ

◆平成23年度の主要な取り組み（「食と健康」）

①『提言集「研究者が語る、食と健康！」』発行

10年先の四国を展望しつつ、「人が健康に生きる」ための課題、ソリューションについて、大学（16名）及び産総研（4名）にインタビューし取りまとめ。

②3ワーキンググループでの検討

生活習慣病克服を目標に、研究開発および新ビジネス創出の視点で、「体の測定」、「心の測定」、「食の評価」の3テーマに分けてワーキンググループで議論。議論を踏まえ、研究提案に向け産総研事務局内での検討継続中。

③人材育成事業（「食と健康」医農工連携人材育成のための連続講座開催）

6大学、四国企業、自治体及び産総研が協働し、薬事法入門、医療機器とものづくり技術、医療現場から発信、食品衛生、食部工場、農水産物機能性成分などに関する講座を組み入れたカリキュラムを設定し、四国内各県都で合計5回開催。講師資料をテキスト集として発行。

④『四国まるごと「食と健康」イノベーション2011』による情報発信

10月1日（土）～11月30日（水）の2ヶ月間に開催される「食と健康」に関連するイベント及び各大学の研究シーズの紹介を目的に作成。産総研四国センター「研究プラットフォーム」バーナに掲載。

（本情報発信は、平成22年度から実施し、平成24年度も継続）。

四国の6大学と産総研の四国研究プラットフォーム
「四国・住みたいまちに生きる」ワーキンググループ中間報告1

発行日 2013年(平成25年)5月31日
(編集・発行)独立行政法人 産業技術総合研究所 四国センター (AIST Shikoku)
四国産学官連携センター
〒761-0395 香川県高松市林町2217-14
TEL : 087-869-3550 FAX : 087-869-3554
E-mail : shikoku-mail-ml@aist.go.jp
URL : <http://unit.aist.go.jp/shikoku/>

<無断で本書の記載内容を引用、転載することを禁じます。>

ISBN978-4-9907234-0-8